

世界を紡ぐために

しまらくだ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、ヒーロー達の陰で平和を望み、それを叶えようとする少年の物語である

世界は複雑で残酷だ、それでもきつと世界は誰もが考えているよりもずっと優しい

科学と魔術が交差するとき物語は紡がれる

目次

観測者編（オリジナル）＜原作以前話＞

空目結弦 1

観測者 6

助言 13

思惑 18

禁書目録編（とある魔術の禁書目録）

序章 23

魔術 28

英雄 35

魔術師 44

記憶 52

選択 63

心 75

幻想御手編（とある科学の超電磁砲）

幻想猛獣 81

吸血殺し編（とある魔術の禁書目録）

吸血鬼 95

理由 100

偽物 109

偽善者 123

黄金鍊成 130

差異 145

妹達編（とある魔術の禁書目録・とある科学の超電磁砲）

樽 152

実験 180
クロールン 169

観測者編（オリジナル）＜原作以前話＞
空目結弦

『学園都市』

東京都の3分の1程の大きさを持ち総人口230万の内約八割が学生というその名の通りの都市である。

そんな学園都市にはもう一つの普通とは異なる特徴を持っている。
『超能力開発』

ここでは超能力が科学的に実現可能になっており、この街に住む学生はその教育を受けている。

その教育の中で無能力者^{レベル0}、低能力者^{レベル1}、異能力者^{レベル2}、強能力者^{レベル3}、大能力者^{レベル4}、超能力者^{レベル5}という6つの強度に分類されている。

とは言え、その中の六割弱の人間は無能力者^{レベル0}というレッテルを貼られてしまうのだが・・・

そんな漫画やアニメの世界のような能力開発の教育が行われていても本質は学園都市の名の通り、学生のための街である。

「おつかれ〜」

「は〜、なんで学校つてあるんだろう・・・」

「先輩になって新一年もいるのに始業式から何言ってるんだか」

『せいかんこうとうがっこう星間高等学校』

全二三の学区からなる学園都市の第七学区に存在する高等学校の1つであり、本日は四月六日、つまるところが始業式である。

在校生は学年が上がり、中学生は入学を終え、新たな学校生活をスタートさせる日であり、新たな環境に置かれ、これからのことに思いを馳せる学生もいる。

そんな、おめでたい日である、基本的には・・・

しかし、今日の始業式も終わり下校中の学生達は個々に感想を言っており、愚痴をこぼしている学生少なくない。

そして、ここにも新一年生にして愚痴をこぼしている学生がいた。

「やつと終わった、学校の式つてどうにも退屈だな」

『空目結弦』
うっめゆづる

今年からこの星間高等学校に入学した新高校一年生の一人である。

「確か食材ストックなかつたよな、半日で終わるうちに買い物行つておくか」

先ほども述べた通り、この街は学生が多く住む街であり、超能力という異能の力を実現している性質上科学の進歩も著しく外の世界とは20年〜30年の差があると言われている。

そのため、秘匿性も高く、外周は高さ5メートル以上・厚さ3メートルの壁に囲まれ、完全に外部と隔離されている。

そのため、親元も離れて暮らす学生がほとんどで一人暮らしをする学生も多く存在する。

結弦もそんな一人暮らしをする学生の一人である。

「出来るだけタイムセールとか狙いたいよな〜」

そんな一人暮らしの学生にとっては割と死活問題の愚痴をこぼしながら携帯電話で安売り店舗探しながらを歩いていると・・・

「どろぼう〜〜〜」

「？」

前方から大きな声が聞こえたため視線を携帯から前方に移すと・・・

「邪魔だ！どけ！」

大柄の男がカバンを抱え、人込みをはねのけながらこちらに向かってきていた。

「ひつたくりかな？」

先ほどは声の内容と照らし合わせながら現状判断を行うと、その場から姿を消した。

大柄な男は周りの人をはねのけることに意識がいつっており、前方で人が消えたことに気づいていなかった。

「よし、このまま逃げ切つて・・・!?!」

次の瞬間男は何かに躓いたようにいきよよく盛大にこけてしまった。

「いつつ．．．一体何が？」

男は何が起こったかが理解できず、周りを見渡していると、こけた拍子に放してしまったカバンがスツと空中に浮いた。

「!?」

その光景に驚いていると声と同時にカバンを持った状態で先ほどその場に姿を消した結弦が姿を現した。

「あんまりひったくりは良くないですよ？ジャツジメント風紀委員とかアンチスキル警備員だっていますし」

「うるせえ!!」

「そんな突っかからなくても」

「なんの能力だ！」

「はあ、そんな人の能力気にする前に逃げるなりはしなくていいんですか？」

「ふん、逃がしてくれるのか、それならありがたくお言葉に甘えさせてもらうぜ」

目の前の少年は自分を見逃してくれるらしい。

ひったくりこそ成功しなかったが、先ほど少年が言うようにこの街には風紀委員や警備員といった治安組織が存在する。

その治安組織に捕まるよりは余程ましである。

そう結論付け逃げるために走りだそうとしたその時。

「逃がすと思います？」

「!?」

男の上にツインテールの制服を着た女の子が乗っかりながら、男の腕を後ろに回し抑えていた。

「風紀委員ですのー！ひったくりの現行犯でご同行をお願いします」

男はあっけなく捕まったのである。

少女がひったくり犯を拘束後、5分と経たずに警備員が到着し、犯人を連れて行った。

「これ、カバンです。二度目がないように気を付けて下さいね」

「ありがとうございます」

犯人も無事捕まり、結弦はカバンを持ち主に返し、持ち主はお礼を言い街並みの中へ戻って行った。

「ふ〜」

カバンの持ち主を見送り本来の目的の買い物に行こうとしたとき…

「お待ち頂けますか？」

「はい？」

犯人を捕まえた少女に呼び止められ、結弦は足を止めた。

「私は風紀委員一七七支部の白井黒子しらいくろこと申します」

「…星間高等学校一年の空目結弦です」

「ご協力感謝致しますわ」

「いえ、大したことではないので」

「ただ、犯人を逃がそうとしましたね？」

「すみません、カバンは取り戻しましたし、腕章を付けているあなたが見えたので、時間稼ぎをすればいいかなと…」

「…」

結弦の発言を聞き黒子は疑っているのかジト目でしばらく見た後に…

「まあ、無事犯人も捕まえられましたしよしとしますか。協力出来るのであれば、危険がない範囲でなら協力して頂いて問題ありませんからね」

「頭にとめておきます」

その答えを聞き、とりあえずは納得したのか、黒子は踵を返し歩いて行った。

結弦はその後ろ姿を眺めながら…

(治安活動か…)

なにか思うところがあるのか、少女の背中を見てそんな感情を抱きながらも、偶然にも居合わせた事件が解決したため、本来の目的である食材の買出しに戻るため結弦もまた踵を返した。

結弦がその場を後にした、街並の中にある狭い路地からスーツの男が携帯電話で会話をしながら姿を現した。

「はい、空目結弦を発見しました、これから接触を試みます」

学園都市で様々な思惑がうごめき始めていた。

観測者

ひったくり事件解決後は何事もなく、結弦は無事スーパーでの買い物を終えていた。

「今日は安い店が近場で良かったな、遠くになると能力使ったりしないと時間が掛かるし、やっぱり楽に越したことはないな」

結弦は学園都市での超能力開発によって大能力者^{レベル4}の認定を受ける程の能力を有していた。

しかし、その能力に頼りすぎるのは良くないと考えており、必要以上能力を使用する事を避けていた。

故に今日みたいな近場で買い物を買わせられるに越したことはないのである。

「さて・・・」

目的も終え、後は自宅に帰るだけのはずなのだが、帰宅途中の人通りがない道に入った所で足を止め、振り返った。

「そろそろ出てきたらどうですか？」

結弦が背後に向けて話しかけたら、スツとスーツの男が姿を現した。

「お気づきとは思いませんでした」

「それはどうも、気づいたのはスーパーを出た辺りからですが、もしかしてもっと前からつけてました？」

「ご想像にお任せします」

「・・・失礼ですが、そもそもあなたはどなたですか？」

「私はただの代理人です、命を受け、お迎えに参りました、ご同行をお願い致します」

「代理人？一体どなたからの命ですか？」

代理人やら命令やらの単語が出てきたため、キナ臭さは感じながらも、とりあえず話を聞いてから判断しようと考え、先を促した結弦だったが、出てきた名前を聞き、軽い気持ちで聞いたことを後悔した。

「学園都市統括理事長である、アレイスターⅡクロウリーです」

「それでは私はここで失礼します」

出てきた名前に驚いた結弦だったが、単純な詐欺等で騙すにしては向いていない上にそんな軽い名前でもなかったためにとりあえず男に従い、連れてこられたのは小さな廃ビルの一室だった。

「え？自分はどうすれば？」

「あとはそちらの女性が案内致しますので」

そう言って男がさした先には女性というよりは少女という言葉が似合う人物が立っていた。

少女は髪を後ろに束ねており、冬服の制服に袖を通してなく、上半身裸で、薄いインナーのような布を胸の所に巻いているという特徴的な格好をしていた。

少女の格好を確認した上で、直視するのは申し訳なく思い視線を男の方に戻したが、その時にはもう男の姿はなかった。

(これはいよいよキナ臭いな・・・失敗したかな)

ついてきたことに改めて後悔し、今からでも退散しようかと考えていると・・・

「移動するから肩につかまってももらえるかしら？」

「あ、はい」

気づいた時にはどうにも後には引きにくい空気になっていた。

結弦が少女の肩につかまった次の瞬間には、知らない建物らしき物の中にいた。

(テレポート？白井さんもテレポーターぽかったし、今日はやたら縁があるな)

「じゃあ帰る時にまた来るから」

「え？あ、はい。ありがとうございます」

結弦はあつけにとられながらもお礼を言うため声の方へ向くと、少女は何故か少し具合が悪そうにしていた。

結弦は大丈夫か尋ねようかとも考えたが、次の瞬間には、少女はいなくなってしまった。

一人になったため、改めて現状判断をしようと辺りを見渡している

と違和感を感じた。

建物の中だろうとは想像は出来るのだが、窓もドアも廊下も階段も通気口も設けられておらず、密室状態なのだ。

しかしだからこそ納得出来ることがあった。

『窓のないビル』

学園都市第七学区に存在し、学園都市統括理事長がいるとされる建物である。

(しかし、統括理事会、それも理事長直々の呼び出しとは、悪い予感しかしないな)

『学園都市統括理事会』

学園都市の運営に携わる、トップの十二人で構成されている委員会であり、学園都市のありとあらゆることを掌握している重要な人物達が所属している組織である。

そんな組織延いては学園都市のトップにあたる人物からの呼び出しなのである。

そんな憂鬱な気持ちでいると

「そんな所で立っていないでこちらへ来たらどうだ、空目結弦」うっめゆづる

そんな自分を呼ぶ声の方見ると、赤い液体の入った円筒の筒の中に逆さになった人間がいた。

「それで、理事長直々にどういった御用ですか、そんな悪いことした覚えはありませんが?」

「そんなに警戒しなくてもいい、どちらかというところにも十分なメリットがある話だ」

「メリット?」

「私の目の代わりとして『観測者』なるつもりはないか?」

『観測者』?」

「そう、見ての通り私はここから出られない、しかし、立場上様々な事を知る必要がある」

「そこで自分にそのための目になって欲しいと?」

「察しが良くて良いことだ」

「・・・」

とりあえず要件を聞き、結弦は状況を考えていた。

唐突のことで要件整理をして考え纏めたいのだ。

確かに目の前の人間は表向きはここから出られそうにない、その上で様々な情報を得る必要があるというのも立場を考えれば納得は出来る、しかし・・・

「2つ・・・いや3つ質問があります」

「なんだ？」

「1つ、なぜ自分に？」

「主な理由は3つある、1つは君の能力【光源操作】トリッククライトがこの役目に適している」

【光源操作】トリッククライト

結弦が持つ超能力で本質は光の操作である。

汎用性は高く、光を自在に操ることにより、波長、波形等の操作によって、レーザーを作り凶器化させることや屈折率を操ることによって自分の幻影や相手から見えなくしたりすることが可能とする。

ひたたくり事件の際に消えたように見えたのは正にこれである。

「情報は集めてほしいが、あまり表だった行動は避けてもらいたい、そのために適しているということだ」

「・・・音は出ますよ？」

「それはやり方次第だろう」

「2つ目は？」

「超能力開発には、パラメーターリスト 素養格付というものが存在している」

「素養格付？」

「超能力者は予めどの程度成長が見込めるかが判明している、そのリストと考えれば良い」

「な!？」

「それにより、君は超能力者^{レベル5}になり得る可能性を秘めていることが判明している」

「・・・」

「その成長を促すためと考えるてもらってかまわない」

結弦はアレイスターの話に聞き驚いていた。

自分が超能力者になり得るということにも少なからず驚いたが、何よりも驚いていたのは素養格付の方である。

もし、そんな物が実在するのであれば、最終的に低レベルで終わってしまう学生の教育には力を入れず、高レベルに到達出来る学生に注力するという構図が出来上がってしまう。

つまり、能力者間の差が余計に広がってしまう。

それだけではない、仮に最終的に異能力者²に到達出来る学生がいたとして、大人達に見捨てられ、教育を受けられずに無能力者⁰の判定を受けてしまったら？

学園都市に来る学生の中には超能力に憧れてくる者も少なくない。にも関わらずその夢を大人達の都合で潰えさせ得るのだ。

「そんなこと自分に教えて大丈夫ですか？」

「少しはこちらのカードも見せないと、信用も出来ないだろう？口外しない約束はしてもらうがな」

結弦はこの事実を受け入れられないと思ったが、だからと言って対応策がすぐに思い浮かぶはずもなく、今は目の前のことに集中することにした。

「・・・あと一つは？」

「君の性格、いや、性質といえは分かるのではないか」

「それも知った上での勧誘とは、随分いい性格してますね」

結弦はここまでの会話の中で目の前人間は見た目に反さず、不気味で底が知れないという感想と共に畏怖していた。

おそらくこの人は敵わないと、少なくとも今は・・・

「2つ目に、多分ですけど学園都市内部のことであれば、その役目必要ないですよね？」

「その根拠はなんだ？」

「もし内部で必要なら、勧誘するのが今更過ぎる上に、自分のことをよく存じているようでしたので、まあ、前任者がいた可能性も否定できませんが、仮に前任者や同じ役目の方が複数人いたとしても少々効率が悪そうなので、だったらもつと別の方法を用意してそうと思っただ

けです」

「想像以上に頭が回るようだ」

「褒め言葉と受け取っておきます。ということは引き受けた場合学園都市外部が中心ですか？」

「いや、双方お願いするつもりだ、外部はもちろん、内部にしても私以外の目線と言うのは有意義なものだ、そして何よりそちらとしてもその方が良いでしょう?」

「・・・」

結弦は目の前の人間は、全てを知った上で話を持ち掛けていることを改めて実感していた。

その上で自分のことを利用しようとしているのだと・・・

「それであと1つの質問というのは?」

「ああ、なぜこのタイミングで声がかかったのかと思ひまして」

「備えあれば患いなしというだろう」

結弦はこのアレイスターの答えを聞き、やっと同じ人間として付ける隙を見つけた気がした。

「私の代わりといっても強制はしない、この場はもちろん、話を引き受けた場合でも、『観測者』としての仕事も含め拒否権及び、選択権もある、もし、『観測者』を途中で降りたいと思えば、好きな時に降りてもらっても構わない、基本ギブアンドテイクと考えればいい」

「ギブアンドテイクな割には基本的には同じ情報を共有するわけですから、こちらが弱い気もしますが?」

「無論、報酬も別に用意する」

「随分太っ腹な上に緩いですね、裏に何かあるんですか、もしくはそこまでせざるを得ないとかですか?」

「どうだろうな」

「否定はしないのですね」

お互いの中に不穏な空気が一瞬流れたが、何事もなかったように結弦は話を続けた。

「少し考えたいので、明日お返事しても良いですか?」

「かまわない」

その後、テレポーターの少女に外に案内してもらい（帰りも体調のことを聞く前に行ってしまった）、今度こそ帰路についていた。

『観測者』か・・・」

本日あったことを思い返しながら帰宅していた結弦であったが・・・
「とりあえず・・・疲れたから、明日改めて考えよう」

今日所は休むことにした。

助言

結弦はベッドの上で外から鳥の声がしていることに気が付いた。

「朝か・・・」

昨日、ひつたくり事件に巻き込まれ、その後まさかの統括理事長様から直々に呼び出されたと思えば『観測者』なるものならないかと提案されたが、その場での回答を保留にして帰ってきていた。

「結局一睡も出来なかつたな」

家に到着後、件のやり取りが思っていたより精神的きたのかどつと疲れがきていた。

そのため、スーパーで購入した食材をしまつてすぐにベッドに入ったのだが、入ったら入つたで眠れなかつたのである。

「自分で思ったより『観測者』のことを気にしてしまつてるな」

昨日の会話を思い出す限りでは相手には自分のことを知られていくようであった。

ならば、気にしてしまつてる時点で相手の思惑にまんまと嵌つてしまつてる。

そう自覚しながらもやはり気にしてしまつている自分に対し、思わず笑みをこぼしていた。

先ほどを言ったように結弦は精神的疲労は感じているが一睡もしていない。

しかし、結弦の職業は学生であり、昨日は始業式である以上本日から授業開始である。

流石に体調が優れないということでも考えたが、初日から休むことは避けた方が良くと考え、通学の上、何とか乗り越えようとしたのだが・・・

クラスメイトや担任から

「大丈夫？」

「保健室行った方がいいよ？」

「空目、本当にきついようなら早退してもいいぞ」

と心配されたため、自分が思ったより酷い顔をしていたことを知ると同時に結局失敗したのではないかと後悔しながら、一日を過ごすこととなった。

そんなこんなでいろいろありはしたが無事放課後を迎えた。

これから昨日の返事を伝えに行かなければならない。

とはいえ、返事など最初から決まっていたのだが・

(見事に掌で踊らされてるなく)

そのことに若干の自己嫌悪を覚えたが、その程度で返事が変わるはずもなかった。

結弦が返事をするため、昨日の廃ビルに向かっていると、声をかけられた。

「その少年、ちょっといいか?」

「自分ですか?」

結弦は自分で正しいのかを確認をしながら声の主を確認した。

声の主は少女だった。

肩まである長い黒髪をカチューシャでまとめている。

制服を来ていることから年も年は結弦と同じくらいだろう、スタイルが良いせいかサイズ合っていない。

その少女は面白い物でも発見したかのように興味深そうに結弦を見ていた。

「そう、お前だ。お前が、空目結弦うつめゆうるで間違いないか?」

その発言を聞き、結弦は警戒心を強めた。

自分はこの少女とは初対面のはずだ、少なくとも結弦には今まで会った記憶はない。

ただでさえ、昨日から統括理事長に目を付けられたのだ、そして、このタイミングで自分のことを知ってるらしき謎の少女のご登場だ、警戒しない方がおかしい。

結弦が警戒から身構えていたが、少女はそれを見て一人で納得したのか面白そうに今度は笑みまでこぼしていた。

「やはりそうか、今から理事長様の所に向かうのか？」

「・・・あなたは？」

「おっと、これは悪い。自己紹介がまだだったな。私は、雲川芹亜。くもかわせりあ。こう見えて、統括理事会の一人、貝積継敏かいづみつぐとしのブレインを務めている。」

芹亜は実に楽しそうにかつ軽い調子で告げる。

「少しだけお茶に付き合ってもらいたい」

「私はホットコーヒーで、お前はどようする？」

「同じ物を」

「ホットコーヒーおふたつですね、少々お待ちください」

現在二人は喫茶店にいた。

「私が誘ったんだ、この場は払うよ」

「ありがとうございます」

お礼を言いながら結弦は改めて目の前少女を見た。

彼女は自分のことを統括理事会の一人のブレインと言っていた。

ならば、昨日の今日だ、何か思惑はあるのだろうか、情報を得るためにも会話をすることには大きな価値がある。

そのためにも、まずは相手の目的を聞こうとしたところで、先に切り出したのは芹亜の方だった・・・

「体調が悪そうだが大丈夫か？」

「少し寝不足なだけですよ」

「アレイスターからの提案をそこまで考えるのか」

「先ほども思いましたが、知ってるのですね」

「おそらくお前が思っているよりは秘匿にされていないよ、少なくとも私達にはだがな」

結弦は少なからず驚いていた。

昨日の話を聞く限りでは、出来る限り表だった存在にはしたくないようであった、それならば、知っている人物は少ない方が良いはずだ。にも関わらず少女が言うにはそれほど秘匿にはされていないらしい。

となると実は隠す必要はないのか、若しくは統括理事会は別なの

か・・・

「おそらくお前の考えは正しいよ」

「・・・何のことですか？」

「案外聡いな」

「統括理事会の一人のブレインをしている方にそう言われるとは、光栄ですね」

「お待たせ致しました、ホットコーヒーでございます、ごゆっくりどうぞ」

会話が一区切りついた所で店員がコーヒーを持ってきたため、一息つくため、お互いにコーヒーを飲んだ。

結弦が改めて芹亜を見ると、実に楽しそうにくすくすと笑っていた。

「?、何か？」

「いや、考えていたよりも楽しくなりそうだと思ってね」

「・・・それは良かったですが、そろそろ本題に入ってもらってもいいですか？」

「うん? ああ、そうだったな」

芹亜はまるで今まで忘れていたような調子で話始めた。

「とは言え、先輩として少し助言に来ただけなんだがな」

「助言ですか？」

「そうだ、お前がアレイスターからの提案を聞くかどうかはあえて聞かないが、どちらにしろお前は既に学園都市の闇に触れている、その意味をきちんと考えた方が良い」

「お優しいんですね」

「なに、私達のためでもあるから気にするな」

本心はともかく、少なからず表向きは目の前少女は自分のことを気にかけてくれていているらしい。

「そうですか、それでも心配して下さっていることには変わりないのでお礼を言っておきますね」

結弦はそう答え、残っていたコーヒーを飲み干し、席を立った。

「ありがとうございます、頭に入れておきますね。ただ、こつちも単純

に利用されたり、簡単にどうにかされるつもりはないですよ」

「そうであることを願っているよ」

そう言ってお互いに笑みをこぼした。

「コーヒーご馳走様でした」

そう言い残し、結弦は店を後にした。

芹亜は一人になった喫茶店の中で携帯電話を取り出し、誰かに電話をかけていた。

「私だ、ああ、話してみたが、及第点は満たしていたよ。今の所はとりあえず様子見で問題ないだろう。今後もう少しは期待していいだろうな。なに、大した手間ではないさ、私も興味はあったしな」

報告終え、芹亜は改めてコーヒーを口へ運んだ。

「期待しているから頑張ってくれよ、空目結弦」

思惑

結弦は芹亜と別れ、昨日の廃ビルに来ていた。

廃ビルに到着すると、窓のないビルへ案内を行ってくれていた少女が暇を持て余しているかのように懐中電灯をくるくると回していた。

「すみません、お待たせしました?」

「さつき来たところだから、気にしなくていいわ」

少女にそう答えられ、それが本心か社交辞令かは判断が付かなかったため、それ以上はこちらも気にしないこととした。

「そんなことより早くつかまってもらえるかしら」

「・・・」

「どうしたの?そのために来たのではないの?」

「大丈夫ですか?」

「?。何の話?」

「いや、昨日テレポート後に少し具合が悪そうに見えたので」

「・・・問題ないわ」

「そうですか、それなら良かったです」

一瞬間があったため、おそらく本当は何かあるのだろうとは思ったが、本人が言おうとしないことをこれ以上は聞かないことにした。

「すみません、お待たせしました」

「何、具体的に時間の指定をしていたわけではないだろう」

「そう言っただけだと幸いです」

結弦はやり取り後、緊張を少しでも解くために小さく深呼吸をした。

今までを考えればおそらくそんな結弦の心情は見透かされている。

しかし、例えば見透かされているように、結弦にとって今から重要な交渉を行うのだから・・・

「さて、それでは返事を聞かせてもらおうか」

「・・・ご提案頂いた『観測者』の件ですが、お受けします。ただし・・・」

目の前の人間は一体どこまで理解した上で、どこまでが計算なの

か、そして、どこまでどうやったらずで踊らされるだけの人形を脱出出来るのか、それを知る必要がある。

それためには、相手の迷惑を、手持ちのカードを探る必要がある。故に一度人形に堕ちるのだ。

しかし、ただで堕ちるつもりは無い。

「改めて内容を確認したいのと、条件が二つあります」

「条件？」

「あれ？一応そちらから持ち掛けられた話ですし、そういったこと出来る立場な気もしますが？」

「こちらは依頼ではなく、提案をしたつもりだったのだが」

「そちらが断った場合は、お互いに対してのメリットが一つ減るだけですよ」

「・・・」

「・・・」

まるで、お互いに探り合うような沈黙が続いていたが・・・

「ひとまず聞くだけ聞こう」

「ありがとうございます」

結弦は内心、一安心していた。

「それで具体的な内容は？」

「その前に確認したいのですが、仕事は内外問わない上で、仕事に対して拒否権及び、選択権もある。そして『観測者』を途中で降りたいと思えば、好きな時に降りられる。で、相違ないですか？」

「ああ、間違いない」

「途中でなかったことかにはしないですよね？」

「心配しないで良い、約束しよう」

（問題はここからだな）

結弦は改めて一呼吸おいてから話を切り出した。

「さて、では本題の条件ですが、一つ目にパラメーターリスト素養格付を直接見せて下さい」

「・・・」

「そちらのカードも見せるとのことですが、証拠が欲しいのですよ。」

見せてもらうだけで構いません」

「もう一つの条件というのは?」

「別に報酬も頂けるということでしたが、場合によってこちらから提案しても良いですか?」

「全てを聞けるとは限らないが?」

「構いません。そのための選択権であり、拒否権ですよね」

本当は他にもいくつか出したい条件はある。

しかし、先ほどアレイスターが言っていた通り、されたのはあくまでも提案だ。

あまり、条件を出すと向こうが引くことも十分に考えられる。

メリットが1つ減るだけとは言ったが、結弦にとっても願ってもない話である。

しかし、アレイスターにとってもこのタイミングで結弦に提案してきたことには、少なからず意味があり、価値がある。

そう踏んでいるからこそ、交渉をしようと考えたのである。

「それで返答は?」

「・・・良いだろう、その条件を飲もう」

「交渉成立ですね」

結弦はアレイスターからの返事を聞き、内心ほつとしていた。

「それで、引き受けたはいいですが、まず何をすれば?」

「今現在、取り急ぎは特にない、依頼をすることがあれば改めて呼ぶ」

「つまり、まだ自由していて良いと?」

「そういうことだ」

「そうですね、パラメータリスト 素養格付はいつ?」

「数日もらおうか、自分一人のだけで良いというわけではないだろう?」

「そうですね」

そう言い、結弦は男に背を向けようとたが、思い出したかのように向き直し、頭を下げた。

「改めて宜しくお願ひしますね」

「ああ、よろしくお願ひするよ」

「お互い良好な関係でありましょうね」
そう言い、今度こそ背を向けた。

あの後すぐに、少女が現れてくれたため、廃ビルに戻ってきていた。
「何度もすみません。ありがとうございます」

「大したことではないわ」

少女はもう用はないという感じで踵を返そうとした時

「すみません、お名前聞いてもいいですか？」

「・・・何故？」

「いえ、今後もお世話になることになったので、お名前くらいは聞いておこうかなと」

「そう、でもただ案内するだけでしょ？ 馴れ合うつもりはないわ」

そう言い残し、今度こそ踵を返し行ってしまった。

結弦は少女が行ってしまったのを見届け、ようやく緊張を解いた。

「ふ、何とか最低条件はクリアかな」

そう言いながらも、ここからがようやくスタートラインだと言うことは誰よりも自身が自覚していた。

（多分、こっちが出した条件も見透かされてた可能性も高いけど、そうであったとしてもただ掌で踊るつもりは全くないですよ、統括理事長、いや、アレイスター＝クロウリーさん）

結弦が案内人に連れられ戻っていった後に、一人になった部屋の中でアレイスターは思案する。

（多少遅れはしたが、観測者及び【光源操作】^{トリックライト}の確保も完了、これで【光源操作】の成長も当初より速く促せるだろう。出された条件も想定範囲内、大した問題にはならないだろう。【幻想殺し】^{イマジンプレイカー}の成長は今後次第だろうが、まあ、魔術師達が介入してくるまでに行う準備には十分だろう）

そう言う、アレイスターは薄い笑みを浮かべているようであった。
（さて、そろそろ計画を本格始動させるとしよう）

それぞれの思惑を胸に秘め、運命の歯車がゆっくりしかし確実に回り始めていた。

禁書目録編（とある魔術の禁書目録） 序章

学園都市はその名の通り、学生の街である。

その学生の大きな特徴の一つと言えば、長期休みだろう。そして、本日は七月十九日である。

終業式を終え、明日から夏休みということ、夜遅い時間にも関わらず、多くの学生が街をうろついていた。

結弦もそんな夜の街を出歩いていた。

しかし、ただ羽目を外しているのではなく、明確な目的地に向かっていったのだが・・・

「うう、不幸だーっ！」

「おるあ!!ちくしようにこのクソガキ止まれやこの逃げ足王!!」
「?」

階段を登りきった所で声が聞こえた一人の少年と多くの不良らしき大人数が追っている集団が通り過ぎていった。

（あれは流石に詳しい事情はわからないな）

目の前の光景を見届け、とりあえず止めには入った方が良いかと結論に至り、追いかけてよとしたのだが・・・

（なんだろ、デジャヴを感じるな・・・あれ?）

もう一人、制服を来た少女が通り過ぎていった。

「アンニャロ、もうちよつとだったのに!」

「あの人は御坂美琴さん?」
『御坂美琴』

学園都市で行われている超能力開発において、現状最上位に位置し、七人しか存在しない超能力者の一人、その第三位にして最強の【電撃使い】であり、『超電磁砲』の通り名まで冠する少女である。

学園都市において、超能力者自体は有名人である。

しかし、基本的にはその顔や詳しい素性までは出回っていない。

そのはずが、結弦は美琴を知っていた。

その理由は『観測者』としての仕事の関係である。

結弦が『観測者』になつて以降、今までは全てが学園都市内部での諜報活動を依頼されていた。

その中で、能力者や学園都市の闇の一端の情報を得ていた。

あまり知りすぎるのはプライバシー上よろしくないとも感じてはいたが、自身の目的のためでもあるためとして行動していた。

とは言え、意図的にある情報に関して遠ざけられているような印象は受けてはいたのだが・・・

「ねえ、あんなの放つておいて話の続きを・・・」

「ああ？まだいたのかアンタ」

『レベルアップ』『幻想御手』の入手方法とか・・・」

（『幻想御手』？確か今噂になつてる強度を引き上げる道具だっけ？）

『幻想御手』

現在、学園都市において都市伝説として学生の間で噂されている代物で、使うだけ簡単に能力の強度を上げると言われている。

（そんなものをどうして御坂さんが？）

そんなものが本当に実在しているかは別としても、彼女は超能力者である。

そのため、使う必要性は低いと思わざるを得ない。

（そういえば、最近事件が多くて風紀委員が忙しくしてたのような、確か御坂さんは白井さんとも接点があったようなことを見た覚えがあるし、その関係かな？）

そんなことを考えながら追いかけていると、美琴と不良集団が止まり何か言い合っていた。

「パワーアップして異能力者になったオレタチの力・・・見せてやる！」

そのセリフ後、美琴は少しあきれ顔を見せ、電撃を放っていた。

（御坂さんは良識人みたいだし、後は大丈夫かな）

結弦はそう結論付け本来の目的地に向かうため、踵を返した。

（『幻想御手』か・・・）

「こんな時間に呼び出しとは依頼ですか？」

「とある少年の身辺調査をお願いしたい」

「身辺調査？」

結弦はアレイスターに呼ばれ、『窓のないビル』に来ていた。

「上条当麻、明日から二八日までの間この少年に付き、その報告をしてもらいたい」

そう言つて、空中に一人の少年の画像が浮かび上がってきた。

（あれ？この人つてさつき不良に追われてた人？）

結弦はその画像を確認すると、先ほどここに来る途中に見かけた少年であつた。

「不満か？」

「・・・いえ、期間まで設けられているのも初めてですが、期限が具体的になので何かあるのかなと」

「すぐに分かる」

「何かはあるんですね」

アレイスターから頼まれた依頼は今までの物と比べ、少し特殊だつた。

先ほども述べていた通り、期限が設けられていること及び、それが具体的な点もそうだが、何より一個人、それも前情報もなしにその人の今後の報告を依頼されることは初なのである。

（いよいよここからが本番かな？）

アレイスターが自分に『観測者』の話を持ち掛けたのには、何か目的がある。

まずは結弦自身のためにもそれを知る必要がある。

しかし、今までは寧ろ結弦のための依頼のような感じがしていた。

そんな時にこの依頼である。

「何、そちらにとつても大きな価値がある情報が得られるだろう」

「・・・そうなんです」

先ほどのアレイスターの発言からも今回の依頼は断る理由はない。

そう考え、答えようとしたのだが、もう一つ今までと異なる条件を出された。

「それと、今回の別途報酬は先払いにさせてもらう」

「先払い？」

「ああ、とある物品をそちらの家で送っている」

「とある物品？」

「今回もだが、今後基本的にはそれを持ち歩くようにすることだ」

「それ自体は構いませんが、断った場合は？」

「断った場合でも、次の報酬として渡しておく」

「……」

「警戒しなくても良い、今後持っていて損はないだろう」

「分かりました、受け取っておきます」

いろいろと信用しきれない部分はあるが、警戒し過ぎても先に進まない。

そのため、この場合は受け取って置くこととした。

「それで、返答は？」

「一つ質問があります」

「なんだ？」

「内容を聞く限り、要は期間の間、対象の動向を確認の上で報告することですよね？」

「ああ、そうだ」

「ずっとではないですよね？」

一日二日程度なら、結弦一人でも張り付いておくことも可能だろう。

しかし、設けられた期間は九日間のあるのだ。

それほどの間、特定の人物に一人で張り付いておくのは、あまり現実的ではない。

「無論だ、最低限依頼したいタイミングはこちらで指示する。後はそちらのタイミングで好きに行ってもらって構わない」

アレイスターから提示された条件は妥協点としては順当な物だと分かり、結弦安心していた。

この条件であれば、万が一期間中に何か起こったとしても、指定されたタイミングでなければ、自由な行動が許されるからだ。

「返答を聞こうか」

「依頼をお受けします」

「そうか、では、上条当麻に関する基本データも後ほどすぐに渡そう」
「分かりました、宜しくお願いします」

そう言い、結弦はその場を後にした。

依頼を受けた後真つ直ぐ帰宅すると、家の郵便受けに小さな小包が届いていた。

「これか」

先ほどアレイスターが言っていた先払い品なのだろうと判断し手に持って家に入った。

「ふく、なんか疲れた」

今まででも何回か依頼は受けてきていたが、今回の依頼は持つ意味が異なる、そう感じたからかいつも以上に疲れを感じていた。

「さて、本当に吉が出るといいけど」

一息ついてから報酬に手を付け、小包を開けていた。

「なんだこれ？天然樹脂？」

小包の中に入っていたものはサイコロ程の大きさをした天然樹脂だった。

(何に使うかは分からないけど、少なくとも今回の依頼の間は身に付けておくように言われたし、とりあえず持ち歩くようにしないとな)

そう結論付けた結弦であったが、この天然樹脂が自身にとって本当に重要な意味を持ち、そして、もう一つの世界に通ずる物とはこの時はまだ知る由もない。

(いよいよそちらの思惑を見せてもらいましょうか、クロウリーさん)

魔術

七月二十日

結弦は昨日アレイスターからの仕事があったため、朝から対象の
上条当麻が住んでいる学生寮の前にきていた。

「来たはいいけど、どうするかな。多分、会話等も含めて確認していつ
た方がいいよな」

結弦の能力【光源操作】トリックライトは、光を操る関係で姿を消すことは出来る
が、音は操ることは出来ない。

本人が気を付けてれば、悟られずに近づくことや侵入行為等は可能
だ。

しかし、音声や会話の内容を知るため近づく必要がある。

（そう言った意味では自分なんかより、向いている能力なんて山ほど
ありそうだな）

そんなことを思いながら学生寮の周りを回りながら近づく場所を
探していた。

「やっぱりベランダからかな、全く不法侵入も甚だしいな」

能力を用いてベランダまで飛び上がり、そのまま姿を隠しながら動
向を見張る。

それが、現実的だと考え実行に移そうとした時・・・

「あれ？あれって人？」

結弦が上条当麻のベランダまで上がろうと思って視線を上げると、
ベランダに人が引つかかっていた。

「あれは、先に助けた方がいいかな」

『観測者』としての立場上、あまり表立ったことはしないようにとも言
われてはいる。

しかし、それはあくまでも『観測者』としてあり、空目結弦として
知り合えば、それほど問題にはならないだろう。

寧ろ顔見知りになっておくことで、いざって時の口実にも使える。

この状況なら、ベランダに上がっても言い訳は出来るだろう。

そう考え直し、改めて実行移そうとしたとき、今度は家の窓が開き、

布団を持った上条当麻が出てきた上で、引つかかっていた少女が目に入ったようでリリースしているかと思っただら次には悲鳴を上げていた。

（魔法名に一〇万三〇〇〇千冊の魔導書、それに魔術結社？）

あの後、上条当麻と件の人（少女）が部屋の中に入っていったのを確認後、当初の予定通りベランダまで飛び上がり、姿を消しつつ様子を見ていたのだが、二人の会話には聞き慣れない単語が飛び交っていた。

「学園都市こっじゃ超能力なんて珍しくもねーんだ。科学の力で説明出来ちまう」

「・・・よくわかんない」

「当然なの！当然なんだよ当然なんです三段活用！」

「・・・じゃあ、魔術？魔術だって当然なんだよ！」

二人の会話の中で魔術という単語（主に少女）が出ているのだ。学園都市は超能力開発を行っている。

しかし、魔術なんてものは取り扱っていない、そのため、現実味が持てない。

少女と直接話している上条当麻もイマイチ信用していないようだ。

（確かに魔術と言われてもピンと来ないけど、超能力自体が学園都市に限定された物ではない可能性はなくはないかな）

一般的に超能力開発は学園都市が行っており、それ以外で行われているという話は聞かない。

しかし、学園都市の協力機関も存在している上、『原石』という天然の能力者も存在する以上、全く夢物語として聞くが出来ない部分があるとは考えていた。

（何より、アレイスターさんは何かあるって言ってたしな、もう少し調べてみる必要があるかな）

そう考え、空いた時間に行動しようと考えていると・・・

「えつとな、この右手。あ、ちなみに俺のは天然素材生まれたときからんだけど」

「うん」

「この右手で触ると・・・異能の力なら電撃だろうが超電磁砲^{レールガン}だろうが、多分、神の奇跡だつて打ち消せます」

「え〜」

結弦は外で聞きながら納得がいくことがあった。

少年の話を信じるなら、少年の能力はこの学園都市においてもイレギュラーであろう。

しかも、おそらくその能力は超能力だけでは説明がつかない。

ならば、魔術でも説明出来るかは分からないが、少なくとも超能力以外のものがあつても良いだろう。

そして、なによりそんなイレギュラーな能力があるならば、監視の対象になる可能性も十分あるだろう。

(やっぱりここからが本番だな)

そう決意を新たにしていると、当事者二人は言い争いになっていた。

「・・・、ふうん、てか、つまりアレだ。それが本つつつ等に『異能の力』なら、この右手の【幻想殺し^{イマジンプレイカー}】で木っ端微塵^{木っ端微塵}つてわけだ」

「あなたが言っていることが本当ならね」

何やら二人とも意地の張り合いみたいになっており、それぞれの主張の証明をするようになっていた。

どうやら少女が来ている服は『歩く教会』^{歩く教会}といって魔術で出来ているらしい。

なので、それが本当なら右手で触れれば壊れるだろうという流れになっっているようだが・・・

(待つて、個人的にはこの目で確かめられて有り難いけど、もしお互いの主張が本当なら・・・)

上条当麻が少女の服の触れた次の瞬間に服は宣言通り木っ端微塵になったため、結弦はそつと外へと視線移した。

「君の『右手』、幸運とか神のご加護とかまとめて消しちやってるんだと思うよ」

「はっ..」

あの後、少女の服の事で一騒動あつた後、少女はどうやらこの学生

寮を出ているにしたようだ。

当事者二人が玄関の方に移ったため、結弦も玄関側に移ったのだが、着いてみると二人が固まっていた。

(なんだ?)

何事かと思い、こつそり部屋を覗くと上条当麻が自身の携帯電話を踏んづけてしまっていた。

「君の『右手』が空気に触れているだけで、バンバン不幸になっていくって訳だね♪」

「ぎやあああああああ!!ふ、不幸だあああああ!!」

「何が不幸って、君。そんな力を持って生まれてきちゃった事がもう不幸だね♪」

とどめの一撃を聞き、上条当麻は崩れ落ちていた。

(あはは……)

結弦もそれを聞き苦笑いをしていたのだが・

「お前……」

上条当麻が真剣なトーンで口を開いた。

「お前、ここを出てどっか行くアテはあるのか？」

「ここにいと『敵』が来るからね」

『敵』？」

「この服、『歩く教会』は魔力で動いているからね、それを元に探知してらみたいなんだよ。でも、大丈夫教会まで行けば匿ってもらえるから」

「ちよつと待てよそれが分かってて放り出せるかよ」

その言葉を聞き、きよとんとなっていたが、一呼吸を置き……

「……、じゃあ。私と一緒に地獄の底までついてきてくれる?」

(……想像以上に闇が深そうかな)

そう思わざる得ない程、本当に穏やかな笑顔を浮かべながら告げたのだった。

少女と別れた後、上条当麻は学校の補習があるらしく、急いで学校へ向かったため、結弦もそれについて行っていた。

本音を言えば、少女側も気になったのだが、今後機会はあると確信があり、何より依頼もあったため、上条当麻側を追って来たのだが……（こういつたらなんだけとただ監視するだけだと暇だな）

結弦は、上条当麻についてとある高校の敷地内に入り、対象が窓際の席だったため、遠くから、監視していた。

不法侵入やらプライバシーやらの問題はあろうが、凄いな更なので、もう考えないことにした。

しかし、立场上暇など言ったらまずいのだろうが、ただ遠くから人を監視するというは忍耐と根気がいる上、割と暇なのである。

（しかし、魔術か……。具体的にどういった物かはまだわからないけど、単純に学園都市外で行われている超能力ってだけじゃない気がするんだよな）

ただ学園都市外で行われている超能力開発ってだけでは説明がつかない点が多々ある。

詳しく調べてみないことには、軽率な判断は出来ない。

そして、【幻想殺し】。

アレイスターから事前に渡された情報に上条当麻は無能力者^{レベル0}とあった。

しかし、そんな能力を持っており、本人が自覚している以上、周知のことだと考えられる。

それなのに、無能力者ということは学園都市の身体検査^{システムスキャン}では検知出来なかったことを意味する。

つまり少なくとも、彼の持つ【幻想殺し】は学園都市の超能力開発の外にすることを意味している。

このことだけ考えても、超能力以外の異能の力があってもおかしくないことを示している。

（これは確かに自分にとっても大きな価値がある情報だな）

そう考え、思わず笑みをこぼしていた。

あの後、詳しい事情までは分からないが、上条当麻は完全下校時刻近くまで補習を行って後に、途中であった美琴と一悶着あった後、学

生寮に帰ってきていた。

結弦は先回りして学生寮に待っていたのだが、そこで異変に気付いた。

(清掃ロボット?)

学生寮の上条当麻の部屋の前で三台の清掃ロボットがごった返していた。

しかし、本当に注目すべきはその中心であった。

(インデックスさんだっけ?)

その中心には朝この部屋に来ていた、インデックスと名乗っていた少女が寝そべっていた。

何事かと思つた時、上条当麻も上がってきて異変に気付いたようであった。

しかし、彼もすぐにインデックスに気づいたらしく不幸だと言いながらもどこか穏やかな顔をしながら近づいていた。

「おい、インデックス。こんな所で何をやってるんだよ?」

結弦も監視というよりは、見守るような感覚で見ているのだが、次の瞬間そんな空気は吹き飛んでいた。

寝そべっていた彼女が血だらけだったのだ。

「……あ、……?」

上条当麻は一瞬思考が停止しているようであった。

(追われているって言ってたし、犯人は魔術師?)

結弦は姿を隠し、見ていたためあくまで頭の中で思案するが、上条当麻は冷静でいられてはいない様だ。

「しっかりしろインデックス。どうしたんだよこれ、どこのどいつにやられたんだよ」

その時、結弦は誰かが近づいて来ているのが目に入った。

(あれは……)

カツンと音と共にすぐ後ろまで来て、上条当麻も気づき後ろ向いた。

「うん? 僕達『魔術師』だけど?」

こうしてゆっくりと科学と魔術が交差し始めた。

英雄

上条当麻が振り向いた先には白人の男が立っていた。かみじょうとうま

身長こそ二メートル近かったが、顔は幼く見えた。

その男は黒の修道服を着て、右目のまぶたの下にはバーコードの刺青タトゥーが刻んであった。

確かにその恰好は特徴的な上に、ここ学園都市においては特に目立つだろう。

しかし、本当に注目すべきはその空気だろう。

その男が立っているだけで、明らかに異質な物となり、嫌でも、学園都市とは違う『外』の住人ということが分かった。

(これが魔術師か……)

結弦は、今までの認識を改めながらも、自身の覚悟を再度噛み締めていた。

「うん？これはまた随分と派手にやっちゃって」

「なんで？」

「ここまだ戻ってきた理由かな。さあね、忘れ物でもしたんじゃないかな。そういえば昨日襲った時点では被り物フイードがあったけど、あれってどこで落としたんだろうね？」

朝にインデックスが上条当麻の部屋に来た時の服(修道服)には、被り物フイードも含まれていた。

しかし、出て行った際はその被り物フイードを忘れて出て行ってしまっていた。

つまり、彼女は、上条当麻を巻き込まないように危険を冒して戻ってきたのだろう。

「……、ばっかやろう」

上条当麻が彼女の忘れ物に気付いた時点ですぐに返しておけばこんなことにはならなかっただろう。

そのことを後悔しているのか、自身にも言い聞かせるかのようによ、眩くらいていた。

「うん？うん？嫌だな、そんな目で見られても困るんだけどね。ソ

レを斬ったのは僕じゃないし、神裂^{かんせつ}だって何も血まみれにするつもりはなかったんじゃないかな。『歩く教会』は絶対防衛として知られているしね」

魔術師の男は軽い調子で言っていた。

「なんでだよ・・・」

「うん？」

「俺は魔術なんて絵本^{メルベン}信じられねえし、魔術師^{テメエら}みたいな生物は理解出来ねえよ。それでも、お前達にも正義と悪ってものがあるんだろう」

上条当麻はまるで言わなければ、止めることが出来ないかのように続ける。

「こんな小さな女の子を寄ってたかって追いまわして、血まみれにして。これだけの現実^{リアル}を前に、テメエ、まだ自分の正義を語る事ができるのかよ」

(この人・・・)

上条当麻が男に対しての言葉を傍で聞きながら、結弦はある考えが頭によぎっていた。

この少年は本質的な部分では自分近いのではないかと・・・

しかし、魔術師は微塵も欠片もないかのように続けた。

「言いたいことはそれだけか？ならそこをどいてくれないか？ソレ回収するから」

「かい、しゅう・・・？」

「そう、回収だよ。正確にはそれが持つてる一〇万三〇〇〇千冊の魔導書だけだね」

一〇万三〇〇〇千冊の魔導書、少女が自身の説明の際にも出てきていた単語だ。

「ふ、ふざけんなよ！そんなもん、一体どこにあるっていうんだ!？」

「あるさ、ソレの記憶^{あたま}の中に」

男はさも当然のように続ける。

「完全記憶能力。一度見た物一瞬で覚えて、一字一句忘れずに記憶しておく能力。ソレの記憶^{あたま}の中にはね、世界中に存在する封印して持ち出すことの出来ない魔導書の原典をその目で記憶し保管している。

つまりは『歩く魔導書図書館』ってわけだ」

(それはまた・・・)

魔術師が話した内容は「はい、そうですね」と簡単に信じられる内容ではない、おそらく初めて聞く人はもちろん、ここ学園都市の住人であれば、なおさらだろう。

しかし、結弦は少し違っていた。

(確かに簡単に信用は出来ないけど、魔術に対してまだわからないだけに判断が難しいな)

どんどん調べるそして、知るべきことが増えている事に自分の無知を知り、更には、今後のすべき事が増えてきているに思うことはあったが、今はそれ所ではない。

「まあ、ソレ自体は魔力を持たないから無害なんだけど、その一〇万三〇〇〇千冊は少々危険なんだ、だから魔術を使える連中に連れ去られる前にこうして保護しにきたといわけだ」

「ほ・・・」

「そうだよ、保護だよ。それにソレに良識や良心があつたって拷問や薬物には耐えられないだろうしね、そんな連中に彼女を預けるのは心が痛むだろう?」

そこまで聞き、上条当麻はついに耐えきれなかったのだろう。

「テメエ何様のつもりだ」

上条当麻が殴りかかったが、相手はそれを難なく避け、そして告げる。

「ステイルⅡマグヌス・・・と言いたい所だけどここはFortis931と言っておこうかな」

相手は告げる、その意味を。

「日本語では強者といった所か、ま、語源はどうだっつていい。魔法名だよ、聞き慣れないかな?古い因習だから理解出来ないんだけど、重要なのはこの名を名乗り上げた事でね、僕達の間では殺し名かな?」

(!?)

男がそう告げ、くわえていたたばこを横に投げ捨てたのを見て、結弦はとっさに距離をとった。

「炎よ」

そう男がいった瞬間手には炎の塊、いや気づいた時には炎の剣のようになつていた。

(これが魔術?)

学園都市にも発火能力者という炎を扱う能力者は存在する。

しかし、知っているそれとは何かが違っていた。

男を最初に見た際の異質さもあつただろうが、そういうことを抜きにして考えても相手が異能の力を使えるのは間違えなかつた。

そうこう考えていたが、次の瞬間には男の炎が上条当麻かみじょうとうまに襲い掛かつていた。

「あつーちよ・・・」

結弦は思わず少し離れた場所からとは言え声をあげてしまつていた。

「やりすぎたかな? まあ、そんな程度じゃ何回やっても勝てないってことだよ」

男はそう言い、少女の保護のため、炎から背を向けたが・・・

「誰が、何回やっても勝てないって」

そこには上条当麻が立っていた。

「ばかな・・・」

男は驚いた様子であつたが、すぐに次の攻撃を仕掛けてた。

しかし、上条当麻はそれをことごとく打ち消していた。

(イマジンプレイカー
「幻想殺し」か・・・)

結弦はその光景を見て改めてその力を目の当たりにしていた。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

単純を炎は意味なしとみたのか、魔術師は唱える。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名は炎、その役は剣。顕現せよ、我が身を喰らいて力と成せ」

魔術師が何かを唱えると炎が人の形を成した。

(あれは?)

それを見て結弦は再度当事者達に近づき成り行きを見ていた。

「その名は『インノケンテイウス魔女狩りの王』。その意味は『必ず殺す』」

魔術師がそう告げた炎の巨神が上条当麻に襲い掛かったが・・・
「邪魔だ」

右手で振り払い、巨神を消した。

確かに巨神は飛沫となつて辺り一面に飛び散つたのだが、次の瞬間には飛び散つた飛沫が寄り集まり再び巨神となつた。

「な!？」

(不死身?)

その光景に驚愕していたが、そんなことお構いなしインノケンテイウス魔女狩りの王は上条当麻に再び襲い掛かった。

右手を使い、向かい討つていたが、そこで異変に気付いた。

今度は消えなかつたのである。

「こいつ、消えた端から再生してるのか!？」

巨神は「幻想殺し」で消えていない訳ではなかつた。

消えてもその速度にも負けない速度で再生していたのだ。

とは言え、上条当麻には右手以外に武器と言う武器を持っていない。
い。

つまるところ打開策がないのである。

(ばれなければ手を貸しても大丈夫だとは思うけど・・・)

結弦が手を貸すことは出来る。

しかし、一概に手を貸すべきかを考えていた時・・・

「ルーン」

「!？」

(!?)

少女の声が聞こえた。

『『神秘』『秘密』を指し示す二四の文字にして、ゲルマン民族により二世紀から使われる魔術言語で、古代英語のルーツとされています』

まるで怪我などしていないかの続ける。

『インノケンテイウス魔女狩りの王』を攻撃しても効果はありません。各所辺りに刻んだ『ルーンの刻印』を消さない限り、何度でも蘇ります』

「お、まえ・・・インデックス、だよな?」

上条当麻は思わず聞き返すと・・・

「はい、私はイギリス清教内、第零聖堂区『必要悪の教会』^{ネセサリウス}魔導書図書館です。正式名称はIndex—L i b r o r u m—P r o h i b i t u r u mですが、呼び名は略称の禁書目録^{インデックス}で結構です」

淡々と続けるインデックスだったが、^{イノケンティウス}魔女狩りの王が雄叫びを上げ、^{かみじょうとうま}上条当麻は思い出したように^{イノケンティウス}魔女狩りの王に再度意識を向けたのだが・・・

「灰は灰に」

後ろから今度は男の声が聞こえた。

「塵は塵に」

男の手には炎剣が二本構えられていた。

(流石にこれは・・・)

「吸血殺しの紅十字！」

無情にも二方向から攻撃を受け、大爆発を起こした。

「・・・『魔女狩りの王』《イノケンティウス》」

ステイルはそう告げ、聞こえている足音を追わせた。

先ほどの少年は禁書目録の助言で対応策を知っただろう。

しかし、だからと言ってそのことで焦ることはない。

「君には出来ないよ。この建物に刻んだルーンを全て消すなんてことは絶対に無理だ」

そう言いながら1つの疑問が浮かべていた。

(しかし、僕の炎剣が奴の右手に当たってもいないのに先がかき消えた気がしたのは気のせいか?)

「死ぬ！ホントに死ぬ！」

上条当麻は学生寮の下の階へ逃げていた。

『^{イノケンティウス}魔女狩りの王』と炎剣がぶつかると一瞬の隙を見て逃げてきたのである。

そうして、息を整っていると、あることに気付いた。

至る所に紙が貼られているのだ。

「これがルーン？」

その紙に文字が書かれていた、先ほど説明されたルーンなのだろう。

しかし、その数は大量にあり、とても全てを消すなんて出来ない。どうしたものかと考えていると、イノケンティウス魔女狩りの王が追っかけて来た。

「くそっ！」

『魔女狩りの王』を倒すのが難しい上、このまま単純に追いかけてつこをしても逃げ切るのは難しいと判断し、学生寮が飛び降りてた。

しかし、二階であったことなど飛び降りる際に深く考えていなかった。

そのため、飛び降りた先の光景を飛び降りてから初めて意識し、そして後悔した。

ここは、学生寮である。

そのため、学生寮に住んでいる学生達の駐輪場が存在する。

要はその自転車の止まっている所に飛び降りてしまったのである。

「わあああああ!!」

辛うじて自転車同志の隙間に飛び降りたが、下はアスファルトである。

素人がショックを和らげようとしても限界がある。

「っ!!」

痛みに意識を持っていかれかけたが、炎が酸素を吸う轟音が聞こえたため、顔を上げると、『魔女狩りの王』が二階の手すりに張り付いていた。

「さっきのルーンが貼ってある場所しか移動できないのか・・・」

直接的な命の危機が去り、上条当麻は体から力が抜けるとけだるさが襲ってきた。

「そうだ、警察・・・」

冷静な思考力を取り戻したのか、わざわざ自身が特攻をしなくとも通報すれば良いじゃないか、そう考え携帯を取り出し通報しようとしたが、朝に自身で踏んづけ壊してしまっていたため、使えない。

「公衆電話は・・・」

携帯電話が使えないのなら、公衆電話と思い至り、近くの公衆電話を探す。

決してここから逃げるためではない。

そう言い聞かせていたが、ふと頭のある言葉が過った。

『・・・、じゃあ。私と一緒に地獄の底までついてきてくれる?』

インデックスと上条当麻は出会って三〇分も経っていない赤の他人だ、そんな人間と地獄の落ちるようななんて考えられない。

ならば・・・

「ちくしょう、そうだよな・・・。地獄の底まで、ついて行きたくなけりやあ、地獄の底から、引きずり上げてやるしかねーよなあ」

上条当麻はあくまで笑いながら宣言していた、これ以上の正解は存在しないと宣言しているかのように・・・

結弦は上条当麻と一緒に学生寮から飛び降りていた。

(流石に手を貸した方が良かったかとも思ったけど必要なかったかな?)

ステイルが炎剣が一部かき消えた気がしたのは気のせいではなく、結弦のしたのである。

レーザー光線

一般的にライブ等の証明や場合によっては医療目的で使われる物である。

しかし、その強度によっては十分に凶器となり得るものである。

炎にも光にも実態は存在しない。

しかし、高エネルギーとして、ぶつければ、かき消すことは十分に可能である。

なので、高エネルギーのレーザー光線を見えない形にして炎剣先端にぶつけ逃げる時間を稼いだのである。

(しかし、やっぱり自身で助けに行くのか)

先ほどの現場に戻っていく上条当麻の背中を眺めながら、改めて実感する。

(もしかして自分なんかと近いというのも烏滸がましいのかもな)
こうして、後に科学と魔術双方の多く事件を解決し、多くの人を救
う英雄^{ヒーロー}が誕生した瞬間に立ち会った瞬間であった。

魔術師

ジリリリリリ!!

「!?」

インデックスを保護するためにステイルⅡマグヌスが手を伸ばそうとしたとき、火災報知器のベルが鳴り始め、次の瞬間スプリンクラーが作動し水の雨が降り始めた。

「まさか……」

騒ぎを聞きつけ、人が集まってきたと厄介なので、人払いはしてある上に、ベルが鳴ると後々に面倒が増える可能性もあるため、『魔女狩りの王』には警報装置に触れないように命令文を書いている。

となると、上条当麻が火災報知器のボタンを押したのだろう。

「……」

ステイルⅡマグヌスは馬鹿馬鹿しくて笑いも起らなかった。

確かに『魔女狩りの王』は炎で構成されている。

しかし、摂氏三〇〇〇度という高熱な炎を用い非常に大きな塊で構成される。

スプリンクラー程度の水で簡単に消える物ではない。

その上、ルーンを用いて魔術である。

つまりはこの程度ではどうにかなるものではないである。

「そんなつまらない理由でびしょ濡れされたのか」

寧ろ逆に対策所かステイルⅡマグヌス反感を買っていた。

大した意味のない、ほぼ無意味なことのためにびしょぬにされたである。

腹が立つても当然である。

そこで、エレベーターが上がってくる音が聞こえた。

ここで、ステイルⅡマグヌスには疑問が生じた。

付近には人が来ないように人払いをしている。

ならば一体誰が?

もし、ここに来られるとしたら自身と目の前の少女を除けば元から

範囲内いる二人しかいないはずである。

しかし、一人は非常時のために控えているはずだし、もう一人はイノケンテイウス魔女狩りの王に追われているため、エレベーターを使ってここまで来るなんて余裕はないはずだ。

そこまで考えた時、エレベーターの扉が開き、中の人が姿を現す。そこには、『魔女狩りの王』に追われているはずの上条当麻が立っていた。

『魔女狩りの王』はどうした？』

ステイルⅡマグヌスは困惑していた。

先程の説明した通り、今降っているスプリンクラー程度でどうにか出来る『魔女狩りの王』ではない。

にもかかわらず、今日の前に歩いてきている少年は一人で歩いて来ているからである。

「・・・まったく参ったぜ、アンタすげえよ。正直ルーンってのがナイフか何かで刻まれてたら勝ち目ゼロだったよ」

「まさか！三〇〇〇度の炎の塊が、こんな程度で鎮火するものか！」

「ばーか！炎じゃねえよ、テメエは人ん家に何べたべた貼っつけてやがった？」

ステイルⅡマグヌスは思い出す。

『魔女狩りの王』のために学生寮に仕掛けたルーンはコピー用紙だったことを・・・

ステイルⅡマグヌスは顔を痙攣させながらも叫ぶ。

『魔女狩りの王』！』

叫んだ瞬間、上条当麻の背後から、炎の巨神が通路に這い出てきた。

「は、はは、あははははは！君ってば戦闘センスの天才だね！だけど経験が足りないかな、コピー用紙ってのはトイレットペーパーじゃないんだよ。たかが水に濡れた程度で、完全に溶けてしまう程弱くはないのさ」

余裕と取り戻したステイルⅡマグヌスは告げる。

「殺せ」

『魔女狩りの王』は、その腕をハンマーのように振り下ろしたが……
「邪魔だ」

上条当麻は振り返りせずに、右手で薙ぎ払うと、『魔女狩りの王』は今度こそ吹き飛ばされた。

「な!？」

ステイルⅡマグヌスは驚きで一瞬心臓が停止していた。

それほどまでに想定外の出来事だったのだ。

「馬鹿な！僕のコピー用紙は死んでいないはずなのに……」

「インクは？」

上条当麻の言葉をすぐに理解出来なかった。

「コピー用紙は破れなくても、インクは落ちちまうじゃないか?……

それでも全て潰すことは出来なかったみたいだけどな」

よく周りを見ると『魔女狩りの王』の破片がもぞもぞと動いていた。

それが、時間が経つ度にその欠片が減っていき、そして消えた。

「い、いのけんていうす……『魔女狩りの王』」

まだ、現実を受け付けられずに叫ぶ。

「さて、と」

上条当麻が一步一步近づいてきているのを自覚し、炎剣を出そうと唱えるがどこか覇気がない。

そして、上条当麻は駆ける。

決意を込め、強く握られた右こぶし。

一人の少女のための一撃が炸裂した。

警報ベルが鳴っているため、近いうち人が集まって来る。

その時、血だらけの少女までいたら大騒ぎになる。

インデックスが学園都市の住人あればまだ問題ないが、彼女は外の住人で、そんな人間が入院したとなれば、おそらくすぐに情報が漏れる。

そうなれば、敵にまた追われる。

そのため、上条当麻はインデックスを担いで学生寮を離れようようとしていた。

「・・・」

倒れている魔術師のことも一瞬目に入ったが、相手は組織だ。

次の敵が来たら面倒な上、そもそも二人を担いで降りるのは難しいため、そのまま置いて降りることにした。

結弦は降りて行った上条当麻の後ろ姿を見届け、倒れている魔術師は自分が運ぼうかと振り返った時、人影が降りてきた。

日本人の女性だった。

ステイルⅡマグヌスが非常に長身だったため、すぐ後に見ても気づきにくいのが、日本人の女性平均からすれば十分に長身だろう。

腰まで届く黒髪のポニーテールに日本刀を持っていた。

(仲間の魔術師だよな?)

「まさか、やられるとは思いませんでした」

そう言いながら、ステイルⅡマグヌス傍で屈んだ。

「しかし、あの少年は一体?」

「【幻想殺し】イマジンプレイカーって言うそうですよ。あの右手」

「!？」

魔術師は驚いた様子で、警戒も強めたようであったが、結弦は続けた。

「落ち着いて考えれば、組織で動いている以上当たり前ですね。非常に時に備えてたんですよ?」

「・・・」

「違いました?」

「あなたは何?」

「すみません、空目結弦うつめゆづると言います。詳しくは言えませんが、ちよつと事情があり、一部始終を見てた者です」

いきなり姿を現せば警戒されるのも当然なため、出来る限り敵対するつもりがないことが伝わるように話しかける。

『観測者』である以上、姿を見せるか悩んだが、相手は今回の依頼外の人物な上、学園都市外の人物である。

今後関わっていくことになる以上は少しでも情報が欲しい。

それにアレイスターが自分にこの依頼をした以上、この程度はおそらく想定内だろうし万が一想定外の場合、何かしらしてくるだろうと予想した。

それを確かめる意味でも話しかけたのだが、どうやら想定内だったようだ。

「あなたどうやってここへ？」

「え？」

「人払いを使っていたはずですが……」

「人払い？」

結弦が相手の発言の意味がイマイチ分からないでいると、魔術師の視線が結弦の胸元に向かっていた。

「それは……」

「このネックレスですか？」

魔術師が指したのは、今回の依頼の前報酬として貰った天然樹脂であつた。

実は貰った天然樹脂の入っていた箱の中には首に掛けられるようチェーンのついたケースも一緒に入っていたため、ケースに入れ、ネックレスとして持ち歩いていた。

「……霊装ですか……」

「れいそう？」

「いえ、あなたそれをどこで？」

「……人から貰いました」

「……」

魔術師は何やら納得したのか、少しばかり警戒が薄くなった気がした。

「学園都市の住人のようですが、なんの用ですか？」

「いえ、魔術師に初めてお会いしたので色々詳しいことが聞けたらと思ったのですが……難しそうですね」

「……そうですね、敵という印象は受けませんし魔術師でもないようですが、だからこそ信用出来ない部分もあるので」

そう言いながら、魔術師はステイルⅡマグヌスを担いだ。

「せめて1つだけ良いですか？」

結弦がそう言うのと魔術師は行こうとしていた足を止めた。

聞く耳を持たないわけではないようだ。

「彼女、インデックスさんでしたっけ？すぐに追うんですか？」

「・・・」

魔術師は答えるべきか悩んだのか、少しの間の後・・・

「いえ、少し様子を見ます。事を大きくしたくはありませんし、我々も彼女を傷つけない訳ではありませんから」

おそらく、忠告も含まれているのだろう。

他者に口外するなという・・・

「そうですね」

結弦がそう言うと、そのまま魔術師はどこかへ行ってしまった。

行ってしまった方向を眺めつつ、思索する。

(れいそうね・・・魔術側の物かな。なんでそんな物を持つてるのか、多分教えてもらえないだろうな)

その後、間もなくして学生寮に人が集まって来ていた。

おそらく、人払いという物は解かれたのだろう。

上条当麻は人目につかない場所へ少女を運んだ後に、どうしたら良いか尋ねた所、どうやら傷を治す手段はあるらしい。

しかし、彼の「幻想殺し」に関わらず、超能力者には魔術が使えないらしい。

魔術は超能力と違い才能のない人間が使えるように出来た物だから、才能を目覚めさせる教育を受けた者には使えないと・・・

「ちくしょう、ここは学生の街で学生は全員超能力開発を受けてるんだぞ・・・」

と、そこで気づく。

才能を目覚めさせる教育を受けた者に使えないなら、教育を受けていない者なら良いことに。

「おい、魔術ってのは才能がない人間なら誰でも使えるんだったな？」

そう少女に確認を取り、目的地へと駆けて行った。

(さっきのやり取りから先生等を当たるんだとは思ったけど、あの人本当に先生だったんだな)

結弦は場の違いな感想を抱きながら事の顛末を見届けていた。

上条当麻が向かったのはとあるアパートだった。

そこまでは良かったのだが、そのアパートから出てきたのは、小学生にも見える女性だった。

結弦自身は、彼女の事自体は既に知っている。

上条当麻の学校で教鞭を振るっていた人である。

しかし、どこから見ても教師に見えないのである。

そんな事を頭の片隅で考えていたが、今はそれ所ではないため、すぐに気持ちを切り替えた。

「先生、俺救急車読んで来ます。先生はこの子の話を良く聞いて、お願いを聞いて・・・とにかく絶対意識が飛ばないように。この子この通り宗教やつてるんでよろしくです」

それを聞くと先生と言われたいる女性はコクコクと頷いていた。

その後、自身にもなにか出来ることがないか訪ねていたが、「幻想殺し」があると帰って邪魔をしてしまうとのことで上条当麻は救急車を呼んで来る旨を伝え部屋から出て行った。

(この状況なら対象側は特に何もなさそうだし、こちらを見届けた方が良いかな)

(魔術って超能力より便利な気がするな)

それが、一部始終を見た結弦が抱いた素直な感想だった。

上条当麻が部屋を出て行った後、インデックスが指示した通りに何やら準備を終えると、部屋のなかで天使なるものを出現させたかと思えば、その後には彼女の傷は一先ずふさがっているようであった。

(基本的には誰でも使える上に、おそらく使用能力の数が一つに限られないとききた)

超能力は基本的に一人一つの能力とされており、デュアルスキル多重能力者は理論

上不可能とされている。

しかし、魔術にはそれがないように見えたのである。

(さて・・・)

結弦は、これから調べていかなければならない事を頭の中で思い浮かべながら携帯を取り出した。

「一体どうした?」

学園都市の窓のないビルでアレイスターは電話を受けていた。

「どこまで計算ですか?」

「何の事だ?」

「・・・どこまでが本音なんだか」

結弦はダメ元で聞いてもみたが、予想通りはぐらかされたため、これ以上は無駄だと考え、自分で本題に入ることにした。

「少し依頼から離れたかったので、その連絡です。依頼内容上問題ないですよね?」

「ああ、問題ない」

「再開するタイミングは連絡頂けると有難いのですが・・・」

「そういう依頼だ、問題ない」

「・・・信用して大丈夫なんですよね?」

「その点は信用してもらって問題ない」

「・・・」

「信用出来なくとも、どのみちこちらのタイミングは仕事をしてもらう」

「そうですね、ではお願いします」

「そう言い通話は終わった。」

「信用していいさ、【光源操作】トリックライトにはある程度情報を与えなければならぬからな」

その眩きだけが、建物内に響いていた。

記憶

「やることって重なるな」

結弦は現在対象者である上条当麻かみじょうとうまがインデックスを連れていった教師アパートへ向かっていた。

あれから三日後の七月二十四日、美琴と微力ながら協力をし、『幻想御手』騒動を解決、一段落した所でアレキスターから連絡があり、今日の夜から監視を再開して欲しいと言われたのである。

あれから三日経っているのだが、場所移動はしていないらしい。

インデックスの傷は塞がったが、完治はしていないかったとのこと
で、休養取っていたらしい。

『幻想猛獣』との戦闘（主に戦ったのは美琴だが）等で多少疲れてはいたが、自分のためでもあるため、そんな事も言ってもらえないのである。

とは言え……

「……人使い荒いな」

そう改めて愚痴ってしまう結弦であった。

「おっふる♪おっふる♪」

そう上機嫌のインデックスは両手に洗面器抱えながら歩いていた。
（元氣そうで良かった）

インデックスが元気になったとの事で彼女に願いを聞いた所、願いがお風呂それだったらしい。

と言うことで上条当麻とインデックスは二人で銭湯に向かっていたので、結弦もそれについて行っていた。

「ジャパニーズ・セントーにはコーヒー牛乳があるって、こもえが言っていた。コーヒー牛乳って何？カプチーノみたいなもの？」

「……んなエレガントなモン銭湯にはねえ」

（あはは）

本当に微笑ましい、可能であればこんな時間が続けばとそう思える光景だった。

「けど、お前にやデカイ風呂は衝撃的かもな。イギリスって狭っ苦し

「いユニットバスがメジャーなんだろう？」

「んー？・・・その辺は良く分からないかも。私気づいたら日本こっちにいたからね、向こうの事はちよつと分からないんだよ」

「・・・ふうん。道理で日本語ぺらぺらのはずだぜ」

「あ、ううん。そういう意味じゃないんだよ。私、生まれはロンドンで聖セントジョージ大聖堂の中で育ってきたらしいんだよ。どうも、こつちにきたのは一年ぐらい前かららしいんだね」

「らしい？」

「うん。こつちにきたときから、記憶がなくなっちゃってるからね」

インデックスは笑っていた。

「最初に路地裏で目を覚ました時は、自分の事も分からなかった。昨日の晩ご飯も思い出せないのに、魔術師とか禁書目録インデックスとか必要悪の教会とかそんな知識ばかりぐるぐる回ってて、本当に怖かった・・・」

「・・・じゃあ、どうして記憶をなくしちゃったかも分かんねーって訳か」

「うん」

その言葉を聞き上条当麻はひどくイライラしているようだったが、結弦には疑問が浮かんでいた。

（記憶喪失？ 記憶喪失には一部の記憶だけ失うなんて山ほど事例あるから一概には言えないけど・・・エピソード記憶、それも魔術師には都合が良い記憶は残して？）

記憶喪失の形や原因なんて物は山ほど存在する。

特定の記憶を忘れるなんてことも珍しいことではない。

だからこそ、魔術という異能の力を使えば意図的に可能なのではないか、少なくとも、超能力においては可能なのだから・・・そんな考えが頭をよぎっていた。

その後、インデックスは一人でさっさと行ってしまった。

そのため、もうインデックスを見失ってしまったが、上条当麻はそれかみじょうとつままを急いで追いかけることはしないでトボトボと歩いて銭湯に向

かっていたのだが・・・

「(あれ?)」

上条当麻と結弦はほぼ同時に異変に気付いた。

「人がいない?」

そう、今上条当麻達がいるのは街中の大通りである。

いくら夜だからと言って人が全くいないのはおかしい。

(これは、もしかして・・・)

「ルーン、人払いのルーンを刻んでいるだけですよ」

結弦の思考を切るかのように声が背後から聞こえた。

その声の方向を振り向き・・・

「・・・テメエは」

「かんざきかおり神裂火織、と申します。・・・出来れば、もう一つの名は語りたくは

ないのですが」

「もう一つ?」

「魔法名、ですよ」

神裂火織と名乗った魔術師はあくまで平穩にその名を告げた。

(神裂火織さんね・・・)

結弦は今後関わるであろう人物の名を確認し、記憶していた。

「率直に言つて、魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが」

「・・・嫌だ、と言つたら?」

「仕方ありません。名乗ってから、彼女を保護するまで」

次の瞬間、神裂火織は帯刀していた刀を抜いて一振りした。

たったそれだけのはずなのに、斬撃が飛び上条当麻の後ろにあった

風力発電のプロペラが切り裂かれ地面に落ちていた。

(これは・・・)

放たれた斬撃の威力にはもちろん目を見張る物があった。

しかし、それよりも注目すべきは速度だろう。

動けなかったのである。

上条当麻はもちろん結弦もである。

相手は明らかに常人の域を超えている。

先日のステイルⅡマグヌスを見る限り全員が全員その域にいるわ

けではおそらくないだろう。

しかし、その域にいる人物もいる。

その事実は受け入れなければならぬ。

「もう一度、問います。魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが」

「・・・な、なに、言って・・・やがる。テメエを相手に降参する理由なんざ・・・」

上条当麻は口では反論しているが、声が震えていた。

先程の斬撃を見て、少なからず恐怖を感じているのだろう。

「何度でも問います」

と次の瞬間・・・

「(!?)」

上条当麻をまるで台風の目として地面が街灯が街路樹がまとめて切り裂かれていた。

改めて辺りを見渡すと七本もの直線的な刀傷が平たい地面の上を何十メートルにも渡り走り回っていた。

しかし、一番の問題はそこではない。

今回のそれは抜刀すらまともに確認出来なかったのである。

(・・・っ!!危なかった、今回は割と距離取っていた方が良さそうだな) 相手は上条当麻を中心に攻撃をしている。

少し距離を取っているとは言え、結弦は事の顛末を見られる位置にいる。

攻撃に巻き込まれ吹き飛ばされはしたが、直撃を避けられたのは、初撃を見て少し距離を取り、警戒していたからに過ぎない。

絶命していてもおかしくなかったのである。

巻き込まれたら、怪我では済まない可能性すらある以上、可能な限り距離は取るべきである。

そう考え、結弦は当事者二人から少し距離を取った。

幸いなことに周りには雑音がないため、二人の会話は良く聞こえる。

「私の七天七刀しちてんしちとうが織りなす『七閃』ななせんの斬撃速度は、一瞬と言われる時間

に七度殺すレベルです。必殺と言っても間違いではありませんが」

上条当麻は自身の右手を改めて確認していたが・・・

「あなたの右手は何故か魔術を無効化することは知っています。しかし・・・」

再度『七閃』が炸裂し、今度は上条当麻も巻き込まれ、吹き飛ばされていった。

その上で神裂火織は至って冷静、いや冷酷とも取れる調子で続ける。

「それはあなたが右手で触らない限り不可能ではありませんか？」

神裂火織が言う通り【イマジンプレイカー幻想殺し】はあくまで触れた異能の力を打ち消すものだ、触れられなければ意味を成さない。

そういう意味では、おそらく上条当麻と神裂火織の相性は最悪だろう。

「幾度でも、問います、魔法名を名乗る前に、彼女を保護させてもらえませんか？」

圧倒的とも言える力の差があるだろう。

しかし、それでも上条当麻は立ち上がり神裂火織に向かって行っていた。

「何があなたをそこまで駆り立てるのは分かりませんが・・・」

『七閃』

その必殺と呼ぶべき物が炸裂する。

「ち、くしょ・・・あああああ!!」

上条当麻は魔術師の懐に入るために相手へと駆け寄りながら、ほほやくそ気味に右手を前へと突き出していた。

青く光る太刀筋は上条当麻の右手に確かに触れた、触れたのだが、消えることなくめり込り込み、そのまま吹き飛ばされた。

(今、【幻想殺し】が通用しなかった?)

そんな疑問が浮かんだが、結弦はある物に気付く。

(?・あれは・・・?)

結弦は少し離れていたため見えにくくはつきりしないのだが、周囲に何か細い線のような物が張り巡らされていた。

「極細のワイヤー?」

上条当麻がそう呟いたのを聞き、結弦はその正体がワイヤーであることを理解し、そして改めて距離を取っていて正解だったとホツとしていた。

あのワイヤーの餌食になっていたかもしれないのだから・・・

「言ったはずです、あなたの右手のことは知っていると。補足として言っておきますが、七天七刀は飾りではありませんよ、『七閃』を潜り抜けた先には真説の『唯閃』^{ゆいせん}が待っています」

神裂火織は二段構えなのだろう。

『七閃』というワイヤーで相手を近づけず、仮にそれを突破しても『唯閃』という常人の域を超えたそれで向かい打つ。

これでは、どう転ぼうと上条当麻にとっては相性が悪すぎる。

「それに何より・・・、私はまだ魔法名を名乗っていません。名乗らせないで下さい、私は、もう二度とアレを名乗りたくない」

そうなのだ、神裂火織は魔法名を名乗っていない。

以前にステイルⅡマグヌスは魔法名は殺し名と言っていた。

ならば、相手は今はまだ上条当麻を殺す気がない。

つまり、これだけの力を見せながらまだ全力ではなく、手加減をしている。

「・・・降参、できるか」

普通に考えれば勝ち目なんてないだろう

「何ですか?聞こえなかったのですが」

「うるせえつつつたんだよ、ロボット野郎!!」

上条当麻は確かな意思を持って神裂火織に向かって行っていた。

(・・・)

結弦はただ見ていることしか出来なかった、手を貸せないや手出ししたら自分も危ないなどではない、今ここで手出しすることは自分の立場などを抜きにしてもとはいけないと感じたのだ。

しかし、そんな何か感じる物があつたからと言って、相手が倒れてくれるわけはなく、上条当麻はまたすぐに吹き飛ばされていた。

「もういいでしょう?あなたが彼女にそこまでする理由はないはずで

す。」

「何でだよ？その気になればアンタは俺を殺せたのに殺さなかった、躊躇った。そんなアンタなら分かんたろう？寄ってたかって女の子を追いまわして大怪我までさせて、知ってんのかよ、アイツここ一年ぐらい前からの記憶がなくなっちまてんだぞ？一体全体どこまで追い詰めりやそこまでひどくなっちまうんだよ!!」

しばし、空白の時間が流れたが……

「私だって……」

まるで追い詰められかの声で……

「私だって好きでこんなことをしているわけではありません。私の所属する組織の名前は、あの子と同じイギリス教会内にある『必要悪の教会』。彼女は私の同僚にして親友なんです」

それは、ロボット野郎と言われた神裂火織の確かな心の叫びだった。

「完全記憶能力という言葉に聞き覚えはありますか？」

「ああ、一〇万三〇〇〇冊の正体、だろ」

神裂火織は小さく頷く。

「全部アイツの頭の中に入ってるんだってな」

「人間の能の容量は意外と小さい。ですが、要らない情報を忘れることで脳を整理している、だから人間は生きていける。ところが彼女はそれが出来ない」

「!？」

「本来整理し忘れるはずのどうでもいい記憶に彼女の頭はあつという間に埋め尽くされてしまう」

「待てよ、そもそもなんでアンタ達はインデックスに悪い魔術師なんて呼ばれてんだ!？」

「……彼女は私達と同じ『必要悪の教会』の人間だということも、自身が追われている本当の理由も覚えていないのですよ。だから自分で判断するしかなかった、自分を追う魔術師は自身が持つ一〇万三〇〇〇冊を狙う魔術師だと思うのが妥当だと……」

「・・・けど、インデックスには完全記憶能力が、それにそもそもなん
でアイツは一年前からの記憶を失ってんだ？」

「失ったのではありません、正確には私達が消しました」

「・・・消した？」

上条当麻は分からなかった。

消した方法ではない、そんなものはすぐに魔術だということはわか
る。

「どうしてだよ・・・」

分からなかったのは方法ではない、理由だ。

これまでの彼女を見る限り、インデックスのことを思いやっ
てる。

そう感じたから、上条当麻にはどうしてわざわざインデックスから
悪者扱いされるような手段を取っているかがわからなかったの
であ
る。

「どうしてだよ！」

「そうしなければ彼女が死んでしまうからです！」

「!？」

上条当麻はその言葉を聞き、呼吸が死んだ。

それほどまでの衝撃だった。

「彼女の脳は一〇万三〇〇〇冊に85%が使われています。そのため
常人の残り15%しか使えません、その残りも完全記憶能力ですぐに
埋め尽くされ、彼女脳は・・・」

「そんな・・・それ以外に方法は？」

「ありません」

「・・・いつまでだ・・・次に消去するのは一体いつなんだ」

「記憶の消去はきっかり一年周期で行います。あと三日、次は三日後
に行います。ちょうどその時でなければ記憶の消去は行えないので
す。」

言葉が出なかった。

頭がついて来なかった。

「分かって頂けましたか？分かって頂けたなら彼女を引き渡して頂け

ますか？どの道三日後には彼女はあなたを覚えていません。たとえばあなたがどれだけ彼女を想おうとです。そんなのは何の益にもなりませんよ」

「ふざけんな」

その言葉だけは聞き逃せなかった。

自身のためのような発言が許せなかった。

「アイツが覚えてるとか忘れてるとか関係あるか！俺はアイツの仲間だ、仲間でい続けるって決めたんだ。なのになんてお前達は勝手に見限ってるんだよ、何度でも誤解を解けば良いじゃねか！」

「うっせんだよ!!ど素人が!!」

神裂火織が叫んだ。

抱えていたものを一気に吐き出すように。

「私達が今まで一体どんな気持ちであの子の記憶を奪っていったと思ってるんですか!?!あなたに何がわかるんですか!!」

上条当麻はあまりの豹変ぶりに驚いて声をあげる前に蹴り飛ばされた。

「私達だって頑張ったんですよ、一年を過ごし、忘れないように思い出を作って・・・」

神裂火織はまるで上条当麻にサンドバックのように全てをぶつけていた。

「私達はもう耐えられません。これ以上、彼女の笑顔を見続けるなんて不可能です」

神裂火織が最後には消え入りそうな声で全てをぶつけた終えた時には上条当麻はボロボロだった。

しかし、それでも・・・

「ふざけんな・・・」

上条当麻はその身体で立ち上がり言う。

「んなモンは、テメエらの都合だろうが、インデックスの事なんざ一瞬も考えていますねえじゃねえか！テメエの憶病のつけを他人に押し付けてんじゃねえぞ!!それだけの力は誰かを守るために身につけたんじゃねえのかよ！だったらテメエはこんな所で何やってんだ

よ・・・」

言うだけ言うと上条当麻の意識はそこで沈んでいった。

神裂火織はその場で倒れた上条当麻を見下ろしていた。

「もういいかな？」

するとタバコを啜えたステイルⅡマグヌスが現れた

ステイルⅡマグヌスは人払いのルーンを張っていたため、事の顛末を見届けていたのだ。

神裂火織に確認を取り人払いを解こうとしたとき・・・

「その少年はどうするつもりですか？」

二人の魔術師がいる場所とは違う場所から声が聞こえたため、声の方向を見ると、結弦が立っていた。

「あなたですか」

「もう驚かないんですね」

「いる可能性は考えていましたので」

「そうですね、神裂火織さんって言うんですね」

「盗み聞きとは関心しませんね」

「返す言葉もないです」

結弦は申し訳なさそうにそう返すと、今度はステイルⅡマグヌスに視線を移し

「ステイルⅡマグヌスさんですよ？お初にお目にかかります」

「君が以前に僕とその男の事を監視していたという男か・・・なるほど、本当に人払いが意味を成さないらしい」

「あはは・・・否定出来ないのが、痛い所ですね。一方的に知っている訳にはいかないので、空目結弦^{うっめゆつる}、ここ学園都市に住む学生の一人です」

「・・・」

二人の魔術師は結弦を注視する。

まるで何かを見極めるように・・・

「敵ではないですよ、そもそも自分じゃあなた達お二人には勝てませんし。今日だって近くで神裂さんの攻撃に反応出来ず怪我したくらいですし」

そう良いながら、先程巻き込まれた際に傷ついた服と怪我を見せながら。

「今回はその少年を引き取りにきたんですよ、放置するのも忍びないでしょ?」

神裂とステイルは互いに目を合わせ、頷いた。

「では、お願いしていいですか?」

結弦に敵対意志がないことが伝わったのか案外簡単に承諾を得たため、上条当麻を担ぎ移動しようとした時……

「先日も尋ねましたが、あなたは本当に何者ですか?」

「今はまだ、お答えしかねますね。ただ、どう転んでも敵対する気はないですよ」

そう答え改めて歩き始めたが、またすぐに止まり振り返った。

「そうだ、盗み聞き犯に答えられないかもですが、インデックスさんの脳が15%しか使えないとか、一年で一杯になるとかって誰から聞いたんですか?」

「そんなことをきみなんかに教えると思うかい?」

「……そうですね、すみません。では、また」

そう言い結弦は上条当麻を担ぎ移動した。

(人の記憶というか脳か。ってそんな脆い構造じゃなかった気がするんだけど……)

選択

上条当麻は目が覚めたら部屋の中にいた。

「とうま？」

担任教師の月詠小萌つくよみこもえのアパートであることに気づいた辺りでインデックスが自分を覗き込んでいる事に気づき、身体を起こした。

「っ!!・・・陽が昇ってる？ってことは一晩明けたのか・・・」

自身の最後の記憶では神裂という魔術師との騒動をした所で終わっている。

その時はまだ夜だったが、今は陽の光が差し込んでいた。

「今何時だ？」

記憶から数えて翌日の今何時かを知らうとした質問であったが：

「三日・・・一晩じゃないよ、とうまは三日も眠ってたんだよ」

「三日!?なんでそんなに・・・」

「私はなにも知らなかった、こもえが家の前でとうまが意識を失ってたって言うってた。とうまが魔術師と戦ってたなんて知らなかった・・・」

ショックを受けているインデックスに声をかけようかとも思ったが、今は逆効果だろう。

(家の前にいた？いやそれよりも・・・)

上条当麻自身最後の記憶は街中で途絶えている。

当然、今このアパートまで来た記憶もなければ、自身で歩いていくような状態ではなかった。

しかしその時一緒に魔術師といった。

ならば、見かねた魔術師が運んでくれたのかもしれない。

正解は分からないが、とにかく無事にここへ帰ってきたのだ。

ならば、今の問題はそこではない。

なぜなら、あれから三日経っているのである。

魔術師が言うには、記憶消去は一年周期で行い、あと三日で行うと言っていた。

今はまだインデックスの記憶を失っていないようであるが、楽観視

は出来ない。

おそらくは期限まであまり時間がない。

そこまで考え、具体的にどうしたものかと考えていると、ドアからノックがなった。

「こもえかな?」

そんな発言と一緒にインデックスがドアに向かおうとした時、ドアの向こうから声が聞こえた。

「あれ?うちの前でなにやってるんです?」

そう、月詠小萌の声が聞こえた。

今上条当麻がいるのは月詠小萌の自宅である。

その本人がそんな発言をするのは他の誰かがいる事意味している。

「上条ちゃん、何だか知らないけどお客さんみたいですー」

そう言いながら、ドアを開けた月詠小萌つくよみこもえの隣には魔術師二人が立っていた。

(二つの山場かな)

上条当麻が三日もの間、目を覚まさないとは思っていなかったが、それでも三日経ち、目を覚ました。

以前の神裂の言葉からするとインデックスの記憶消去は今日である。

そのため、魔術師側も何か動きがあると踏んではいたが・・・
「帰って。お願いだから、本当にお願いだからもう当麻を傷つけないで!」

インデックスの悲痛な叫びが響いているのを結弦は複雑な気持ちで見守っていた。

(神裂さんとマグヌスさんに上条当麻、そしてインデックスさんも全員がいろいろと想いを抱えているな。しかし、その全てを救う方法は存在しそうだけど、魔術師二人には信用してもらえそうにないし、インデックスさんはおそらく手がない、おそらくは上条当麻かみじょうとつましか可能性はないか・・・とは言え、あくまで救える可能性があるかもってだけだから何とも言えないけど・・・)

結弦は以前に魔術師の説明に疑問を抱いた。なので、上条当麻が寝てしまっている際に少し調べ事をしていた。そのため、ある疑問は確信に変わっていた。そして、確信に変わった事によって新たな疑問が浮かぶと共にインデックスを救えるのではないかとも考えていた。とはいっても、その手段を結弦は持っていない。持っているとすれば……

〔イマジンプレイカー幻想殺し〕とはよく言ったものだ。しかし、お手並み拝見つて名目を盾に直接干渉しない時点でやっぱり自分と一緒にしたら失礼だな。こんな偽善者と一緒にするのは……〕

夜になった。

月詠小萌は銭湯に行くとのことで、部屋の中では上条当麻と横ではインデックスが布団で寝ている状況だった。

あの後、魔術師はすぐに帰っていった。

魔術師が言うには上条当麻は足枷とのことだった。

インデックスが彼を大切に想っているからこそ、これ以上彼を傷つけられなくなければ逃げないようにしろと……

その役目はしっかり果たされている事を確認したら帰っていったのだ。

そして、その後すぐにインデックスは緊張の糸が一気に解けたかのように眠ってしまった。

この三日間よほど緊張していたのだろう。

そんな事を考えていると突然電話がなった。

ここは、月詠小萌の家だが今現在家主はいない。

出ない事も考えたが、帰って来てから内容を伝えれば良いと考え電話を取った。

「私です、と言って伝わりますか？」

「神裂……だっけ……」

「伝われば結構です、お互い名前を知る必要はないでしょう」

神裂はどこか内緒話をするようなトーンで続けた。

「あの子は・・・インデックスはいますか？」

「起こさなきやダメか？」

「丁度いい、そのまま話を聞いてください」

そう言う神裂から説明されたのは、記憶消去の制限時間が今夜十二時だということ、それまでに別れの時間を終え、その場を離れることだった。

「テメエらの魔術で本当に何も出来ないのかよ、それこそインデックスの一〇万三千冊を使えば・・・」

「協会はインデックスの反乱を恐れています。おそらく一〇万三〇〇〇冊には偏りがあり、記憶消去に関することは含まれていません。どうすることも出来ませんよ魔術では・・・」

「・・・なら俺達科学側なら。ここ学園都市だ、人の記憶に関することだつて手段はたくさんある。諦めるにはまだまだ早いんだよ」

「あなたの言葉を信じて科学もあの子を預けろと？何の根拠もないのですか？説得する言葉にしては安すぎますね」

「・・・結局分かり合うことは出来ないんだな。だったら潰すぜ、宿敵。アンタの見せ場を横取りしてやる。それでインデックスを助けてやる」

「・・・それでは今晚十二時に。どうか素敵な悪あがきを」

その言葉を最後に電話は切れた。

神裂は電話を切ってから、何か思う事があるのかしばらく電話を保持したまま止まっていた時・・・

「素敵な悪あがきですか」

声が聞こえたため、そちらを見ると結弦が立っていた。

「どこにでも現れますね。どうしてここが？」

「あなた達はあの少年を足枷と言いましたが、見張っておくに越したことはないでしょうから、そんなに遠くへはいないと思ったので単純に捜しました。」

結弦は敢えて説明を省いたが、能力も併用して搜索していた。

だから、夜で暗い中これほどに速く見つけられたのである。

「こんな所にいていいのですか？あなたはあの少年についているものだと考えていたのですが・・・」

「すぐに戻りますよ。ただちよつとお話したいことがあります」

「あなたにお話するようなことはないかと前にお伝えしたはずですが？」

「二人事と思つて聞いて頂いても構いません」

「・・・あまりしつこいようであれば・・・」

そう言いながら、神裂は刀に手をかけた。

「まあ、そう思われても仕方ないですね。とりあえず今回の件においては最後までと思いますので」

「・・・」

神裂から攻撃等の敵対行動がみられなかった結弦は続けた。

「インデックスの脳の容量を魔導書の記憶で85%を使つてしまつており、残り15%しか残つておらず、その15%はわずか一年で使い切つてしまう。そのために一年周期で決まつた時間に記憶の消去を行つているで合つてますか？」

「・・・」

「だとしたらいくつかおかしな事がある気がするのですが気のせいですかね？」

返答こそなかったが、一瞬神裂の視線が揺れたのを確認すると結弦は踵を返した。

「もし、思う所があるなら、足掻いてみるでもいいんじゃないですか？」

そう言い、結弦は元のアパートへと向かった。

(後は上条当麻次第で可能性はあるつて感じかな)

上条当麻は月詠小萌に電話していた。

始めは解決のため、部屋にあつた本を呼んでいたのだが、それでは埒があかないと考え

月詠小萌に専門医等を紹介してもらえばと考えたのである。

「んー？そう言われても先生の専攻は発火能力パイロキネシスなので、記憶操作マインドハウンド関係のコネは少つこいですね。どうしても言うなら協力は惜しまな

いですけど、上条ちゃん流石にすぐには厳しいと思うのです。なんたつてもう十二時ですし」

そう月詠小萌から言われ上条当麻は一瞬思考が止まった。

魔術師は十二時に記憶消去に来ると言っていた。

インデックスの記憶の限界がくるからと・・・

そこまで考えた時カツカツと外から誰かが階段を上がってくる音が聞こえた。

―それでは今晚十二時に。どうか素敵な悪あがきを―

魔術師から言われたその言葉が改めて頭を過った時、無情にもドアを開け、魔術師達は部屋へ入ってきた。

「神裂、なぜあの男に時間を与えた？」

「先程も伝えましたが、今年のパートナーは彼です。私達がパートナーで初めて記憶を消す際は泣くじやくりました、彼にもその程度の時間はあっても良いはずと思っただけですよ」

現在ステイルと神裂はアパートのドアの前で待機していた。

十二時なり、アパートに姿を現し、インデックスの様子を最終確認した上で、記憶を消しにかかろうとしていたのだが、上条当麻はただその横で呆然としていたのである。

制限時間になり、まだ解決策を見つけられずに二人の姿を確認したことでようやく目の前の現実を実感したようにとても弱々しく見えた。

それを見かねた神裂が真正銘最後の時間を与えたのだ。

彼は悪あがきのために別れを済ませていない、だからせめてその時間を与えたのだ。

ただそれだけの事。

そのはずんにも関わらず、神裂の頭に一瞬以前に上条当麻が訴えてきた言葉、そして先程結弦言葉が過っていた。

上条当麻はともかく結弦は今まで事を知っているようであった。

ならば、あのタイミングでわざわざ確認する意味があまりないのだから・・・

上条当麻は魔術師達が居なくなった部屋でインデックスと二人で話していた。

「どうも、部屋に陣が張ってある」

「回復魔術だつてさ」

「魔術って・・・また魔術師が来たの？当麻逃げないよ！」

「もういいんだ・・・」

上条当麻は本当に穏やかな声色で・・・

「もういいんだ、インデックス・・・もう終わったんだよ」

「どうも？」

「・・・ゴメン。俺、強くなるから・・・今度こそ完璧に助けられるように、だから待つてくれるか？」

上条当麻はまるで自分に言い聞かせるように話していた。

「分かった。待つてる」

そんな上条当麻の気持ちを知ってか知らずかインデックスは笑って答えた後、再び静かに眠りについた。

「・・・こんな終わり方ってないよなあ。結局何も出来なかった、インデックスの85%を占める一〇万三〇〇〇冊をどうにかすることも残り15%に詰め込まれたたった一年分の『思い出』を守ることも・・・」

そこまで考え、ふと疑問が生じた。

「ちよつと待て、15%も使ってたった一年分した記憶出来ないってどういうことだ？」

以前に魔術師はそう言っていた。

しかし、それが本当だった場合、完全記憶能力者は六く七歳までしか生きられないことになる。

そんなに深刻な病気なのか？

その情報は正しいのか、もし、その情報自体が嘘だったら？

そう思い至り上条当麻は急いで月詠小萌へ再び電話をかけた。

「はい、あーその声は上条ちゃんですね。何度も先生家の電話勝手に使っちゃダメですよ」

「先生！急いで教えてもらいたい事があります」

そう言い上条当麻は完全記憶能力の事、そして先程の疑問を尋ねると・・・

「そんな訳ないんですよ」

月詠小萌は言い切った。

「そもそも人間の記憶は一四〇年分の記憶が可能なのです。それに記憶というのは一つではありません。なので、仮に膨大な知識等を詰め込んだとしてもそれで記憶が圧迫されるような事は脳医学上ありえませ〜ん」

上条当麻は月詠小萌にお礼言い電話を切った。

（インデックスの完全記憶能力は命を脅かすようなものではない、ならなぜインデックスは苦しんでいる・・・決まってるそういう細工をしたからだ）

そんな細工出来る事は何か、それは魔術だ。

ならば、自身の右手【幻想殺し^{イマジブレイク}】なら・・・

希望が見えた、インデックスを救える。

そう考え、インデックスの頭に触れたが何も起こらなかった。

「あれ？（こじやない？）」

言われてみれば、そんな簡単な所だとインデックスの仲間に気づかれる可能性がある。

上条当麻は改めてインデックスを見渡す。

そして、ある考えに至る。

インデックスが呼吸を繰り返している口の中、そのさらに奥の喉の奥、頭蓋骨の分実はつむじより脳より近くそして、他人には触れることがまずない上に、おまけに発見しづらい場所である。

そう考え、少し申し訳なきを感じながらも上条当麻はインデックスの口の中自身の右手も指を入れ込んでいった。

そして、喉の奥を触れた瞬間バチンと音と共に右手が大きく弾かれた。

「っっ!!」

痛みがあつた手を見ると、神裂から負わせられた傷が開いて血

が出ていたが、現状それどころではなかった。

何か動いた気配を感じたため、視線を上げるとインデックスが目を赤くし、魔法陣を

展開していた。

そして、次の瞬間には爆発が起こった。

「警告、第三章第二節。第一から第三までの全結界の貫通を確認。自己再生は不可能と判断、よって侵入者の迎撃を優先します」
「!?」

上条当麻は何らかの魔術の爆発に巻き込まれ、吹き飛ばされたため、体制を立て直して、改めてインデックスに向き合った次の瞬間、インデックスから、上条当麻に向かって魔術が放たれた。

上条当麻はとっさの右手を前に出し、魔術に対応する。

放たれた魔術は強大なものだろう、打ち消す所か押されていた。

一歩間違えば命を落としかねない状況だ。

それなのに上条当麻は歓喜していた。

今の魔術はインデックスに近づけまいとしている。

それは近づかれたら困る事があるからだ。

つまり、あと一歩でインデックスを救えるのだ。

そう考えれば、喜びを感じずにはいられなかった。

「これは・・・」

「なぜあの子が魔術を・・・」

気づけば外にいたはずの魔術師二人が後ろにいた。

爆発もあつたのだ、それはかけつけにも来るだろう。

上条当麻は叫ぶように言う。

いくら後一歩で助けられると言っても現状押されている。

自分一人では届かない。

しかし、協力すれば届くはずだ、いや届いてみせる。

「決まってるだろうが、インデックスは魔術が使えないなんて教会が嘘をついてただけだろうが！一年置きに記憶を消さなければ助からないってのも大嘘だ。助けられるんだよ、あと一歩で。選べよ魔術師、このままずっとインデックスが苦しみ続けるのを眺めてるか、そ

れとも笑顔で明日を迎えるか！」

ステイルと神裂は戸惑っていた。

急の事で事態を完璧に呑み込めないのもあるだろう。

故に・・・

「せっかくのチャンスを棒に振るんですか？」

結弦は背中を押す。

「あなた達はまだ人でありたいのでしょうか？なら立ちあがらないと後悔しますよ？」

少しの沈黙の後・・・

「Salvare000!!!」

以前ステイルが名乗っていた魔法名、それを神裂が名乗っていた。

そして、インデックスの足場を崩し、体制を崩して魔法の方向をずらした。

上方へ向いた放たれた魔法は部屋の天井の木片すら残さない。

代わりに上空から光の羽のような物が降ってきていた。

「これはドラゴンブレス竜王の吐息と同義の物です。絶対に一枚でも触れないで下さい」

神裂の様子からみてもあまり良いものではないだろう。

そう判断した結弦は竜王の吐息に向けてレーザー光線を空中でぶつけた。

この羽が具体的にどんなものかは分からないが、おそらくは高エネルギー体かそれに類似するもの、そう考え相殺を試みたのだ。

「マグヌスさんは見てるだけですか？」

未だに具体的な行動を起こしていないステイルに対し結弦はもう一度背中を押す。

その時、インデックスは体制を立て直し又、攻撃を再開しようとしていた。

「っ!!」

上条当麻が再び右手を構えようとするより速くステイルは動いていた。

魔法名、以前にステイルは殺し名と言っていた。

それ自体は嘘ではない、そう言った側面があるのは事実である。しかし、本質は少し異なる。

そもそもステイルは自身の魔法名の意味を強者と言っていた。それならば、その意味はどうやって決めるのか。

正解は決意である。

魔術師が魔術師になる際にそれぞれ何かしらの決意を持って魔術師になる。

その決意を表す代表の言葉が魔法名となるのである。

決意を宣言したうえで、戦うのだから殺し合いにもなるという事だ。

故にステイルの強者という魔法名にも決意が秘められている。

彼は一人の少女を守りたかった。

だから、少女を傷つけさせないために誰よりも強くなろうと決めた。

その決意を彼は今一度宣言する。

「我が名が最強である理由をここに証明する」

ステイルの宣言と共に魔女狩りの王が現れ上条当麻の盾となった。

「行け！能力者!!」

その言葉を引き金に上条当麻は駆けた。

一人の少女の元へと・・・

(神様、この物語がアンタの作った奇跡の通りに動いてるってんなら、まずは、その幻想をぶち殺す!!)

そして、上条当麻がインデックスに触れた瞬間、発せられていた魔術も全てが糸が切れたかのように沈黙した。

「・・・ありがとな、多分俺一人では届かなかったよ」

上条当麻は自身の腕の中で眠る少女に微笑みながら告げる。

この少女を救えたのはここに全員の力があつたからこそだと・・・と、そこで上条当麻は何かを思い出したかのように振り返った。

「そう言えば、お前は一体?」

上条当麻は結弦に問いかける。

結弦は神裂の焦りようから、他の事に演算の余力を回している場合

ではないと考え、姿を現して助力する事を選んでいった。

先程まではそれどころではなかったが、上条当麻かみじょうとうまからみれば唐突に現れた人物なのだから当然の疑問である。

「あくえつと・・・」

姿を現す事自体は前にも想定したため、そのことは大した問題ではないが、この状況は少々想定外である。

魔術師二人も興味があるのか、この場の注目は結弦に集まっていた。

どうやって説明をしたものかと考えていると、ある物が目に入った。

言ってしまうはこの場にいる誰もが油断していた。

一番の目的であるインデックスの救出、それを達成したために気が緩んでいた。

しかし、現在あくまでなくなった脅威はインデックスが放っていた魔術である。

神裂が絶対に触れるなど言っていた竜王の吐息はまだ降り注いでいた。

「危ない!!」

結弦がそう叫んだ次の瞬間上条当麻の頭部に竜王の吐息の一枚が直撃した。

上条当麻が『死んだ』瞬間であった。

心

(一件落着というよりは、一段落って言う方が正しいかな)

結弦は依頼対象の少年の病室のドアの脇に背中を預けたまま今回の一件についてそう結論付けていた。

一〇〇%信用された訳ではないだろうが、件の魔術師二人から少しは信用されたのだろうかインデックスの顛末について説明してもらえた。

とは言っても、上が現状維持という様子見を行う事を決めたため、ステイルと神裂もすぐに再度回収等を行わないということだけ説明の上で

「何かおかしな動きが見られれば容赦はしませんから」

と念を押されたのだが、とりあえずは一段落だろう。

(問題があるとすれば・・・)

そう考え所でインデックスが病室の前まで歩いてきた。

「あなたは？」

「この見舞客ですよ。すみません、ここは邪魔ですね」

そう言っつてインデックスに会釈をしながらその場を後にした。

とは言っつても角を曲がったところで、能力で姿を消しすぐに引き返して来たのだが・・・

みれば、インデックスが深呼吸をしていた。

心を落ち着かせているのだろう。

その後、意を決したのか病室をノックした。

「はい」

そのノックに呼応した声が聞こえたためインデックスは病室に入っていく。

インデックス自身もある程度の顛末は聞いているようであった。

故に彼女にとつては生きていたことが嬉しいすでに涙目になりながら彼に寄り添うために近づいていったその時・・・

「あの・・・あなた、病室を間違えていませんか？」

少年は少女にそう尋ねたのである。

記憶喪失ではなく、記憶破壊。

少年の症状を診たカエル顔の医者はそう判断した。
忘れていたのではなく、脳細胞事記憶が破壊されなくなっている
と……

「あの、大丈夫ですか？なんか君ものすごく辛そうだ」

インデックスも少年の症状については説明を受けていた。

しかし、実際に現実を突き付けられ、ショックを受けていた。

「……ううん、大丈夫だよ、大丈夫に決まってるよ」

「……あの、ひよつとして。俺達って、知り合い？」

何よりも辛い一言だった。

その台詞は本当に何も覚えていない事を意味するのだから……

「……とうま、覚えてない？私達学生寮のベランダで出会ったんだよ？」

「俺、学生寮なんかに住んできたの？」

インデックスは確かめるように静かに言葉を紡いでいく。

「……とうま、覚えてない？とうまの右手で私の『歩く教会』がこわれちやっただよ？」

「あるくきょうかいってなに？……散歩クラブ？」

「……とうま、覚えてない？とうまは私のために魔術師と戦ってくれたんだよ？」

「とうまって、誰の名前？」

「……とうま、覚えてない？」

これだけは聞いておきたかった。

「インデックスは、とうまの事が好きだったんだよ？」

「ごめん」

少年は本当に何も知らないといった風な悪意のない声で言った。

「インデックスって、何？人の名前じゃないだろうから俺、犬か猫でも飼ってるの？」

非情な一言だった。

その言葉だけは聞きたくなかった。

インデックスはついに耐え切れなくなりかけたが、必死に全てを噛

み殺し笑う。

ボロボロの笑顔にしかなくていいないが、それでも必死に笑顔を作つて、目の前の少年に笑顔を向けていた。

「なんつってな、引ーっかかったあ！」

そんな今までの雰囲気は何だったのかという感じで上条当麻は続けた。

「犬猫言われてナニ感極まってるんだ。お前はあれですか、首輪趣味ですか。もしかして俺にそういうプレイを要求してるわけ？」

かみじょうとうま
上条当麻の記憶はないはずだ。

インデックスが状況を掴めずにいると・・・

「お前は何今にも泣きそうになってんだ。それで笑ってるつもりですか？」

「え？とうま記憶が・・・」

「破壊されているはずだったか？あのカエル顔の医者言うにはそれで記憶喪失になるはずだったらしいな」

「はずだった？」

「だってさ、その破壊の原因も魔術による物なんだろう？だったら話は簡単だ、脳にそれが届く前に右手で打ち消してしまえば問題ねえ」

上条当麻の右手にはありとあらゆる異能の力を打ち消す

イマジンプレイヤー
【幻想殺し】が宿っているのだから・・・

それを聞き力が抜けたのかインデックスはその場にぺたりとへたり込んだ。

「それにしても普段散々人の事を振り回してきたお前の事だ。今回の件で少しは自分を見直すことができたんじゃないかねえの？」

インデックスからの返事がないため、改めて彼女の方を見ると、肩を震わせていた。

「あつあれ？」

この反応は笑いなどではなく本当に怒っているそう判断した時には彼女から頭にかぶりつかれていた。

「あーこれはひどいね」

「死ぬ、ホントに死ぬ」

その後上条当麻がナースコールを押したためカエル顔の医者は来たのだが、途中で修道服の少女とすれ違い、病室に入ってみると酷い有様の上条当麻がいた。

カエル顔の医者はため息混じり一呼吸おいてから……
「けど、あれで良かったのかい？君、本当は何も覚えていないんだろう？」

少年は黙り込んでしまう。

「確かに事件の事はあの二人に聞いたままを伝えただけ」

魔術の結果倒れた少年とインデックスをこの病院まで運んで来たのは魔術師を名乗る二人の男女だった。

カエル顔の医者はその二人からこれまでの経緯も一通り聞いていた。

彼自身はそれを信じなかったが、少年は知る権利があると考え、そのまま伝えたのである。

そして、その情報を元に上条当麻を演じること、上条当麻でいる事を決めたのだ。

「……俺、何だかあの子にだけは泣いてほしくなくなって思ったんです、そう思えたんですよ。この感情がどういったものなのかはもう思いつけないだろうけど、確かにそう思えたんですよ」

少年はどこまでも穏やかに

「案外俺はまだ覚えているのかもしれないですね」

「君の記憶……思い出は脳細胞事死んでる。なら、どこに思い出が残ってるって言うんだい？」

少年はどこか確信を持って答えた。

「そりゃあ、決まっていますよ。心に、じゃないですか」

カエル顔の医者は少年の部屋を出て、診察室に戻り腰を下ろした。

「……入ってきていいよ」

そう言った次の瞬間、診察室のドアを開けて結弦が入ってきた。

「お忙しいのにすみません」

「それよりも先に謝るべき事がある気もするけど」

「返す言葉もないですね、すみません」

そう言いながら結弦はここ最近こればつか言っている事に気づき若干自己嫌悪を感じていた。

「・・・まあ、今回だけは特別に大目に見てあげよう」

「ありがとうございます」

「それで何の用かな？」

「あの少年の記憶は本当にどうしようもないんですか？」

それだけはきちんと自分の意志で確認しておきたかった。

故に結弦は足を運んだ。

「・・・残念ながらね」

しかし、返ってきた答えは変わらないものだった。

「そうですか。それが聞きたかっただけなので」

結弦の用件は済んだため、この場を後にしようとした所で改めて声がかかった

「・・・今回の件を大目に見る代わりという訳ではないけど、僕からも

一ついいかな？」

「どうぞ」

「君は一人で動いているのかな？」

「ここにいるのはそうですね」

「・・・そう」

「それでは失礼しますね、お騒がせしました」

そう言い、結弦は今度こそこの場を後にした。

「以上が今回の依頼報告です」

結弦は窓のないビルにて今回の依頼報告をしていた。

「ご苦労、また何かあったら依頼をする」

報告を聞きアレイスターはただそう返した。

「・・・」

「どうした？」

「今回の件一体どこまで計算ですか？」

結弦はそう聞き返したが、アレイスターからの返答はなかった。

「魔術に『幻想殺し』、それにおそらく禁書目録。確かに今回自分にとっても収穫はたくさんありました。けど、少なくとも自分が関わった事に関してのそちらのメリットがあまりあるようには思えません。ヘブンキャンセラー」

「冥土返し」さんも何か知っているようでしたし、あなたは何が目的なんですか？」

「私の考えをそちらに教える義理はないはずだが？そもそも人の事を言えるのかをこちらも尋ねたい所だが」

「・・・そうですね、失礼しました」

結弦は一步下がってから頭を下げた。

「また何かあれば声をかけて下さい」

こうして、後に深く関わっていく事になる世界を認識したきつかけの事件は終着をみた。

幻想御手編（とある科学の超電磁砲） 幻想猛獣

結弦は図書館にいた。

依頼から離れあれから三日間調べ物をしていた。

夏休み初日の上条当麻かみじょうとうまの監視を終え、その後次の監視まで時間を貰った結弦は自分でも出来得る範囲で魔術や魔術師について調べてみることにしたからである。

とは言え、個人で表向きの方法しか利用してないため有益な情報はあまり期待はしていなかった。

結果は予想通り大した情報はあまり手に入らなかったのだが、結弦は今回はそれで良いと考えていた。

少なくともここ学園都市において簡単に情報が手に入らないようになっていいる。

魔術にはそれだけの価値がある。

それが分かっただけでも十分な収穫があったと言えるからである。

（それでももう少し得る物が欲しかったのが正直な所ではあるけど）
ほぼ確実に今後関わっていく世界である。

おそらくは嫌でも情報を得るだろう。

しかし、事前情報は得ておくに越したことはない。

そう言った意味で言えば、不十分だろうが、アレイスターの依頼から離れて既に三日が経っている。

そろそろ再開の連絡が来てもおかしくない。

そう結論付けばちばち私用を切り上げ今後の準備（とは言っても心の準備くらいではあるが）に備えるため、図書館を出てしばらく歩いた先で、違和感に気づく。

「アンチスキル警備員が慌ただしい？」
「アンチスキル警備員」

学園都市で警察的な役割を果たす治安組織。

教職員で構成されており、主に学校外の事件を担当しており、事件

次第では武装等も許可されている。

結弦が歩いた先で警備員の詰所があったが、そこで警備員と見られる人々が慌ただしく、何やら準備を整えている。

「急げ！対能力者用の装備をすぐに整えろ！」

「先に向かったチームからの応答がなくなりました!!」

慌ただしくしており、周りにそこまで気が回っていないのか、近くにいた結弦には気づいていないようであった。

結弦は姿を消し、警備員達に近づいていった。

(何かの事件?)

そう考えながら、覗きみた車の端末にはある人物の情報が映し出されていった。

(この人は・・・)

端末には木山春生きやまはるみという女性が映し出されていた。

単純に見ただけではどういった人物等は分からなかったが、結弦はこの人物には見覚えがあった。

とは言っても間接的に知った人物ではあるのだが・・・

『木山春生』

結弦が『観測者』となって以降これまでは学園都市内部での諜報活動をしていた。

その中で当然学園都市の闇に触れる部分も多く存在した。

行った活動の中で得た情報でさえ全てを明かされていた訳ではないとは考えている。

それでも得たものはある。

『木原』

学園都市の事を知っていく中で何度も見た名であった。

厳密には、人物としては数多あまた、乱数らんすう、唯一ゆいいつ、脳幹のうかんと多くの人物の名があった。

だが、それらの人物が全てが『木原』の名を有していた。

その中には表側にも名が通っている人物もいたにはいた。

それだけだったら只の科学者一族という認識で終わっていたかも知れない。

しかし、結弦は学園都市の闇を知り、『木原』を目にしたのだ。
只の科学者一族で終わるはずがない。

『木原』が関わった全ての事を全て知っているわけではない。

結弦はその一端を知っただけだがそれだけでもそう結論付けには充分であった。

その『木原』の一人、木原幻生きはらげんせいが行っていた実験の一つの研究員の一人して名前があった。

それが木山春生である。

(確かその実験記録自体はつつがなく終了した事にはなっていたけど・・・)

こと『木原』に関しては本当にそうだと言える保証はどこにもなかった。

それが結弦が抱いた印象であった。

(場所は・・・)

結弦は即座に周り見渡すと用意されている車両の中に地図が映し出され、赤く点滅している端末を見つけた。

(行ってみる価値はあるかな)

事件現場と思われる場所に向かった結弦であったが、思っていたよりその現場は近かったために割と速くついた。

と言っても能力を使ったのもあるのだが・・・

『レーザー推進』

厳密には光だけに限られたことではないが、結弦が使用しているのは光圧のそれである。

本来は太陽帆と呼ばれる物を利用し、レーザーを反射することで移動するという代物である。

当然結弦自身は専門的に光を反射する代物は持っていないく、出力にも限界はあるが、行っている事としてはそれが一番近い。

足の裏に光を集約し、光圧として出力する。

これを利用し普通より高速で移動しているわけである。

以前に上条当麻かみじょうとうまの学生寮の部屋まで上がったのもこれの応用であ

る。

効率があまり良いとは言えないため、最高時速七〇km程である。数字だけみると速いようにもみえるが、本来の宇宙船等に用いられるそれと比べた場合、遥かに遅い。

しかし、車等と異なるのは、障害物を気にしない点である。

海の上など一部例外を除き直線距離をそのスピードで移動できるのである。

結果してある程度距離ならすんなり着くことを可能とする。

「これは・・・」

そうして目的地に着いた結弦がまず目にしたのは、惨事の現場であった。

近づいている時から煙は立ち上っていたが、直にみると酷い状況であった。

警備員は多数倒れており、車もいくつも壊れている。

あげくには道路も一部倒壊している始末である。

(一人じゃどうしようもないな。どの道警備員の増援が来るはずだし、とりあえず今は・・・)

この状況は無視できるものではなかったが、一人であれこれ動くよりもまずは原因を探り、可能であれば取り除く。

被害の拡大を防ぐためにそう考え、辺りで見渡していると声が聞こえてきた。

「ぎっがあああああああああー!」

「悲鳴!?!」

結弦は悲鳴と思われる声を辿り様子を見てみると見た事の物がそこにはいた。

「何あれ、胎児・・・?」

その場には美琴と倒れている木山春生がいた。

それだけならば、先ほど警備員の端末で木山春生が映っていた事からもまだ想像出来る範囲だったかもしれない。

しかし、その場にはもう一人(?)胎児のような正体不明の者がいた。

(何かの能力?)

こんな能力は見たことも聞いたこともなかったが、結弦も能力の全てを知っているわけではないため、可能性は十分あると考えていると後ろから声が聞こえた。

「そんな所にいたら危ないですよ」

結弦が後ろに目を向けると頭に花飾りを付けた女の子がいた。

「あなたは?」

「風紀委員です。そんな所覗き込んで何かあるんですか?」

そう言いながら覗き込む風紀委員と名乗った少女は結弦と同じ感想を抱いたようであった。

「・・・何?アレ・・・」

胎児の注意は美琴が引き付けてくれていた。

その戦闘を傍からみていたも正体はわからなかったが、少なくとも生物ではないようではあった。

美琴の攻撃により身体が爆ぜたが、すぐに再生していた。

その光景からそう結論付けていた

(それなら・・・)

こちらに気づいていない今のうちにこちらからも攻撃を加えようと考えたのだが、胎児は美琴に気にせず別方向に向かつて行ってしまった。

(特定の標的があるわけではない?それなら先に・・・)

一先ず人命救助を優先した方が良くと考え結弦は美琴の方へ向かった。

「あーちよつと・・・もう!」

後ろから花飾りの少女から愚痴っぽいものが聞こえ少し申し訳なさも感じつつ下に降り美琴に話しかけた。

「すみません」

「・・・誰?危ないわよ?」

「空目結弦と言います。たまたま通りかかったんですが大変そうな状況に見えたので何か出来ないかと思って・・・そちらで倒れてる方は

大丈夫ですか？」

「あー！」

その後、木山春生（名前を知っているのは怪しまれるため知らない風に振る舞ったのだが）を安全な位置に移動させていたのだが、そこで銃火器の音が聞こえた。

その方向を確認したら警備員が例に胎児と応戦していた。

「まだ無事だった方々がいらっしやっただみたいですね」

「みたいね、でも・・・あなたはここにいて」

「・・・はい」

結弦が返事を返すと美琴は応戦現場へ向かっていった。

「自分も行きたい所だけど・・・」

結弦は横で気を失っている木山春生を見た。

いくら移動させたとは言えこのまま放置させておくわけにはいかない

（何よりあの正体も知りたいし）

そう考えていると・・・

「う・・・ん。私は？」

「気が付きました？」

木山春生が目を覚ましたようであった。

「君は？」

「たまたま通りすがった者で空目結弦います。あなたのお名前聞いて良いですか？」

「・・・木山春生」

「木山さんですか。起きて早々申し訳ありませんがあれが一体何か分かりますか？」

「あれ？」

結弦が指で記した先に木山は視線を移すとそこには件の胎児がいた。

「クツハハツアハハハ。すごいなまさかあんなバケモノだったとは・・・もはやネットワークも私の手を離れたな・・・どうしたもの

か」

「ネットワーク？」

結弦が説明をして貰おうとした時、別の方向から声が聞こえた。

「こんな所にいた」

花飾りの少女が追いついて来たようであった。

「あなたは一般人ですよ。直ぐに避難を……って木山先生？こんな所で何を？」

「あれが何かを聞こうとしてたんですよ、通りすがりにしろこの状況は無視できませんから」

「全く物好きだな」

「否定はしませんよ」

「だからって一般人を巻き込むわけには……」

「そうも言つてられないですよ」

「？」

そう言つて結弦はとある施設を指を差した。

「あいつが向かっている先のあの建物、原子力実験炉です」

「え!？」

「それにこれでも大能力者^{レベル4}ですし、お役に立てるか」と

「……」

花飾りの少女は少し考えていたのだが、そこで結弦が気づいた。

あれから美琴が足止めをしながら戦闘をしている胎児(いつの間にか大きくなっており、すでに怪物とも言えそうであるが)からの攻撃がこちらにも飛んできていた。

バチツ!!

という大きな音と共に飛んできたエネルギーの塊のようなものを結弦は能力を用いて盾を作り防ぐ。

「きゃ!!」

「これは……光……か？」

「木山さん、あれ何なんなのかわかりますか？」

悠長に会話もしてられない、そう考え結弦は先ほど会話の続きを促した。

「虚数学区？」

木山から一通りの説明を受けた結弦と花飾りの少女は同じ感想を抱いていた。

結弦は実際問題何も状況が分からなかったため、これまでの出来事も含め説明して貰った。

少し前から噂になっていた『レベルアップ幻想御手』は木山が出まわした物であり、その正体は複数の人間の脳でネットワークを形成し演算能力を一時的に引き上げるといふ代物であること。

その上でのバケモノについての説明を受けたのだが、想定外の単語が出てきたのである。

『虚数学区』

学園都市の中にある都市伝説の一つであり、噂では虚数学区・五行機関と言われている。

噂では学園都市最初の研究機関と言われており、現在の技術でも再現できない数多くの『架空技術』を有した上で学園都市の運営を影から掌握しているとも噂されている。

そのはずだったのだが……

「実際は虚数学区とはA I M 拡散力場の集合体だったわけだ」

『A I M 拡散力場』

能力者が無自覚に発してしまう微弱な力のフィールドの事である。本当に微弱であり、精密機器を使わなければ人間には観測できないレベルのものである。

「アレもおそらく原理は同じA I M 拡散力場でできた……『A I M パーシスト幻想猛獣』と呼んでおこうか。『レベルアップ幻想御手』のネットワークよって束ねられたA I M 拡散力場によって生まれ、学園都市内のA I M 拡散力場を取り込んで大きくなっているわけだ」

「なんかかわいそうかも……」

「A I M 拡散力場の集合体……」

それぞれの感想を抱いていた。

「……どうすればあれを止める事ができますか？」

花飾りの少女のその発言を聞き、結弦は思わず笑みがこぼれた。

「それを私に聞くのかい？信用出来るのか？」

「出来ますよ。木山先生は嘘を付きませんから」

花飾り少女はまっすぐな瞳で断言した。

「・・・本当に根拠もなく人を信用する人間が多くて困る」

「案外そんなものですよ」

今度は木山もどこか笑みをこぼしていた。

「預けたものはまだ持っているかい？あれは『幻想御手』レベルアップのネットワークが生んだ怪物だ。ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない」

「何か手段があるんですね、この場で出来ます？」

「いや、最低でもデータを送信する必要があるな」

「となる一番近場は警備員の車両ですかね。そのくらいならあるでしょうし」

「そうですね、上の車両に行ってみます」

「自分が護衛しますよ」

「そんなんっ!!」

「さつきみたいなのもありますし、ダメにするわけにもいかないでしょう？」

「・・・分かりました、但し無茶はしないで下さいね」

「あなた程ではないですよ。えっと・・・」

「ういはるかざり初春飾利です」

「空目結弦、宜しくお願いします。初春さん」

初春は懸命に道路の上の車両を目指す。

途中先ほどの『幻想猛獣』との交戦時に無事であった警備員の女性に何か文句を言われたようであったか、そんな事を気にせず進んでいた。

そんな時また攻撃が飛んできたが、それを結弦は防いでいく。

「甘く見すぎじゃないですかね」

結弦がそう言った次の瞬間次の攻撃が来た。

『幻想猛獣』に知能があるかはもちろん結弦の発言が聞こえた訳ではないだろう。

しかし、今度の攻撃は数が多く、範囲も広がった。

「全く厄介な事を・・・」

そう言いながら結弦は迎撃態勢に入る。

広範囲の盾を作ること自体は可能である。

しかしながら、『幻想猛獣』の攻撃を防げるレベルの盾を広範囲作るには少々時間を要する。

詰まる所間に合わない。

「それなら・・・」

結弦はいつもレーザーを出す時と同じ光力の塊を作り攻撃を遮る形で放つ。

しかし、いつものように光線ではなく球体のまま放たれていた。

そのまま球体が範囲の中心辺り差しかかった瞬間・・・

「撃ち落とす！」

結弦がそう言った瞬間球体が爆発した。

イメージとしては炸裂弾に近い。

エネルギー塊を広範囲に拡散（初春達がいる道路側には行かないようにしてはいるが）して全てを撃ち落とそうと考えたのだ。

なのだが・・・

「やばー！発撃ち漏れ・・・」

全て打ち落とすはずが一発撃ち漏れてしまい、その一発が初春に向かっていった。

次の瞬間凄惨な轟音が鳴り響いた。

「初春さん!!」

結弦は初春がいた場所には煙が立ち上っていた。

そして、煙が明けると・・・

「まったく、ヒトの忠告完全に無視してっ。そこまでするからには何か手があるんでしょーねえ!？」

先ほど初春に文句を言っていた警備員の女性に守られていた。

「よかった」

結弦は胸を撫で下ろし、そして……

「さて、行くんですか？」

「私にはアレを生み出した責任がある」

「お供しますよ、何か訳ありなように見えますしね」

美琴は『幻想猛獣』と交戦していたが、正直苦戦していた。

攻撃自体は効いている事には効いていたが際限なく再生するのはつきりいつてきりが無いのだ。

どうしたものかと考えていたその時、近くにあつたスピーカーから不思議な曲が流れてきた。

「何？この曲？」

美琴が流れてきた曲に気を取られた隙に捕まってしまったため、電撃で反撃をする。

「でも再生するんじゃない？！」

そこで異変に気付く。

再生しないのだ。

「なんかよく分からないけどチャンスみたいだね」

次の瞬間美琴は強力な電撃をくらわした。

「ふう、何とかギリギリセーフ」

事なきを得たと思いきや美琴は一安心していたが……

「気を抜くな、まだ終わっていない!!」

「え!？」

『幻想猛獣』はまだ活動停止をしていなかった。

「なんでアレ食らってまだ動けるのよ」

「あれはAIM拡散力場の塊だ。普通の生物の常識は通用しない」

「何よ、それ」

「何か手はないんですか？」

「核が……力場を固定させている核のようなものがあるはずだ。それを破壊出来れば」

(……なのかな)

「!?!」

声が聞こえた。

しかし、美琴でも木山でもましては結弦でもなかった。

(無能力者^{レベル}って欠陥品なのかな)

「これは・・・」

『幻想猛獣』の中のネットワーク内の思念・・・ですか?」

複数人の声が聞こえた。

自分を卑下にするような声はいくつも・・・

「・・・退がって、巻き込まれるわよ」

「構わない、私にはアレを生み出した責任がある」

「アンタはよくても教え子達はどうするのよ、それとも諦めるの?」

(教え子?)

「それにね、アイツに巻き込まれるじゃない。私が巻き込んだじやうつて言ってるのよ!!」

そこからは圧巻の一言であった。

『幻想猛獣』をまるで寄せ付けない力を持って最後は美琴の代名詞である超電磁砲^{レールガン}で倒したのである。

『幻想猛獣』を倒した後、警備員の援軍が到着し木山を『幻想御手』頒布の被疑者そして何よりこの一連の事件の犯人として拘束、連行する事となった。

「これからどうするの?」

「もう一度やり直すさ。世界のどこにいようと私の頭脳は常にここに
あるのだからな」

「科学者らしい発言ですね」

「ただし、今後も手段を選ぶつもりはないがな」

「アンタねえ・・・」

その会話を聞きながら結弦はやはり何か訳ありなことは察していた。

それに『木原』が関わっているかまでは分からなかったが・・・

そうこうしていると木山は手錠をかけられ連行されていく。

その途中で・・・

「しっかし脳派のネットワークの構築なんて良く実行しようと思ったわね」

「・・・複数の脳を繋ぐ電磁的ネットワーク『学習装置』テストメントを使って整頓された脳構造。これらは全て君から得たものだ」

「は？私そんな論文書いた覚えはないわよ？」

「そうじゃない。君のその圧倒的な力を持ってしても抗えない・・・君も私と同じ限りなく絶望に近い運命を背負っているってことだ」

「何？ソレ」

「そつちの君、空目結弦だったか」

「はい？」

「あまり深く関わらない事を進めるよ」

「・・・頭に止めておきます」

そこで警備員に促され車両に乗っていった。

「・・・」

「・・・そう言えば、あなたが御坂美琴さんみさかみことだったんですね」

「・・・え!？」

「最後の噂の超電磁砲ですよね？」

「ああ、そうね。そう言えばアンタ!!なんで動いたのよ!!」

「いや、その無視できなかつたと言いますか・・・」

「無視できなかつたって・・・関係n!!」

美琴が話している途中で誰かが美琴に飛びついて来た。

「おねえさまああああああ!!」

「あれ？白井さん？」

「あなたは以前どこかで・・・」

「四月にひったくり事件の際にお会いしましたけど、覚えてませんか？」

「・・・あの時の方ですか。どうしてこちらへ？」

「あの時に言われたので微力ながらご助力していたんです」

「・・・そうですか、ご協力感謝いたしますわ。後はこちらで対応しますので」

「分かりました、一般人はお暇しますね」

「お送りしましょうか？」

「大丈夫です」

そう言い結弦はその場を後にした。

――
帰路に着くため結弦は歩きながら考え事をしていた。

(A I M 拡散力場による虚数学区・五行機関か・・・考えすぎか)

結弦は木山から説明を受けた虚数学区が引つかかっていた。

(現状ではだから何って程度の情報しかないけど、調べてみる価値はありそうだな。何もなければ噂も立たないだろうし、それに木山さんの御坂さんに向けた言葉も気になる。何より魔術にばつか気を取られるのはよくないだろうしな)

そこで結弦の携帯が鳴った。

まるでタイミングを見計らったかのように・・・

吸血殺し編（とある魔術の禁書目録） 吸血鬼

「まずい事なった」

『窓のないビル』の赤い液体の入った円筒の筒の中でどこまで本気なのかも分からない調子でアレイスターは言っていた。

そのアレイスターの向いで立ち話をしているのは魔術師であるステイルだった。

「ディーブブラッド吸血殺し」ですね」

「いるかどうかも分からない『ある生き物』を殺す能力の有する少女が監禁されている。能力だけなら問題ない。この街で起きたこの住人の事件ならいくらでも解決・隠蔽出来る。厄介なのはこの事件に魔術師が関わった事だ」

「魔術師ですか・・・」

「その気になれば魔術師の一人や二人潰すのは容易い。問題はそういう所ではなく、われわれ科学側が魔術師を倒してしまうという一点に尽きる」
学園都市にしても必要悪の教会にしても、それぞれ束ねる『世界』がある。

サイエンス超能力とオカルト非現実、お互いにそれぞれの技術を独占しているからこそ、今の世界のバランスがある。

仮に『超能力』を統べる学園都市が『魔術師』を倒すと言い張れば良い顔はしないだろう。

それぞれの技術が漏れていく可能性があるからだ。

「君を英国から呼び戻したのもつまりはそういうことだ」

「・・・なるほど。魔術師の僕が魔術側に人間を潰す分には何も問題がない、という訳ですか」

ステイルの発言にてこちらの要件確認は終わったのか、アレイスターは返事をせずに次の話を続ける。

「それで、問題となる『戦場』の縮図だが・・・」

アレイスターがそう言うのと暗闇に直接映像が浮かび上がった。

ステイルにはどんな技術なのかは全く理解出来なかった。
故に独占された技術なのである。

なので、ステイルは深く考える事はせずに浮かび上がった見取り図
に意識を向けた。

「建設時の設計図と、衛星の各種映像から内部を分析した。魔術的な
仕組みは不明。畑が違うからな」

「・・・」

「『三沢塾』というものに対しては少々特殊な環境にある」

アレイスターが言うには『三沢塾』は学園都市の特有の学習法を盗
むための企業スパイ色が強い進学塾との事だった。

ところが半端に能力開発をかじり、科学崇拜とういべき新興宗教じ
みた考えに囚われ、結果として「吸血殺し」と呼ばれる少女を監禁す
るに至ったのだ。

「しかし、なんで『三沢塾』は「吸血殺し」を監禁なんてしたのでしょ
う？」

「特に【吸血殺し】自体には執着しているわけではなく、単に『この世
に一つしかない、再現不可能な能力者』であれば誰でも良かったよう
だ」

「？」

「学園都市このまちにおける『序列』チカラとは、『学力』と『異能力』の二種によつ
て分類される。そういう意味では【吸血殺し】は絶好の能力だろう」

その説明も聞きステイルはそれはおかしな話だと思った。

レアな能力がステータスである。それについては学園都市のルー
ルとしても、こんな科学まみれの街でオカルトまみれな『ある生き物』
など信じられないだろう。

「とにかく希少価値がある、というのが重要なのだろう」

ステイルの考えが顔に出ていたのかアレイスターはそう付け足し
た。

「・・・」

ステイルは改めて見取り図を眺めた。

建物の中が『魔術的に』どこまで大改装されているか窺えない。

つまりはどんな危険がどの程度あるかが分からないということだ。今回の仕事は生きるか死ぬかの事だろう。

手慣れたものではあったか、ステイルに緊張が走っていると・・・心配しなくともこちらからも手を貸そう」

アレイスターは相も変わらず感情が読めない声で淡々と告げているた。

「魔術師きみたちにとって天敵となる『一つ』を、私は保有している」

それを聞きステイルは一人の少年が思い浮かんでいた。

イマジンプレイカー

「【幻想殺し】・・・けど、超能力者を使うのはまずいのでは？」

「問題ない」

アレイスターは即答した。

「あれは無能力者レベル0だ、価値ある情報は何も持っていない。君と行動を共にした所で科学側こちの情報が洩れる恐れはない。又、アレに魔術側そちの技術を理解し再現する脳もない」

ステイルは内心毒づいていた。

あの【幻想殺し】が役立たずな訳がない。

確かにステイルに直ぐに見て分かる仕組みではないだろう。

ましては量産などの類も無理だろう。

しかし、それは学園都市も同じであって欲しい。

そう思わざる得ないほど稀有な能力なのだ。

その【幻想殺し】を目の前の人間はぞんざいに扱う。

まるで数々の試練を与えて鍛え上げていくかのように・・・

「・・・【吸血殺し】」

ステイルは相手に考えが悟られないよう話を続けた。

「そんなものが、本当に存在するのですか？もし本当に存在するのであれば・・・」

「この世界に『ある生き物』の存在証明してしまう」

「吸血鬼・・・」

『吸血鬼』

絵本などでは良く見られる存在であるが、『十字架』や『陽の光』があれば大丈夫という易しいものではなく、それ単体が核爆弾に匹敵す

ると言われている。

「ふむ……非現実オカルトは科学者われわれではなく魔術師きみたちの領分だと思ふのがね」
「……失礼しました。それでは私はここで」

そう言いステイルはこの場を後にした。

ステイルがいなくなった『窓のないビル』の中……

「さて、これで状況は理解出来たか」

「……一応は……」

そう言い、結弦が姿を現した。

「しかし、隠れて聞いていて良かったんですか？」

「問題ない。お互いの核心に迫るような事は言っていない」

「……それで自分に今の話聞かせて何をしろと？」

結弦はアレイスターからの呼び出しがあったため、来てみれば姿を隠してしばらく見ているように言われたのだ。

いまいち状況が掴めなかったが言われた通り能力で姿を隠して少しするとステイルがやって来て先程の会話を繰り返されたと言う訳である。

「仕事を依頼したい」

「自分にも魔術師退治をしろとでも？」

「いや、それは先程の魔術師と【幻想殺し】が行うだろう。そもそもそれでは魔術師に依頼した意味がない」

「そうでしたね。では何を？又、上条当麻かみじょうとつままですか？」

「それもないと言わないが、今回はこの一件自体の観測だ」

「この一件自体ですか？」

「ああ、先程も言ったが今回の一件はこの街において魔術師が事を起こしたのが問題だ」

「みたいですね」

「ならば、その事の顛末は把握しておかないといけない」

「その観測という名の見届け人をやって欲しいと？」

「そういうことだ」

結弦は目の前の人間の本心は分からない。

今回学園都市で魔術師がを起こしたのが問題だというが、そもそも事前に防ぐことは出来なかったのか。

学園都市内部の事を知るだけであればそもそも『観測者』は必要ない。

結弦はそう考えているし、以前聞いた際も否定はされなかった。

ならば、ここまでの事になる前に何かしらの手は打てたのではないか。

打てたならばどうして今まで放置し、このタイミングで解決を図ったのか。

疑問はいくつもある。

しかし、その疑問を解決するにはまだ情報が圧倒的に足りない。

目の前の人間に対抗するだけ情報が・・・

ならば・・・

「分かりました、今回の依頼もお受けします」

「そうか、今回はこちら側の貴重の能力者が現場には多くいる。それらとしても無視できない状況にもなるかもしれないが、くれぐれも自身の立場を忘れない事だ」

「上条当麻もいるし大丈夫ですよ」

「間違っても魔術師自身と戦うような事はしない事だ」

「・・・肝に銘じておきます。しかし、魔術師の次は吸血鬼ですか。本当にいるんですか？」

「私に聞かれた所で答えられないが、『吸血殺し』は実在している」

「故に存在するか・・・」

「さて、『吸血殺し』が吸血鬼の存在を証明するのであれば、『幻想殺し』は一体何を証明してくれるのだかね」

理由

結弦はアレイスターとの会話終え外に出てすぐ辺りを見渡しステイルを探した。

今回の本来の目的は『三沢塾』に監禁された【吸血殺し】デイルアップラッドの能力を有する少女の救出及び犯人の撃退だ。

結弦の仕事にしてもその目的があつてこそその仕事である。

そして今回その目的の実行部隊はステイル及び上条当麻かみじょうとうまである。

故にステイルは『三沢塾』に行く前に上条当麻と必ず接触を図るはずだ。

ならば現状ステイルについていけば上条当麻かみじょうとうまにも会うことにもなる上、物事の進行状況を把握できるからである。

とは言え・・・

(見当たらないな・・・まあ、この場にまだいたらいたで少し困るけど・・・)

結弦はステイルとアレイスターの会話後に自身の依頼の仕事のやり取りをしている。

その間にステイルがその場から移動していてもなんら不思議でもない。

とは言え、この場にいた場合、ステイルに色々と問い詰められかねないため、そういう意味ではない方が結弦としても都合が良い部分もあるのだが・・・

(そう遠くにはまだ行つてないと思うし、探すかな)

そう考え結弦は出てきた廃ビルの屋上へ移動した。

「街中を探すのにはあまり向いてないんだけど、やらないよりはマシ・・・かな」

思わずそう愚痴をこぼしながら結弦は光球を作りだし正面に放つていた。

結弦の能力【光源操作】トリックライトは光を操る能力である。

しかし、一言で光と表現しそれらを操れるの能力であるため、出来る事は多い。

波形、波長の変更によるレーザーによる攻撃手段や推進力への変換、屈折率の操作による自身の透明化や虚像の生成、又能力の応用により間接的にであれば、音や熱の生成まで可能とする能力である。現在の結弦には不可能ではあるが、自身と異なる動きをする虚像（良く見ると本物と見分けられるが）も生成可能な上、能力者の身体の問題などを無視した場合、理論上光速で移動する事すら出来る可能性を秘めている能力である。

とは言っても結弦はある点については使いづらい能力と思っているのだが・・・

それでも汎用性という意味では超能力の中でも上位に位置するだろう。

今回ステイルを探す目的で正面に光球を放ったのもその汎用性における応用によるものである。

世の中の物には基本的には色というものが存在する。

では、その色はどうやって見えているのか・・・

それは光に対する反射率である。

光が当たっている物質がどの程度反射しているかで色を識別している。

なので、色というのは光が作っているわけではなく、光が当たっている物質によるものという訳である。

それなら物質から反射している光の色が遠目からみる事が出来ればその色の物質がある場所が分かる事にならないか。

結弦が行っている事はそれである。

イメージとしてはコンサートなどで見かけるカラースポットライトが近いだろう。

カラースポットライトの光を意図的に作っているのだ。

自身で発光体を作りその光の反射光を操作して遠くまで視覚化できるようにして、その色から物のある場所を判断しようとしているのだ。

以前に夜の学園都市にて神裂を探したのもこれである。

しかしこれはあまり効率が良くない。

神裂を探した時はまだ建物の屋上を絞った上で夜で行ったが故に周りの景色に変化がなかったために判断はしやすい部分があったが、今回のような状況では問題が多すぎるのである。

まず大前提として対象に結弦が発した発光体の光が当たらなければ意味がない。

つまり、屋根等の遮蔽物があった場合は探しているターゲットは検知できない。

次に光に当たった対象が具体的に何なのかは判断が出来ない点もある。

対象のおおよその色は識別出来てもそれが生物なのかなんなのかの判断は出来ないのである。

そして何よりの問題点は有効範囲にあるだろう。

そもそもが確実性に乏しいにも拘らず探れる範囲が広くない。

光事態は広範囲に届くがそれら全てを操作する能力を結弦は有していないのである。

発した発光体を周りの見られないようにする事はもちろん視覚化している色も見られないようにする事もしなければならぬ事も関係しているのだが、それでもせいぜい半径三十メートル程である事から、結弦もせいぜい視覚による探索の補助程度にしか考えていない部分がある。

汎用性は高く出来ること自体は多くても全てが実用レベルかは別問題である。

(他に何か方法を考えないといけないかな)

結弦自身がそう思わらずにはいられないほどの精度な事に思わず毒づかずにはいられなかった。

結弦は件の方法でのステイルの発見はあまり期待していなかったが、今回は思いのほかうまくいった。

ステイルの髪色が赤色と分かりやすい色だったのもあるだろう。

ステイルを見つけてから気づかれないよう近づきいくと・・・

「・・・ちっ！」

とあからさまに嫌そうな顔を隠そうともせずに舌打ちをしていた。
(?)

結弦はその理由が分からず、もしかして上条当麻かみじょうとうまと共闘が気に食わないのかと何となく考えていたが、その予想が間違っていた事に気づいた。

「やだ！ 飼う飼う飼う飼う飼う……」

(この声は……)

ステイルとは異なった女の子声が出たため、そちらを向くと、五十メートル程先に上条当麻かみじょうとうまとインデックスがいた。

結弦が追いつくまでに上条当麻かみじょうとうままでたどり着いていたらしい。

(やっぱりインデックスさんというのはあまり良い気がしないんだな)

ステイルが先程舌打ちをした理由に当たりをつけていると当のステイルはルーンのカードをばら撒いて何かをしていた。

(人払い……かな?)

結弦がそう思った次の瞬間辺りの人影がなくなっ行って行ったのと同じくしてインデックスは何かを感じたのか一人でどこかへ行ってしまった。

(インデックスさんも遠ざけたのか)

ステイルとしてもインデックスを巻き込みたくないだろう。

形は違えど以前の記憶の件にしても彼なり彼女を思っていた結果なのだから……

インデックスが曲がり角を曲がった所でステイルは上条当麻かみじょうとうまに近づき声をかけた。

「久しぶりだね、上条当麻」

ステイルが挨拶後ステイルは馴れ合う気はないらしく一悶着はあった物の今回の依頼についてはスムーズに進んでいた。

三沢塾に少女が監禁されていること、それに魔術師(厳密には錬金術師らしい)、その魔術師の名はアウレオルス・イザードということなど結弦も詳細は知らなかったため、その情報を有り難く思いながら

聞いていた時……

「ちよつと待て、聞きわけが良すぎないか？」

ステイルがそう良い話を中断させた。

そこで、結弦は改めて気づく。

(そういえば記憶喪失の件は知らないんだっけ?)

以前インデックスを救った際に上条当麻は記憶を破壊されている。

その関係で彼は上条当麻を取り巻く環境はもちろん上条当麻自身

についても知らない。

しかし、彼は上条当麻でいる事を決めていた。

それでもどうしても違和感を感じる部分は生まれるだろう。

結弦はどうするのかと見守っていると……

「はくたまに真面目に話を聞いてやるとこれかよ」

「……まあ、良いか。話がスムーズ進む分には問題ないし」

どうにか誤魔化したのを見て結弦も思わず安堵していた。

上条当麻でいようと彼がしている以上上条当麻として見ようと結弦は決めたからであった。

その後一通り説明を終えた所で……

「君だって来るんだよ?」

と最後の最後に付け足していた。

「はあ?」

「拒否権はないと思うよ。君が従わければ、傍にいるインデックスは回収……という方向になるから」

ステイルのその言葉を聞き、結弦は納得する部分があった。

少し疑問があったのだ。

今回の件に上条当麻を協力させると決めたのはアレイスターだ。

しかし、そんなこと上条当麻からすれば知ったことではない。

それならどうやって土俵に上げるのかと……

そのためのカードがインデックスという訳だ。

現在の^{カミジヨウトウマ}上条当麻は本当の意味でインデックスを知らない。

それでも、記憶を失って今日までで^{カミジヨウトウマ}上条当麻に対するインデックスの目がどういったものかは分かるだろう。

それから考えたら上条当麻かみじょうとうまとして過ごす以上彼女と離れる事は避けた方が良くことは分かるであろう。

であれば、十分な交渉材料だろう。

それこそ拒否権を与えないほどには……

「デメエ……」

「ふん、殺し合いならこの一件の後にしよう。言い忘れたけど、監禁されている少女デイルーフブラッド【吸血殺し】の本名は姫神秋沙ひめがみあいさ。写真は渡した資料に入っているから」

そう言われ、その資料の中の写真を見た上条当麻かみじょうとうまは驚いた表情をしていた。

そして確かにこう口にしていた。

「ふざけやがって！」

一通りの説明後、インデックスを巻き込みたくないと言うことで怪しまれないように一度返って出かける事を伝えに帰った。

ついて来るとも言っていたらしいが、何やら科学サイドの用語を並べて留守番させていた。

どうやらインデックスは科学サイドの事には極端に疎いらしく、上条当麻かみじょうとうまの言葉に知恵熱を出していた。

インデックスはインデックスで何やら野良猫を飼いたいとの事で一悶着あったらしいが最終的には上条当麻かみじょうとうまが折れたらしい。

「それじゃあ行ってくるから、留守番よろしくな」

「まかせてなんだよ！」

そういうインデックスの腕の中で「にゃ〜」と鳴く猫を見て改めて項垂れながら部屋を出ると、ステイルが通路で何やらペタペタと貼り付けていた。

「何やってんの、お前？」

「あの子の護衛にルーンを貼っているのさ、大した意味はないかもだけど、あの子が逃げ出す時間ぐらいは稼げるかもしれないからね」

「ルーン……魔女狩りの王か……」

そう呟く上条当麻かみじょうとうまどこか他人事のようにであった。

目の前の神父は護衛と言った。

それはなんだかんだ言っただけでインデックスを思っているのではないか……

今の上条当麻は以前のかみじょうとうま上条当麻を知らない。

周りが接する上条当麻がどんな人物だったのか……

そう考えるとまるで自分が二人いる、そんな風に思わずにはいられなかった

「君は錬金術についてどこまで知っている？」

三沢塾への移動中細かい補足情報をステイルしていた。

「えくと、鉛を金に変えるとか不老不死の薬だとか」

「まあ、そうだね。しかし、錬金術師には本来究極的な目的が存在する」

「目的？」

「世界の全てをシユミレートすることさ」

「？」

「もし、頭の中に思い描いた物を現実世界に引っ張り出せたらどうなると思う？」

「はあ？そんなの……」

「そういう事さ、怖気づいたなら君だけ尻尾巻いて逃げるといいさ、その場合は彼女を回収するだけだしね」

そんな二人のやり取りを見ていた結弦は思わずため息が出ていた。

(この二人は……)

これから戦場に向かうのに大丈夫なんだろうかと思わずにはいられなかった。

(しかし、世界の全てをシユミレートか……これは結構な大仕事なのかな)

今回の結弦への依頼も直接的な干渉ではないが、戦場に足を踏み入れる以上巻き込まれないとも限らないのだから……

そんな事を考えていると三沢塾に到着していた。

ステイルと上条当麻かみじょうとまは正面から堂々と三沢塾に入って行っていた。
「案外普通だな」

「そりやそうさ、表向きは今も塾として運営しているんだからね。しかし、ここはもうアウレオールの魔術結界の中だ。気を抜かない事だね」

「なら何か対策しろよ！」

「無駄だね。僕は魔術師故に魔力で感知されるし、君にしても【幻想殺し】イマジンプレイカーの関係で感知される。無駄な事はするだけ無駄さ」

ステイルの説明を聞きながら、結弦はそれでは自分とは考える。

結弦は超能力者だ。

魔力なんて扱えないし、【幻想殺し】イマジンプレイカーなんて特異な能力も有していない。

能力で姿は隠しているがそれだけだ。

自分は気づかれていないのではないかと考えていると、すぐにさらなる謎が浮かび上がってきた。

「なんだあれ？」

上条当麻かみじょうとまの発言につられそちらに目を向けると、一角だけ妙にぽっかりと空いた空間に西洋の鎧一式が三沢塾の柱に寄りかかっていた。

不審に思い近づくところの進学塾に場違い感が際立っているのがわかる。

「ロボット？」

（いや、これは・・・）

「・・・どうした？ここには何もない行くよ」

「ああ・・・」

ステイルに行くと言われたにも関わらずどうしてか気になってしまっていた。

「確かに君にとっては珍しい物だろうね」

「？、ロボットなら科学側こつちの領分だろ？」

「何を言っている。これは只の死体だよ」

「!？」

そうステイルに言われてから気付く、鎧から地面に血が広がってい

る事に。

「おそらくはローマ正教の十三騎士団だろう。アウレオルスは元々ローマ正教所属だし、裏切り者を狩りに来たんだろうが、この分じや全滅だろうね」

「……どうして周りが騒がないんだ？」

その時塾生が上条当麻^{かみじょうとうま}達の目の前を通り地面の血の池を踏んで通ったが、靴には血は付かず波紋のように広がった。

「なんだ今の？」

「なるほど、表と裏というわけか」

「？」

「分かりやすく言えばコインだよ。コインの表側の住人^{塾生}は裏側の住人^{外敵}に気付くことも干渉も出来ない。その逆も然りという訳だ」

そう言い、ステイルは死体に向け何やら祈りを捧げているようであった。

「行こう、戦う理由が一つ増えたようだ」

先に進んでいく二人を見て結弦は思案する。

（それぞれが干渉出来ないなら、どうして自分にも裏側の世界が見えている？もし、外敵の一人と見られているならどうして存在に気付かれた？）

そんな謎が浮かんだが、結弦にはその理由を知る方法を持ち合わせていなかった。

偽物

三沢塾に潜入して初めにステイル達が行った事は隠し部屋の探索だった。

いくら件の錬金術師が潜んでいると言っても表向きは塾として機能している以上どこかに隠れて潜んでいるはずである。

なので、その場所を探している訳だが・・・

「足が・・・」

上条当麻が疲れた様子でそんな事を呟いていた。

現在三沢塾はコインの表と裏二つの世界で形成されている。

そしてそれぞれの世界は干渉出来ない。

それが何を示すかの結果が疲れの理由である。

つまりは裏側の住人が表の建物を歩くと基本干渉出来ない以上歩いた衝撃が全て自身の足に跳ね返ってくる事になる。

そうなれば、当然通常以上疲れるという訳である。

「・・・相手も同じ条件である事を祈るしかないね」

ステイルはそう吐き捨てるように言うのを結弦は後ろから見ていたのだが・・・

(・・・普通に歩いてる?)

結弦は一般的な感覚で歩いているのである。

先を歩いている二人のように足に衝撃が跳ね返ってくる感覚は感じられない。

それはつまり結弦がコインの表側に存在していること意味していた。

(という事は自分は外敵認定はされていないって事だよな・・・それならさっきの死体が見えた方に何かあるって判断して良いはずだけど、さてどうしたものかな・・・)

そう言う結弦はどこか楽しそうな顔をしていた。

「なあ、エレベーター使った方が良かったんじゃないか?」

又、歩いていると上条当麻がそんな提案をしたが・・・

「コインの裏側の住人の僕達に表側のボタンを押すことは出来ない」「そつか・・・じゃあ、電話はどうなんだろう?」

「はあ?」

「いや、コインの裏から電話してコインの表に通じるのかな?」

「ふん・・・試してみればいい」

「そうする」

そう言い上条当麻は電話をかけた始めている。

今二人がいるのは戦場で敵地である。

その事はステイルが一番分かっているはずだが、その行為を止めないのを見て、結弦はステイル人間性を見た気がしていた。

その後上条当麻は自宅に電話をかけ、無事に繋がったらしい。

インデックスと冷蔵庫の中のプリンについての言い争いをした上で電話を切った。

「てか、これ大丈夫だったのか?これがきつかけに襲われるとかねえよな?」

「さあね、ただどの道侵入に気づかれているんだ。大した問題ではないよ」

「・・・何で襲って来ないんだ?」

「それこそ僕の知る所ではないな。なんにしても気は抜かない事だね」

「・・・」

そう、上条当麻がインデックスとどれほど日常的な会話を行おうと置かれている状況が変わる訳ではない。

先程入口に死体があったように・・・

ここはそういう場所なのだ。

ここに居る三人は改めてその事実の意味を噛みしめ再度歩を進めた。

又、しばらく歩いていると明かりが点いている部屋が見えた。

部屋の出入り口で歩みを止め、覗いてみるそこは食堂のようであった。

生徒達が集まり雑談をしながらも食事を取っていた。

「ふくん、科学宗教つてのは初めてだけど、至って普通だね。てつきり教祖様の写真でも飾っているのか思ったよ」

「確かに、危険度は低そうだけど・・・」

上条当麻も特別変わった所は見られない事からそんな感想を口に出している時に異変は起きた。

今まで雑談等をしていた生徒達が一斉に上条当麻達の方を向いたのだ。

「これはちよつとまずいかもね」

ステイルがそう言った意味に上条当麻頭がまだついてこれていないようであった。

「惚けるなよ、コインの表側の住人に裏側の住人が見える訳ない」

そうだ、表側に裏側は見えない。

その事は入口の死体で証明されていたではないか。

「熾天の翼は輝く光、輝く光は罪を暴く純白・・・」

その時生徒の一人が何かを唱え始めたかと思つたら次々と多くの生徒達が続いて大きくなっていた。

「自動の警報か。隠し部屋への対策の一つで本来表側の生徒達を裏側に立たせているんだろう」

「どうすんだよ・・・」

「それはもちろん・・・【幻想殺し】、君の出番だ！」

そう言い終わるとステイルは走り出しこの場を後にしだした。

「は？え・・・!?!」

上条当麻は一瞬状況が把握できずにいた。

そして改めて部屋を確認すれば、何やら魔術らしき物が発動され始めていた。

そこで、上条当麻も気付いた、自身の右手に宿る【幻想殺し】の存在に・・・

しかし・・・

「これは流石に・・・」

次の瞬間上条当麻も全力で逃げ始めた。

数が絶対的に多いのだ。

【イマジンブレイカー
幻想殺し】は右手に宿る能力だ。

逆に言えば右手にしかその効力はないのである。

対処出来るにも限界があるのは当然である。

故の逃亡である。

上条当麻はいつの間にかステイルかみじょうとうまに追いついていた。

「おい！逃げるな！その右手は竜王ドラゴンプレスの殺息の一撃も防いだんだぞ！無防備な背中を見せるな！」

「数が絶望的だ！あんなもん右手一本で対処出来るか！」

「ちっ！しかし、まさかレプリカとは言え、『グレゴリオの聖歌隊』とは……」

「ぐれ……？なんだそれ？」

「元はローマ正教の最終兵器だ。三三三三人の修道士を集めて行う大魔術だ」

「そんなのどうすんだよ」

『グレゴリオの聖歌隊』はその性質上大勢の人を集めて同時に操らなければ発動しない。その同調の核を潰せばいい」

ステイルと上条当麻かみじょうとうまは逃げていると階段に差し掛かり、上条当麻かみじょうとうまが上に行くべきか下に行くべきかを考えているとすぐ横にいるステイルがふと発言をした。

「秘策があると言えばあるんだが……」

「そんなのあるならさっさと使え！」

上条当麻かみじょうとうまが食って掛かるかのように文句気味に言うところか
「そうかい」

そう言い、ステイルは上条当麻かみじょうとうまを階段の下へ突き飛ばした。

「え!?ちよっ……」

何とかこける事無く着地を行う上条当麻かみじょうとうま。

「何すんだ！テメエ！」

とすぐに振り返り今度こそ文句を言う上条当麻かみじょうとうまであったが……
「お気の毒に、カカシ君♪」

ステイルはさっさと走り去って行った。

(おとり作戦か、どうしたものかな・・・)

結弦はその光景を見ながら思案していた。

現状、放たれていた魔術の近くに上条当麻かみじょうとうまがおり、ステイルはこの場を離脱。

あの魔術がどういったプログラムで動いているかは分からないが、ステイルの思惑通りに魔術は上条当麻かみじょうとうまを狙う動きをみせていた。

結弦が今思案しているのは今後の立ち回りである。

ステイルの作戦通り相手の魔術は上条当麻かみじょうとうまに向かっている。

この事からもおそらくではあるが結弦の存在は相手に気付かれない。

ならば自身の立場上ばれるような事は避けるのが得策だ。

しかし、上条当麻かみじょうとうまだけでこの状況は打破出来るのか。

そして何より上条当麻かみじょうとうまにこのまま付いているべきかもあった。

今回の依頼はこの事件自体の観測である。

一応は上条当麻かみじょうとうまの観測も含まれているとは言われたが、この事件そのものは魔術側が起こしたものだ。

ならば、今後の事も考えて魔術側ステイルに付いていた方がいいのではないか。

そんな事を様々な事を思案したが、状況は常に動いている。

あまり考えに没頭する時間は多くない。

あまりぐずぐずしていると何も出来なくなってしまう・・・

(ああもう・・・！)

結弦は一瞬だけステイルの方を確認すると、その先の景色は暗闇だった。

下手をするとステイルを今後見失い得るだろう。

事実ステイルの姿を確認しづらくなつて来ていた。

(最悪な事になるよりは上条当麻かみじょうとうまかな)

そう結論付け結弦は上条当麻かみじょうとうまを追った。

すると上条当麻かみじょうとうまの目の前に眼鏡の少女が立っていた。

そして・・・

「罪を罰するは炎・・・」

目の前少女が何か唱え始め魔術が発動されかけており、警戒心を強めている上条当麻であったが、そこで異変に気付く。

少女の身体が傷つき始めたのだ。

(これは・・・)

そこで結弦は思い出すと同時に上条当麻も知識としては知っていた。

超能力者に魔術は使えない。

ならば、それでも無理やり使おうとしたらどうなるか。

発動しないだけならばまだ良い。

だが、魔術のプロセスを踏んでいる以上発動はする。

その代わりに何かしらの反動が来るようなものだとしたら？

「やめろ！自分の身体がヤバくなってる事くらい分かってんだろー！」

上条当麻は思わず叫んでいたが、少女は止まらない。

「・・・世界。事故の内側と世界の外側、を、繋げ」

と少女の限界が来たのかぷつんと発動されかけていた魔術が消え、少女は倒れこもうとしていた。

上条当麻は地面へ倒れこむ前に少女に駆け寄り抱きとめる。

しかし、そこで気付く。

少女が倒れた事で消えたのは少女の魔術だけである。

元々の追われていた数多くの魔術は消えていない。

そして、止まった事により、囲まれてしまっているのだ。

当然右手だけで対処出来る物ではない。

上条当麻は思わず目を閉じた。

(っっ！)

結弦は流石に無視はするべきではないと思いき加勢するために動くかと思つた時に異変に気付く。

上条当麻も変に思つたのか目を開けていた。

(止まってるっ！)

上条当麻を追っていた魔術がその場で上条当麻に襲いかからずに止まっているのだ。

そして、次の瞬間には魔術は力を電池が切れたかのように、消えてしまった。

「これは一体？」

上条当麻は状況がまだ把握できずいたが、結弦は1足先に気付く。

この結果を作ったであろう人物に・・・

(この人は・・・)

そして、件の人物が階段の踊り場にて足音を改めて鳴らし、上条当麻も気付き、足音の方を確認すると、そこには姫神秋沙が立っていた。

「とりあえず、おしまい」

「お前凄いな。実は無免許名医さんとか？」

姫神秋沙は現れてから倒れた少女の治療を買って出た。

少女の怪我が見た目ほどは酷くないのもあり、適切な処置を施したおかげで大事には至らなかった。

しかし、上条当麻が感嘆のそ声を上げてしまうのも仕方ないと思える程に姫神秋沙の対応は的確であった。

本人曰くは、「人より血の流れには詳しいから」らしい・・・

「医者じゃない・・・」

上条当麻の疑問に答えていた姫神秋沙であったが、次に出てきた言葉は予想外のものであった。

「私。魔法使い」

一瞬の沈黙の後・・・

「えっと、どの辺が魔法使い？」

「魔法のステッキも持ってる」

そう言いながら彼女が取り出したのは・・・

「つて警棒じゃねーか!？」

「新素材」

「ふざけんなー!」

そこでふと上条当麻は気付いた。

怪我人はもちろん、今の状況が気を逸らしても問題ない状況だとい

う事に。

それが分かっただけでふと緊張していた身体から力が抜けるのを自覚した。

「そうだ！救急車呼ばないと」

冷静な判断力が少しは戻ってきたのか、そう口にはしていると・・・

「それは良い」

とまるで他人事ように姫神秋沙ひめがみあいさは答えていた。

「何、他人事みたいに言ってるんだよ。お前だって帰るんだから。昼間もそうだったんだろう？」

その発言から二人を見ていた結弦はやっぱりと思った。

最初に姫神秋沙ひめがみあいさの写真を見た際に上条当麻かみじょうとうまは何か思う所があるようであった。

その事から前もって知り合いの可能性も考えていた。

そして、知り合いで思い当たる節があるならば賛同も得られるかと考えたのだが・・・

「それは違う」

姫神秋沙ひめがみあいさから出たのは否定の言葉だった。

「私にも目的がある。ここから逃げたす事ではなくここでなくては出来ない目的・・・違う錬金術師でなくて不可能な目的というのが正解」

「けど、仲間だったら監禁とかしねえだろ？」

「それはアウレオルスに乗っ取られる前の話」

「え？」

「私がここから出ないのは必要性を感じないから、不用意にであればあれを引き寄せるから」

「吸血鬼か？」

「・・・知ってるんだ。そう吸血鬼。」

「じゃあ、お前吸血鬼に気づかれたくないからここにずっと隠れてるっていうのか？」

「吸血鬼がどんなのか知ってる？」

問われても上条当麻かみじょうとうまに分かる訳もなく小首かしげてしまったのだ
が・・・

「変わらない」

姫神秋沙ひめがみあいさ核心を持って……

「私達と何も変わらない。誰かのために笑い、泣き、そして行動出来る。そんな人達。私の血はそんな彼らを引き寄せ殺してしまう。学園都市でならその秘密も分かると思ってたけどダメだった。私ともう殺したくないだけ」

「……一つ聞かせてくれ。吸血鬼を殺したくないならなんで外でいたんだ？」

確かに疑問だ。

上条当麻かみじょうとうまと姫神秋沙ひめがみあいさは接点を持っているようである。

しかし、上条当麻かみじょうとうまは三沢塾みさわじゅくに姫神秋沙ひめがみあいさがいる事を知らなかった。

それなら外であつたはずだ、だがそれは今の姫神秋沙ひめがみあいさの考えに反する。

そんな上条当麻かみじょうとうまのその疑問に姫神秋沙ひめがみあいさは即答した

「簡単。アウレオルスが私を求めるのは吸血鬼が欲しいから。吸血鬼の力で助けたい人がいるから」

「でもそれだとお前の目的と正反対のじゃねえか？」

「アウレオルスは約束した。吸血鬼を絶対気付つけないって。私もこの力を人助けに使いたい」

「……、そんなのダメだ」

「？」

上条当麻かみじょうとうまの言葉の意味が姫神秋沙ひめがみあいさはもちろん結弦も始め分からなかった。

しかし、上条当麻かみじょうとうまは確かな意思を持って……

「本当にアウレオルスがお前の言う通りまだ人間でいるって奴なら、これ以上間違いを積み重ねる事はダメだ」

(流石上条当麻かみじょうとうまかな)

結弦は思わず笑っていた。

アウレオルスは超能力者の生徒に魔術を使わせ傷つけた。

それは明らかに生徒の身を案じていない、非人道的な行いだ。

さらに言うなら人も殺めている。

それでもアウレオルスが本当に話通りの人間ならこの状況を止めさせるべきだ。

人を助けるために人を殺めるこの状況を・・・

上条当麻はそう言っているのだ。

(さて一まずは真実の確認かな)

結弦が今後の方針になるであろう事を考えていると、声が聞こえた。

「くそ、くそ！断然、何だこの重さは。たかが材料のくせに足を引つ張るとは・・・。くく、足、か。足を引つ張ると来たかアウレオルスII イザード！今の自分に引つ張る足もないだろうに！あは、あはは、どいつもこいつも馬鹿にしおつてからに、必然全て溶かしつくしてくれらる・・・っ!!」

まるで常軌を逸した声で近づいて来ていた音がいたのだが・・・

「うっ・・・!」

上条当麻は思わず絶句した。

声が出た方にいた男はスーツを着た緑髪の外国人であったが、姿が普通でないのだ。左腕と脚は根元から切断されており、代わりに何か金色の歪な棒が傷口に無理やり刺して義手と義足にしているのだ。

そして何より異常だったのが、音が両手に三人ずつ合計六人の血まみれの少年少女の襟首を掴み引きずっていたのだ。

そこで向こうも気付いたようであったが・・・

「何故『ここ』いる、少年？『こちら』にいるべきは魔術師のみだろう？貴様も侵入者・・・あの炎使いの知り合いか？」

男の問いは上条当麻には聞こえていないようであった、それよりも・・・

「お前そいつら・・・」

「当然、ただの材料だ。錬金には材料が必要なんだ。そんな事よりおかしい。貴様は今もアウレオルスIIイザードの瞬間錬金に標準を定められているというのに」

アウレオルスIIイザードという言葉に身構えた上条当麻であったが、そこで姫神秋沙が平然と告げた。

「可哀そうに、気づかなければ。アウレオルス・イザードでいられたのに」

「いられた？」

かみじょうとうま上条当麻は意味が分からず聞き返す。

「あれ、偽物。偽物」

「あれが偽物・・・!？」

「彼が作り出したそう影武者。人間ですらない」

かみじょうとうま上条当麻は色々と疑問があつたが、目の前の男が待つてはくれなかつた。

「きつぎさま!!」

男の怒号と共に残った右腕の袖から黄金めいた巨大な鏃が飛び出し、男の周りを高速で回転していた。

男が引きずつていた少年少女を貫きながら・・・

鏃に貫かれた少年少女は蒸気を発する程の高熱の液体の金属に姿を変えていた。

「な！・テ・メ・エ！・何をしたのか分かつてんのか!!」

「当然！・絶命！」

そう言いながら今度は鏃をかみじょうとうま上条当麻に向け射出する。

「っ!!」

かみじょうとうま上条当麻は咄嗟に右手を前に出していた。

前に出した右手はまるでカッターナイフで切られたように熱を帯びた怪我を負う。

そして、放たれた鏃は男の手元へと戻って行く。

【幻想殺し】は異能の力こそ打ち消すがそれ以外には効果を成さない。

思わず奥歯を噛みしめるかみじょうとうま上条当麻であったが、彼以上に焦りを覚える人物がいた。

「・・・悄然。なんだそれは？」

そう言う男が手元に戻した鏃はボロボロに壊れてしまっていた。

「自然、何だその右手は？当然、変換されん。我が瞬間錬金リメン・マガナは数ある錬金の理想のカタチ。いかなる物も純金に強制変換されるはずだ」

「りめん・・・まぐな・・・？」

「はは、愉快！面白いぞ少年それはいかなる人体の神秘だ！」

男は水平手を広げ、新たな鎌をだした。

もう一撃くると身構えた上条当麻かみじょうとうまであったがそこで異変が起きた。

男側の地面に穴が開いたのだ。

「!？」

男は何が起こっているかは分からなかったが、気付いた時にはもういくつかの穴が空き、そして・・・

「下の階に落ちて下さい」

そんな声が聞こえ地面を抜かれ下の階に落下した。

その光景に何が起こったか理解できなかった上条当麻かみじょうとうまであったが、この場には怪我人や姫神秋沙ひめがみあいさもいる。

とりあえずの脅威が去った以上、又上ってくる前にこの場を離れるように結論付けた上条当麻かみじょうとうまであったが・・・

「あいつが落ちる直前声がした？」

スーツの男は元いた階から三階も下の階へ落とされていた。

「疑然。何が起きた？」

男は突然起きた状況を未だに理解出来ずいたが、そこで声が聞こえた。

「突然失礼しました」

声に驚き改めて正面を見ると、結弦が姿を見せた。

「・・・何者だ」

「空目結弦うつめゆづる。超能力者です」

「貴様何故私が見えているのだ？」

「・・・やっぱり自分は表側にいるんですね。建物を壊せたので予想は出来ましたが。その理由については自分も分かりかねます」

「・・・超能力者が私に何用だ」

「何用ですか・・・先程の少年の代わりに自分の相手をしてもらおうと思いませんか？」

「自然。何故私が貴様の相手をしなければならぬ？」

「十分な理由ならあるでしょう？自分があなたを確認でき、ここへ連れ出した時点で自分は侵入者です。あなたの役割はおそらく侵入者の迎撃でしょ？アウレオルスⅡイザードさんの影武者さん。偽物：アウレオルスⅡダミーさんとも言うべきですか？」

「貴様!!超能力者の分際で私を否定するか!当然。我が瞬間錬金の材料になることを望むなら叶えてやろう」

アウレオルスⅡダミーがそう発言直後結弦の足への負担が大きくなった気がしたため、改めて足で地面を足裏で何度か蹴るとさつきまでと比べて明らかに足裏への負担が増していた。

(コインの裏側に来たかな)

考えれば当然である。

表は裏へ干渉出来ない、その逆も然りである。

ならば、結弦が表にいる以上迎撃も出来ない。

ならば、裏側へ連れてこなければおかし。

「さて・・・」

結弦は改めてアウレオルスⅡダミーを見据えて構える。

実は結弦はこの依頼を受けた時点から大きな疑問が二つあった。

まず、アレイスターとステイルの会話からそれぞれの技術が流出を

嫌っているようであった。

その上で上条当麻は無能力者だから問題ないと。

では自分は？

結弦は大能力者である。

結弦自身だからと言って魔術を見たらそれを理解出来るというつもりはないし、実際そんなすぐに理解は出来ない。

しかし、詳しく調べれば可能かもしれない。

いや、仮にそれが不可能だとしても魔術師達が知れば良い顔はしないだろう。

立場上見つかからないよう動くつもりではあるが、それでもばれる可能性はある以上リスクが伴うはずだ。

では何故そんな事はしたのか。

そして、二つ目にアレイスターが何故わざわざ忠告をしてきたの

か。

アレイスター立場上分からはないが、『観測者』の話は結弦にとつても願つてもない話である以上は基本無駄にする気はない。

以前のインデックスの時にしても当事者達と表立ってやりやっではない。

ならば何故と考えていたのだが、アレイスターは言っていたではないか「間違つても魔術師自身と戦うような事はしない事だ」と。

(全く本当に怖い人だ)

結弦はアレイスターの怖さを再認識しながらも目の前の敵にへと集中していく。

結弦の魔術との初戦闘を迎えようとしていた。

偽善者

先に動いたのは結弦だった。

アウレオルスⅡダミーが使う瞬間錬金リメンヒマグナという魔術の条件等は定かではないが、アウレオルスⅡダミーはいかなる物を純金に変えると言
い、事実塾生達を一瞬で液体金属に変えていた。

この事から最悪の場合、相手が扱っている鏝に触れた瞬間負けが決まってしまうのだ。

とならばまずは鏝に当たらないように動き続けて糸口を見つける。と言つてもここは進学塾の建物の中である。

当然広範囲の行動は難しいが、結弦はレーザー推進を利用し、出来る限り行動範囲を広げて動いていた。

「必然。我が瞬間錬金は僅かでも傷つけた物体を純金へ変換させる必殺の魔術。恐れるのが当たり前である。そうだもつと恐れて醜くもがいてみせろ!!」

「・・・」

結弦はアウレオルスⅡダミーを観察しながら考えをまとめていた。(わざわざ説明してくれるとは、随分苛立ってるのかな。しかし、僅かでも傷つけたら・・・か。つて事は傷つかなければつてのは無理かな。となると物体の定義を調べる方が妥当かな。後はもう一つ・・・)

結弦がある程度の考えをまとめた所でアウレオルスⅡダミーが次の行動に出た。

「しかし、考えが甘いぞ、超能力者」

瞬間錬金を乱射し出したのだ。

その乱射速度は速かった。

パツと見ても一秒間に五回以上の射出と巻き戻しを繰り返している。

「連射可能な上、速いと来た。数打ち当たる？それとも消耗戦狙い・・・どちらにしても長引けばヤバイかな」

いくら鏝が小さいとは言え、避けれる行動範囲が狭い以上高速で連射可能なのであれば、避け続けるには限界がある。

寧ろ相手の連射速度をみれば避け続けられてる方が凄いくらいだ。
結弦は相手が冷静な判断能力を失っている事実に感謝の気持ちを
抱くほどであった。

(悠長にしてる余裕がないなら早々に実験その一といきますか)

結弦がそう結論付けた瞬間飛んできている鏃を正面に向き直し横
に避けた後にすぐにレーザー推進を利用し、アウレオルスⅡダミーと
の距離をいつき詰めにかかる。

アウレオルスⅡダミーは驚いた素振りをみせていた。

「愕然、何故距離を詰める？我が瞬間錬金をその距離で避けられると
でも思っているのか？自然。もしそうであれば愚かと言う他ないぞ」

アウレオルスⅡダミーは改めて瞬間錬金を結弦に向け発射する。

放たれた鏃が結弦の身体に傷を付け一瞬で純金に変換される。

そのはずだった。

しかし、鏃は結弦を貫通し、結弦の姿は跡形もなく消えてしまった。

「な!?!」

アウレオルスⅡダミーが状況に戸惑っていると、すぐ目の前から聞
こえた。

「こっちですよ」

「!?!」

(実験その一は確認完了つと。じゃあ実験その二!)

咄嗟に声に反応し、後ろへ交代するアウレオルスⅡダミーの目の前
に結弦は手を横なぎへ振るう。

レーザー光線を発生させているその手を・・・

「ぐ!!」

回避が完全には間に合わず、腹部に傷を負ったが、幸い大きな負傷
はせずに済んだアウレオルスⅡダミーは改めて結弦を見据えた。

「貴様・・・」

「俗にいうレーザーブレードって所ですかね」

そう言いながら出現させていたレーザーブレードを霧散させた。

「蜃気楼とはあの魔術師と言い、随分小癩な真似が好きらしい」

「蜃気楼ではないですけどね。理論は同じですが原因が違うので。そ

れより……」

結弦はアウレオルスⅡダミーの腹部を刺しながら……

「血、出ないんですね」

「……」

アウレオルスⅡダミーは答えられなかった。

先程の結弦の攻撃を受け、怪我をしている。

普通人間であれば怪我をすれば出血する。

しかし、アウレオルスⅡダミーにはそれがなかったのだ。

「あ、ああ……」

アウレオルスⅡダミーはその事実を受け入れられないのか、呆然と
していた。

「偽物だった事がそんなにショックでした？でも、自分としては最後
までお相手頂きたいのですが……」

「ふふ、あはははははは。自然。貴様が幻想を見せているのだな！必
然、万死に値するぞ。楽に死ぬると思うなよ能力者！」

今までも結弦の発言等で既に冷静さを失っていたアウレオルスⅡ
ダミーだったが、いよいよよをもって何か壊れてしまったかのように
狂気に満ちていた。

（本格的に冷静な判断力を失ってくれたのは、有り難いけど……正直
あまり近づきたくないな）

戦闘において冷静さを失うのは双方にとってメリットであり、デメ
リットでもある。

相手にする場合は確かに色々と策を張り巡らせやすい部分もある
だろう。

しかし、相手が陥っている感情が怒りといった物であった場合は逆
に何をしてくるかが読めなくなる。

分かることがあるとすれば、捕まったらろくな目に遭わないだろう
事だけだろう。

（とは言え、実験は二つとも自分に有利な結果だし……）

結弦はふと自分の携帯電話画面を確認し……

（準備も完了。やるしかないか）

そう改めて決意を決め、深呼吸をして・・・

「そろそろ決着をつけましょうか。悪いですがここからは遠慮しないですよ」

「それはこちらのセリフだ。後悔してももう遅いぞ!!」

そのアウレオルスⅡダミーの言葉を合図にお互いが動いた。

アウレオルスⅡダミーは瞬間錬金を構え、結弦はレーザー推進で距離を詰める。

放たれた瞬間錬金の初撃を体勢で躲していく。

しかし、瞬間錬金は次々と放たれる以上狭い廊下では限界がある。

結弦は手にレーザーブレードを出現させて瞬間錬金に向けて横薙ぎにぶつけるとバチツと音がなる。

「流石にこの程度の火力じゃ攻撃を消すことは出来ませんが、多少ずらす事くらいは出来ますよ」

「小癩なり!!しかし、そんなものがいつまで続くかは見物だな」

そう言いながら次々と瞬間錬金を放ち、結弦はそれにギリギリな所に対応していつており、度々大きな音も響いていた。

(さて、ここから先をより完璧にこなす場合は自分の演算能力が足りるかだけど・・・)

次の瞬間結弦は脚に力を込め直し、大きく前進する。

「自然。ここまで近づいて我が瞬間錬金を躲せると思っているのか!」

二人の距離はもう二、三メートル程まで近づいている。

瞬間錬金の速度と結弦が距離を詰め続ける事を考えるとほとんど距離は〇と言えるだろう。

「これで終わりだ!能力者!!」

アウレオルスⅡダミーから放たれた瞬間錬金は結弦の額を貫通した。

その後すぐに後方から声がした。

「こっちですよ」

「何度も蜃気楼とは芸がないぞ」

アウレオルスⅡダミーは声の方を振り向き、後方へ瞬間錬金を乱射

した。

しかし、その全てが空を切っていた。

一瞬また蜃気楼で自身の姿を消しているのだと考えていたが、そこで気付いた。

地面に落ちている携帯電話の光に・・・

「ボイスレコーダーってやつですよ」

「!？」

元の方角から声が聞こえ、向き直そうとした時、アウレオルスⅡダミーの見ている景色がかくんと動いた。

何が起こったのか分からずに状況を確認しようと見渡すと自身の純金で代用していた左脚も含め、両脚の先が切断されている事に気付く。

そして・・・

「がああああああ!!」

それを自覚瞬間に激痛に襲われる。

「言ったはずですよ。遠慮しないでですよって」

「つつ!!調子の乗るなよ!」

結弦の発言に少し思考力が戻ったのか、改めて瞬間錬金を向けようとしたが、結弦は発射される前にレーザーブレードを横薙ぎに振るう。

「があああ!!腕がくらくく」

「さて、ここままで・・・ですかね」

「何がどうなったと言うのか・・・」

「戦闘中は冷静であるべきですよ。一度虚像を見せた際に虚像は純金に変換されなかったなので、光には瞬間錬金とやらは効かないと思いました。なので軌道をずらすくらい出来ると判断しました」

「貴様・・・」

「後は簡単です。携帯のボイスレコーダーで声を録音した上で、タイマーでセット。その後軌道をずらす際に生じる音に紛れ込ませる形で、あなたの後ろに携帯を投げるだけです。何度も虚像に騙されているみたいだったので、流石に警戒はされると思いますが、声が含ま

れていれば、今のあなたなら騙せると考えた結果がこれです」

「・・・何故だ。何故瞬間錬金を有するこの私が超能力者如きに・・・」

「・・・ごめんなさい。恨んで貰って構いませんから・・・」

そう言った次の瞬間、もう一度結弦はレーザーブレードを振るい、アレイスターⅡダミーの首が切断される音だけが静かな廊下にやたらと響いていた。

「知恵熱出そう・・・」

結弦がアウレオルスⅡダミーを倒しての最初の感想としての発言がそれだった。

最後にアウレオルスⅡダミーの相手をしていた時は能力の大盤振る舞いであった。

アウレオルスⅡダミーへの説明は省いたが、アウレオルスⅡダミーの後方へ携帯を投げた際、音は誤魔化しても携帯自体を見られたら意味がない。

なので、その可能性を失くすため能力で見えなくしていた。

その上で、屈折率を変更し、自身の位置を錯覚させながらレーザー推進とレーザーブレードの同時使用しながらその二つにも必要最低限の出力を持たせる。

これだけの能力使用による演算を同時にやってのけたのだ。

さらにもう一つ、結弦の能力はあくまで操作であるため、光そのものは外部から必要とする。

しかし、ここは放課後の人気のない建物の中である。

故に存在する光力も限られている。

昼間の晴れた屋外であれば、使える光力は常に近くに存在するが、ここではまず光力を集めるための時間も要する。

その点に関しては実は予め確保しておく事で補っていたが、より多くの事をするにはより多くの光力がある。

そのような状況で戦っていたのだから負担も相当なものである。

「確かにこんな事続けてたら、能力成長の促進にはなりそうだな。まあ、何はともあれ何とかなつて良かった・・・」

そう言いながら深く息を吐きながら、自身が投げた携帯を取りに向かう。

改めて一呼吸を置き、結弦自身最初発言も含め一時的な現状逃避をしているだけである事を嫌でも実感させられていた。

「・・・」

結弦は自身の携帯を拾い、倒れているアウレオルスⅡダミーを改めて眺める。

（相手は人間でもなければ生物でもない。故に遠慮しなくても良いと思つてやった。なのにやっぱり割り切れてはないか。それにどんな言い訳しようと命あるものを殺めたんだ・・・本当にどうしようもない偽善者だな）

結弦は自分の中に何か苦い物を残した事を自覚しながらその後にした。

黄金鍊成

アウレオルスⅡダミーに無事勝利した結弦であったが、すぐに次の問題に直面していた。

(さて、どこに行ったら良いものか)

これからどうしたらいいのか分からないのだ。

いや、厳密には少し異なる。

やることそのものは変わらないし、分かっている。

この場で起きている魔術師の三沢塾の占拠という事件の終着点を見届ける。

その目的自体に変更はないし、行動理念の根底にはきちんともある。しかし、どこに行けばいいのか分からないのである。

アレスタアの依頼から考えても上条当麻達かみじょうとうまを追っていけば問題ないのだが、アウレオルスⅡダミーとの戦闘を経て、見失ってしまった。

上条当麻達かみじょうとうまを見つけるにしても手掛かりがないのである。

(闇雲に探す・・・いや、それよりは・・・)

結弦が今後の方針に決定させようとしていたら、カツンと前方から足音が聞こえた。

足音の方へ意識を向けると・・・

(確かにこうなる可能性は考えた。でも、実際どうしたものかな)

そこには、アウレオルスⅡイザードが立っていた。

「当然。この場にいる事は分かっている。姿を見せたらどうだ、侵入者」

アウレオルスのその問いかけに返答はなかった。

結弦が今回の依頼上、件の魔術師本人であるアウレオルスとの接触を極力避けている以上は当然である。

しかし、アウレオルスはどこか確信を持って続ける。

「姿を見せぬか・・・もしやとは思いますが姿を見せなければ、私が見逃すと考えているのか？もしそうなら愚かと言う他ないぞ」

アウレオルスはどこか余裕の笑みを浮かべながら語り続ける。

「若しくは他の侵入者の二人に期待しているのか？どちらにしても無意味以外の何物でもない。手土産に良いことを教えてやろう。他の二人なら既に退場してもらっている。私が今即座に排除しないのは、始めの内に感知出来ていなかった事に対しての興味に過ぎん。彼女も無事保護した以上はあまり余計な時間はかけたくない」

そう言い、アウレオルスは自身の懐から細い鍼を出す。

（何アレ？鍼……だよな？いやそれより二人が退場済みと来たか、それに彼女の保護……か。本当の事言っているかも分からない以上は一旦引いて情報収集かな）

そう考え行動に移す瞬間に異変起きた。

「!？」

強烈な光が外から放たれていた。

「これは……」

（いったい……）

外の空には赤い雷のようなものが蠢いていた。

「十三騎士団の生き残りか……当然、私を排除しようとしているのか……」

（十三騎士団……ロビーにいた人の仲間か……これはまずそうだけど……）

ふと結弦はアウレオルスを見たが焦っているようにはまるで見えない。

「しかし、アルスリマゲナ黄金鍊成を要する私に挑もう等と滑稽でしかないぞ」

次の瞬間、落雷のような何かが進学塾に落ちた。

それを気に建物の崩壊が始まる。

（これは不味いじゃないかな）

結弦が離脱を試みようとして構えながらも再度アウレオルスを確認すると、先程懐から出した鍼を自身の首へ刺していた。

（自身に刺した!? 一体何を……?）

結弦がアウレオルスの行動に戸惑っていると……

「魔術が無効にした上で、この建物の時よ、巻き戻れ!!」

アウレオルスがそう発言した次の瞬間に、崩壊を始めていた建物が

元に戻っていった。

(建物が元に戻っていている・・・いや、これは・・・)

結弦は事象の分析を行おうとした所である事に気付く。

(イザードさんが言った通りの事が起こってる?)

先程アウレオルスは「魔術が無効にした上で、この建物の時よ、巻き戻れ!!」と言った。

そして、今それが現実になっている。

(・・・とにかく、一旦ここから離れるのが先決だな)

現状起きている事に色々と思う所はあったが、アウレオルスが別の事に気が取られている間にこの場から離れる。

アレイスターからの依頼上アウレオルス本人との直接の接触を避ける必要がある以上はこういう隙を活かさない手はない。

そう考えレーザー推進を利用し、早々に場を離れながらもこの後の方針を固めていく。

(上条当麻かみじょうまとマグヌスさんは既に退場しているって言ってたけど、わざわざ退場って言った事は生きてる可能性も高いとみて良いかな？ひとまずは確認だな。それに今後の隠密行動はどうするかな・・・あゝ一難去ってまた一難。それに何より・・・)

結弦はステイルが以前に言っていたある言葉が頭の中で思い出されていった。

(世界の全てをシュミレート・・・それを現実に行っていた？でも、それだと・・・)

アウレオルスは崩壊が止まり元に戻った建物を確認でもするかのよう
ように辺りを見渡していた。

「・・・先程のどさくさに紛れて逃げたか。まだ建物内にはいるようではあるが、どうも敵対意識が薄いように感じる。当然、目的を優先する
としよう。もしまた向かってきたら、アルスニマゲナ黄金鍊成の餌とするだけの事」

そう言うアウレオルスは不敵な笑みを浮かべていた。

「とりあえずは逃げられた・・・かな？」

結弦は先程いた場所から一通り離れてから周りを確認の後に一息ついた。

(しかし、今後どうしたものか・・・)

先程のアウレオルスⅡダミーとの戦闘で結弦はコインの裏側の住人となった。

結弦には魔力を生成するのはもちろん「イマジンプレイカー幻想殺し」なんて力も持っていない。

だから裏側に来ただけでは感知されない可能性もあると考えてもいたのだが・・・そう何から何まで都合よくはいかなかないようだった。

(こうなると存在がばれているのはどうしようもないと割り切って巻き込まれないように立ち回るしかないかな。このくらいは直接戦うわけでもないし、許容範囲だよな)

アレイスターからの依頼内容との照らし合わせながらも不安を感じながらもふと窓から外に目を向けると、かみじょうとうま上条当麻とステイルが向かって来るのが見えた。

(今また入ってくるって事は本当に退場してたんだな。でも、今改めて向かって来てるって事は完全に脱落したって訳ではないよね。ならここからは本来の役割に徹しますか)

そう考え結弦は改めてもう一度入口の方へ向かった。

途中で妨害される可能性も考えていたが、問題なく進むことが出来た。

(放っておいても問題ないと見られたか、それとも向かって来ない敵には興味がないか・・・どっちにしろ自分には好都合だな)

捉え方によってはアウレオルスから随分甘く見られているとも言えるが、結弦にはそこあまり執着がない。

何より現状ではその評価は順当な物だと考えているため、腹の立てようもないのである。

その上で、本来は目立たないようにする事が基本である以上、この

状況は好都合でしかないのである。

そうこうしていると視線の先に人影を捉えた。

上条当麻かみじょうとうまとステイルだ。

「ホントだな、本当に野郎の居所を掴んだんだな？」

「この僕が無駄にビルの中を散策していたとでも思っているのかい？」

二人はともアウレオルスアウレオルスを居所を掴んだらしきやり取りをしていた。

結弦はどうかやら合流出来ずに終わり、重要な時にいなかったという事はなくなつた事に安堵しつつも二人に付いて回る。

「それにしても言葉一つで何でも思い通りにしちまうとは……あんな奴からどうやって姫神を、しかもインデックスまで……」

(インデックスさん?)

結弦は上条当麻かみじょうとうまの発言に一瞬疑問を抱いたが、少し考えて合点いく事があると同時に疑問が生まれていた。

上条当麻かみじょうとうまの発言から結弦が可能性として考えていた通り『世界の全てをシミュレートする』を実現したらしい。

そして、アウレオルスアウレオルスが言っていた保護した彼女というのはひめがみあいさ姫神秋沙ひめがみあいさとも考えたが彼女は目的に必要と言っていた。

ならば、保護した彼女というのはインデックスインデックスなのではないか疑問。

何より一番の疑問は本当に『世界の全てをシミュレートする』事に成功したのであれば、なぜひめがみあいさ姫神秋沙ひめがみあいさを必要としたのか。

アウレオルスアウレオルスの目的は定かではないが、そんなチート染みた力を得たのであれば、自身一人で解決出来るのではないか、そんな疑問が浮かんでいた。

「仮にあの子が迷い込んだとしてもいきなり危害を加えられることはない。なんとたつてあいつは……」

「どうした？」

ステイルの言葉が止まり、聞き返した上条当麻かみじょうとうまだったが、ステイルはまるで吐き捨てるように続けていた。

「なるほど、そう言う事か。三年も潜伏していれば世情にも疎くなる
と言うことだ」

「(?)」

上条当麻かみじょうとうまと結弦にはまだ何の事かなど分かるはずもなかった。

ステイルと上条当麻かみじょうとうまが建物内の一直線にとある部屋を目指して進んでいた。

そして、ドアが開いている部屋が見えてきた。

「ゴ丁寧にドアが開いているときたか、なめられたものだ」

そう言いながら入口に到着し、中の様子をみると、アウレオルスと姫神秋沙ひめがみあきさ。そして、インデックスが奥の机に横たわっていた。

「姫神！インデックス！」

上条当麻も横たわるインデックスを確認し、思わず駆け寄ろうとしたが、ステイルが静止させる。

「残念だは君に目的を達成する事は出来ないよ」

「ふん、今更ながら我が真意に気付いたか。ならば、その大成を前にお
のが無力を嘆き、嫉妬に身を焦がすが良い」

「上手くいくなら焦がし甲斐もあるんだがね。繰り返すが君に彼女を
救う事は出来ない、インデックスを救う事はね」

(インデックスさんを救う・・・なるほど、少し話が見えてきたかもだ
けど、なんでわざわざアウレオルスさんが?)

ステイルとアウレオルスのやり取りを結弦には思い当たる事は
あった。

確信を得るためにも成行きを見守る。

「貴様はしくじっただけの事。しかし、私は彼女を・・・その身体に一
〇万三〇〇〇冊を一身に背負っていながら、それでも自身より他人の
幸福のために生きる彼女を・・・」

アウレオルスの発言に少なからず戸惑かみじょうとうまう上条当麻であったが、ステ
イルが補足するように続けた。

「つまりは彼もインデックスのパートナーだったのさ。今年が君、去
年が僕。そして、三年前のパートナーがこのアウレオルスIIイザード

と言うわけだ」

「これなで禁書目録は膨大過ぎる脳の情報量のため、一年ごとに全ての記憶をけさねばならなかった。これは必定であり、人の身に抗えん宿命だ。逆に言えば人ならぬ身使えば良いだけの事」

「その結果が吸血鬼か。念のため聞くけど、人の身で不可能な方法を提示されたらどうするつもりだい？」

「当然、禁書目録を人の身から外すまで」

「彼女を吸血鬼にするわけだ」

（・・・なるほど。大方の疑問は解けたけど、出来るかどうかは一先ず無視したとしても、それは今のパートナーさんは看過できないじゃないかな）

結弦がそう思い視線を上条当麻かみじょうとうまに向けると案の定怒りの形相でいた。

それを見て思わず苦笑いをするしかない結弦であった。

「必然。それでも禁書目録が救われる事には変わりはない。貴様ならその気持ちが出来ないわけではないだろう」

「・・・はあく、どうあつても自分の考えは曲げないか。それなら、ほら言ってみようよ今代のパートナー。致命的な欠陥を抱えた目の前の錬金術師に・・・」

その言葉を受け上条当麻かみじょうとうまはまっすぐにアウレオルスIIイザードを見据えて告げた。

「お前・・・一体いつの話をしてんだよ？」

「な、に・・・」

アウレオルスは言葉を受け入れられないような様子でなんとか言葉を絞り出していた。

そこに追い打ちをかけるかのようにスタイルが続ける。

「つまりはそう言う事さ。インデックスはとづくに救われていたんだよ。君ではなく、そこにいる上条当麻かみじょうとうまによってね」

「そんな・・・馬鹿な。人の身で魔術師でも錬金術師ない者に一体何が出来ると言うのだ!？」

「イギリス清教の沽券に係わるので、詳しくは言えないが、そうだ

ね……この男の右手には【イマジンプレイカー幻想殺し】と言つて人の身に余る能力を有しているんだよ」

「待て、ならば……」

「そう。君の努力は全くの無駄骨だったつて訳だ。だが気にするな。インデックスは君が望んだ通り今のパートナーとしてとても幸せそうだよ」

「!?」

アウレオルスは誰の目から見ても明らか程のショックを受けていた。

(これは……)

結弦はその光景を見ていて、少しまずいのではないかと思つてた。アウレオルスが純粹にインデックスを救いたいだけであれば、それほど問題ではないだろう。

しかし、これまでのやり取りや反応を見る限りそうではなく、自身で救いたい、自身に振り向いて欲しいという感情を抱いているように見えたからだ。

(もし、この予想があつているなら……)

結弦がそんな事を考えていた時……

「とうま……」

机に横たわつていたインデックスが寝言のようにおぼろげに呟いた。

「インデックス!」

その声にかみじょうとうま上条当麻が呼応していたが、次の瞬間、ぐくと気の抜けた音が鳴り響き……

「おなかすいた……」

と呟いた。

その瞬間に空気が緩み、ステイルに至つては笑い出していた。しかし……

(これは……煽りにしかならないと思うんだけど……)

結弦がそう心配していると……

「フフ……フハハハハハハハハハハハハ……」

アウレオルスは笑い出した思えば、懐から鍼を出し、自身の首へ刺していた。

「(あれは・・・確か前にも・・・)」

そして、次の瞬間・・・

「倒れ伏せ！侵入者共!!」

その言葉と同時に三人が地面に倒れた状態で叩きつけられてしまった。

(っ！イザードさんにはばれているみたいだし、姿は隠していても、やっぱり効果の対象か・・・状況が状況だし二人にはばれてないよね？しかし、こうなってしまうとどうしたものか・・・)

結弦もアウレオルスの攻撃対象ではあるようだが、結弦個人にはそれほど興味があるわけではだろう。

それなら、一先ずこのまま状況を見守るのも手だろうと結論を出し、可能な限り静観を試みる。

その間にもアウレオルスは怒り狂っているようであった。

「フハハ・・・貴様達は楽には殺さんぞ。私のこの怒りは貴様らで発散せねば収まらないのだ！」

結弦が先程戦ったアウレオルスⅡダミーと同等、いやそれ以上に鬼気迫る勢いであったが・・・

「待って！」

ひめがみあいさ
姫神秋沙が前に立ちふさがった。

「邪魔だ！女」

「私、貴方の気持ち分かる。でも、今の貴方は違う。だから・・・」

ひめがみあいさ
姫神秋沙は説得を試みようとしているのだろう。

しかし、今のアウレオルスには無意味であった。

アウレオルスは又懐から鍼を出し、自身の首へ刺す。

それとほぼ同時に甲高い音が鳴った。

そして、かみじょうとうま上条当麻が立ち上がった。

「死ね！」

その発言後、ひめがみあいさ姫神秋沙が倒れ始める。

「姫神~~~~！」

その姫神秋沙ひめがみあいきに上条当麻かみじょうとうまが駆け寄る。

(さっきの音は【幻想殺しイマジンプレイカー】の音か・・・おそらく、倒れている状態の身体のどこかに右手で触れたのか・・・)

そうして、駆け寄った上条当麻かみじょうとうまが姫神秋沙ひめがみあいきを抱き留めた。

そして、その身体からは確かに鼓動が鳴っていた。

「馬鹿な・・・先程の瞬間には我が黄金鍊成アルスIIマグナにより姫神秋沙ひめがみあいきの死は確定していたはず。その右手聖域の秘術でも内包するか!？」

「・・・」

アウレオルスは【幻想殺しイマジンプレイカー】に驚愕しているようであったが、

上条当麻かみじょうとうまにはそんな事はどうでも良かった。

「ごちゃごちゃうるせー、そんな事はもうどうだって良いんだよ」

本当にその通りなのだろう。

上条当麻かみじょうとうまはアウレオルスを許せないのだ。

だから・・・

「いいぜ。テメエが何でも思い通りに出来るってんならまずそのふぎけた幻想をぶち殺す」

向き合う上条当麻かみじょうとうまとアウレオルスはほぼ同時に動いた。

アウレオルスは今までと同じように鉞を出し、自身の首へ刺すのに対し、上条当麻かみじょうとうまはひたすら前に駆ける。

両者の距離は離れている。

上条当麻かみじょうとうまの武器である【幻想殺しイマジンプレイカー】が宿る右手がまず届く距離ではなかった。

それに対してアウレオルスの黄金鍊成アルスIIマグナは言葉一つで成立する武器である。

まず、自身の間合いに詰め寄らなければ話にならないのだ。

しかし・・・

「窒息せよ」

アウレオルスが言葉を口にする方が明らかに速かった。

上条当麻かみじょうとうまは宣言された通り呼吸が出来なくなり、倒れこんでしまう。
「かつ・・・あああ」

上条当麻はまともに呼吸も出来ない中、なんとか頭をと身体を動か
し、自身の右手で首にそして、指で喉を奥へと順番に触れ、ようやく
窒息から解放される。

少しでも呼吸を整えようとするが、アウレオルスは悠長に待つては
くれなかった。

「・・・感電死」

今度は目に見えて高圧電流が発生し、上条当麻へ襲いかかる。

幸い正面から迫る脅威だったことから、右手を正面に突き出し、打
ち消し・・・

「・・・圧殺」

続いては上から大型車が襲いかかる。

その大型車に右手を当てると大型車は消滅した。

(いける！アウレオルスの攻撃は右手で消せる！)

上条当麻がその事実かみじょうとうまに笑みをこぼしていたが、その事実をを目の前で
見ても、アウレオルスに焦った様子アルス=マグナはなかった。

「なるほど。真説その右手、私の黄金鍊成も例の外に漏れず打ち消す
らしい。ならばこそ、右手で触れられぬ攻撃なら打ち消す事は不可能
なのだな？」

「!？」

アウレオルスは不敵な笑みを浮かべていた。

「銃をこの手に。弾丸は魔弾。用途は射出。数は一つで十二分。人間
の動体視力を超える速度にて、射出を開始せよ」

言葉を聞き、マズいやバいと言った危険を感じる時間すらなかつ
た。

銃の弾は上条当麻の顔の横を通って行った。

「ふん。先の手順を量産。一〇の暗記銃にて同時射出」

「がつ！あああつ」

上条当麻は直撃し、吹き飛ばされてしまう。

幸い、一発でも食らったら終わるといふ威力ではないらしい。

「簡単には殺さん。存分に苦しんでもらうぞ。準備は万端。当の暗記
銃同時射出を・・・」

「ふん、何だそれは？」

アウレオルスが更なる追撃を試みようとした時、ステイルが口を挟んだ。

「まるで本当に言葉一つで現実を歪めているようじゃないか」

「当然。黄金鍊成は鍊金術の到達点。今や……」

「だったら！何故【吸血殺し】を必要とした！」

「!？」

（そう、そこだけが解けない謎……）

「何故？吸血鬼を呼び寄せる必要がある？いや……そんな事はしなくとも……」

「宙を舞え、ロンドンの神父！」

ステイルの発言は何か逆鱗に触れたのだろう。

アウレオルスは怒りの形相でいた。

しかし、ステイルは自由を奪われても言葉を止めない。

「全てを言葉のままに出来るならば……」

「弾けよ、ルーンの魔術師！」

次の瞬間ステイルは体表が剥がれ、身体の内部がそのまま見えていくような無残な姿に変わる。

「うっ！」

上条当麻は吐き気を催し思わず口元抑える。

しかし、今は戦闘中という事を思い出し、何とか耐え、先程の事について考える。

（そうだ、こいつの目的はインデックスを救う事。ならば、それを口にすれば全て解決する。口に出来なかつた……口には出来るはずだ。なら本来他に条件がある？）

（口にする事はそう思わせるブラフ……思わせる？そういえば、なぜイザードさんは黄金鍊成アルス・マグナを使う際に首に鍼を指す？もし、あれが必要な事なのであれば……もしかして黄金鍊成アルス・マグナの本質は……）

「興が削がれたな、銃身と刀身に変更」

アウレオルスは再び銃を構える。

「さて、貴様の自信の源はその得体の知れぬ右手だったな。ならば、ま

ずはその右手を切り落とすでしょう。暗記銃、その刀身を回転射出せよ！」

気づいた時には上条当麻かみじょうとうまの右手は切り落とされ大量の血が噴き出されていた。

「フフ・・・アハハハハハハ!!」

アウレオルスは右手を失った事に優越感でも覚えたのだろう。

満足げに笑い出していたが、次の瞬間アウレオルスにとって予想外の出来事が起きた。

「フフ・・・アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

アウレオルス以上に上条当麻かみじょうとうまが笑っているのだ。

【幻想殺し】を宿している右手を切り落とされたにも関わらずだ。

「な、なんだ?」

アウレオルスは思わず後ずさりしてしまっていた。

しかし、上条当麻かみじょうとうまは不気味なほど笑い声を発しながら歩を進めていく。

「なんなんだ、貴様は?」

アウレオルスの言葉を無視し、一步また一步と・・・

「あ、暗記銃。先の手順を複製。獲物の首を切断するためにその刀身を射出せよ」

アウレオルスは確かに上条当麻かみじょうとうまの息の根を仕留める発言を確かにした。

そのはずなのだが、射出した刀身は上条当麻かみじょうとうまの首を切断する事はなかった。

(外れたか・・・随分速い気もするけど、やっぱり予想した通りではあるのかな。上条当麻かみじょうとうまも気付いたかな。でもだからって随分無茶な事をする事ので。しかし、いよいよ自分の存在忘れられてそうだな)

結弦がそんな事を考えている間も当事者二人の戦闘は続いていく。

「っ！手順を量産。当の刀身を一齐射出!」

アウレオルスが言った事はまたしても現実にはならず・・・

「断頭の刃を無数に配置。速やかにその体を解体せよ!」

別の手段を用いても結果は同じであった。

「馬鹿な・・・何かしているのか・・・？」

明らかにアウレオルスには動揺見て取れた。

(一度崩れるとあつけない物だな)

そこで上条当麻かみじょうとうまが語り掛ける。

まるで追い打ちをかけるかのように・・・

「おい！錬金術師。テメエまさかこの程度で俺の【イマジネブレイカー幻想殺し】潰せるとか思ってたんじゃないだろうな」

「ひいー！」

アウレオルスから明らかな恐怖が見て取れた。

それでもどうにかしようとは考えたのだろう。

鍼を取り出そうしていたが、慌てていたため、地面にばら撒いてしまふ。

「鍼シイツがなければハイにはなれず、雑念も消せねえな」

「あ、ああ・・・」

「どうした？言葉にしてみろよ。言葉の通りに現実を歪めてみるよ」

「来るな・・・来るな・・・」

その時、アウレオルスは彼にとって致命的な事を考えてしまった。

(ありえん。我が黄金錬成アルス・マグナがその効力を失うなど・・・待て！考えるなそんな事を考えては・・・)

アウレオルス自信がその事に気付いた時にはもう既に遅かった。

アウレオルスの目には、先程弾けたステイルの血肉ががまるで集まっているように見えた。

(まさか・・・あの状態から蘇るのか・・・？)

その考えが頭を過った、過つてしまった。

そして、ふと気づくとステイルがインデックスを抱えて立っており、また結弦も自由に動けるようになっていた。

(黄金錬成アルス・マグナ・・・やっぱりその本質は・・・)

「出来っこねえよな・・・」

「!!」

「何故ならテメエの力は言葉の通りに現実を歪めるのではなく、考えた事をそのまま現実にしちまう力なんだからな!!」

つまりはそう言うだ。

アウレオルスが自身に鍼を首に刺していたのは、黄金鍊成アルスIIマグナを確実に扱うためだったのだ。

鍼を首に刺すと聞けば、少し危ない響きだが、きちん行えば医学的にも用いられる事もある技術である。

神経を刺激し興奮状態にとまって不安を取り除く。

アウレオルスは自身に雑念が生じないように発言前に件の行動を行っていたのだ。

(最後は案外あつけなかつたな)

結弦が目線に向けている先では、上条当麻かみじょうとうまの切り落とされた右腕からまるでドラゴンの頭のような物が現れ、アウレオルスに襲いかかるかという状況であつた。

(あれは・・・)

アウレオルス当人はそこで気を失い、今回の事件は解決したようであつた。

差異

「良くくつついたもんだね。君の身体って実は以外とファンタジーだったりする？」

カエル顔の医者が心の底からの感想を述べていた。

「つて言うか、くつつけたのは先生でしょ？」

上条当麻はくつつけた本人である担当医がそんな事を言うものだから、思わず呆れ気味に突っ込んでしまう。

アウレオールの黄金鍊成アルス・マグナによって綺麗さっぱり切断されてしまった。

幸いと言うべきかあまりに綺麗に切断されたため、細胞等は傷ついていなかったらしい。

故に現在固定のためにキプスこそ付けているが、問題なくくつついたらしい。

それを成し遂げる辺りは流石ヘブンキーンセラ【冥土返し】とまで言われる医者と言うべきだろう。

「しかし・・・」

その医者が今度は少し呆れ気味の調子で・・・

「一〇日の内に二度も入院して来るなんて、看護師さんの間でも流石に噂になっているみたいだね・・・もしかして君ナース属性の人？」
「何ですかそれ？そんなものためにわざわざ腕を切る訳ないでしょ」

「なんだ、同好の士じゃないのか」

そんな事を言い残し、医者は病室を出て行った。

「・・・まさかナース目当てで医者になったとかじゃないよな」
上条当麻がそんな事を言っていると医者と入れ替わりでステイルが入ってきた。

「うーん、見かけよらず名医なんだな。あの医者」

「らしいな・・・って普通に入ってきたな、お前は」

そんな上条当麻の反応を見てステイルは思わずため息をついた。

「日和るつもりも馴れ合うつもりもないが、事の顛末くらいは伝えて

おこうというついでに形だけでもお見舞い来てあげた人間に対しての反応ではないな」

そう言うステイルの手には見舞いの果物が握られていた。

（何とも言えない光景だな）

結弦は依然と同じように隠れて上条当麻かみじょうとうまの病室にいたのだが、それが感想であった。

上条当麻はギブスを付けた状態で病院のベッドにおり、その隣でステイルがりんごの皮を向いている。

別にそれ自体は至って普通の光景だが、二人の関係上から見れば、何とも言えない所だろう。

「……」
上条当麻はどこか浮かない顔をしていた。

「どうした？……あの竜の事か？」

竜とはアウレオルスが気を失う際に上条当麻かみじょうとうまの右腕から現れたドラゴンの事だ。

「あれが、アウレオルスが最後に感じた絶望の形だったんだろうね」

アウレオルスの黄金鍊成アルスIIマグナは考えた事を現実にしてしまう力だ。

あの最後に出現したドラゴンはその黄金鍊成アルスIIマグナによって作られた物なのだろう。

「……アウレオルスはどうなったんだ？」

「……アウレオルスはドラゴンあれを物理的な物ではなく、精神的な物だと思ったようだ。記憶を失っていたよ。魔術も使えなくなっていたよ。あの状態の人物に止めを刺すのも寝覚めが悪いから顔形を変えて野に放ってやったさ。十三騎士団の目を盗むのには少々骨が折れたが、まあ、大丈夫だろう」

「……そうか……」

「三沢塾も閉鎖される事になったそうだ」

「……」

ステイルから事の顛末を聞いた上条当麻かみじょうとうまは何を思ったのか少しの間空白の時間が流れた。

そんな中、口を開いたのはステイルだった。

「一応今回の件は礼を言うつもりではあったが、よくよく考えるとなんか馬鹿らしいんだよね。君がやった事って結局はアウレオルスを自滅させただけなんだから」

「ふん。この上条当麻かみじょうとうまの素敵演技力に感謝する事だ。何たって右腕一本切り落とされた状態でその激痛に耐えながらアウレオルスあうれおるすを震い上がらせるに足るだけのハツタリをかましたんだからな」

「激痛で感覚が麻痺してただけだろう。アウレオルスが鍼はりを使つて自身をハイにしていたのと同じようなものさ。そもそもあれが君だけの力だと思っっているなら大間違いだよ」

「・・・どういう意味だよ？」

「いくら君が演技したからってそんなすぐに効果が出ると思っているのかい？」

「は？」

上条当麻は最初言っている意味が分からなかった。

「理解が追いついてないようだから分かりやすく結論を伝えようか。僕が魔術を用いてアウレオルスの目測をずらしたんだよ」

それを聞き結弦は納得がいった。

ステイルの言う通り、上条当麻の演技で自滅に追い込んだにしろ、アルスIIマグナ黄金錬成の効力に歪みが生じるのが速すぎると思っっていた。

その答えがこれだった訳だ。

「えっ!? って事はお前が何もしなければ・・・」

「今頃君は死んでいただろうね」

そう言いながら、皮がむけ終わり、一口サイズに切り終わったリングをステイルは上条当麻かみじょうとうまに向け差し出した。

それを見て、上条当麻は驚いて顔をしていたが、それから少ししてから落ち付いたのか、リングに対し若干嫌そうな顔を一瞬みせたが、せっかく自信のために用意してくれたものだ考え直し手を伸ばしたが、嫌そうな顔を見て考え直したのか、始めからそのつもりだったのか、リングの皿を引つ込め自身の口に放つたため、上条当麻かみじょうとうまの手は空を切った

「・・・それでもあんな奴とは一緒にするな！女の子一人救うためにおかしな魔術を身に付けて、居るかどうかもわからない吸血鬼なんかに・・・」

上条当麻はリンゴの事も含め八つ当たり気味に不満をぶつけるかのようにステイルの発言に反論していたが、徐々に弱々しくなっていた。

「・・・三年前のパートナーか・・・」

(やっぱり複雑だろうな)

上条当麻がその意味を噛みしめるに眩いてから、又一時の静寂が訪れていたが・・・

「どうま〜〜」

病院の外から上条当麻を呼ぶ声が聞こえ、三人共が反応した

(この声はインデックスさんか・・・)

結弦がそう思った次の瞬間、病室の窓が開き、ステイルがいなくなっていた。

(やっぱり顔は合わせづらいのか)

結弦がそんな事を考えながら、ふと笑みを浮かべているとインデックスが病室へ入って来て上条当麻に詰め寄っていた。

「どうまー！」

「な、何？」

「今回はあいさのために戦ったんだって？」

「あ、あいさ〜？」

上条当麻は唐突のだった事もあり、話題についていけないようであったが、少し考えてから、思考が追いついて来たようであった。

「あ、ああ。あの電波系エセ魔法使いね。ってお前それ誰に聞いたんだよー！」

「決まってるんだよ」

上条当麻は何気なく言っただけであつたが・・・

「電波・・・じゃない」

「姫神!？」

先程の上条当麻の電波発言を気にしてしまっていた。

「あゝいやゝ何でお前がインデックスとここに？」

上条当麻が言葉に詰まって、逃げるように今の状態について訪ねたらインデックスから回答が飛んできた。

「一緒にお見舞いに来たかった訳じゃないんだよ。ただあいさがどうしてもお礼がしたいって言うから」

「どうして・・・」

姫神秋沙は本当にわからないと言わんばかりに続ける。

「どうして、たった一度ファーストフード店で知り合っただけの私のために・・・」

「助けるのに理由なんていらねえだろ」

即答だった。

まるで人として当たり前の事をした。

そこに疑問の余地もないかのよう・・・

(理由は要らないか・・・それは同感だけど、即答とは・・・)

結弦は素直に関心していた。

結弦も基本的なそう言った部分での価値観自体は似ている。

しかし、結弦の場合少なからず計算が入るが、上条当麻にはそれがないのだ。

行う行動は同じであってもその本質が大きく異なる。

だからこそ、羨ましくもあつた。

自分もそんな風に出来たらどんなに良いことかと・・・

「そうだ、とうまー！」

「うん？」

「二人で話し合った結果あいさは教会で預かる事になったんだよ」

「教会？・・・おい、ちよつと待て。それって『歩く教会』の教会ってオチじゃないだろうな？」

上条当麻がその疑問に不安を感じていると、インデックスの胸元から以前の猫が飛び出て上条当麻に飛びかかっていた。

「あつーちよつとスフィinks」

「痛っ！つうか病院に猫連れ込むな！」

そんな光景を見て静かに微笑む結弦と姫神秋沙がいた。

「やっぱりいないか」

結弦は上条当麻達かみじょうとまが落ち付てたを見届けた後に、病院の外にいた。先程インデックスから逃げるように病室を出て行ったステイルを追ってきたのだが、もう既にすぐ見つかる場所にはいなかった。

以前と同じように探す事も可能であるが……

「一先ずはクロウリーさんの所かな」

今回結弦は上条当麻かみじょうとまは勿論、ステイルにも存在を明かしてはいない。

故に会ったところで大した話は出来ない。

あくまで様子を見に來ただけだった、あわよくば確かめたい事はあつたが、難しいだろうとは考えていた。

「……」

結弦はふと周りを見渡した後、踵を返した。

「どう感じた？」

窓のないビルに到着し、今回の件をアレイスターに報告を終えた後のアレイスターの第一声がそれだった。

「それは何に対しての質問ですか？」

「そちらが感じた感想を聞いているだけだ。捉え方は任せよう」

「……実力不足は感じましたね。今回はどうにかりましたが、運が良かったのもありましたしね」

結弦は今回アウレオルスⅡダミーと戦った。

結果的には無事どうにかしたが、相手が冷静さを欠いていたことや戦闘場所など、結弦にとって有利と言える条件が重なった事が大きい。

例えば相手が冷静であれば、結弦の戦略に対応されていたかもしれない。

例えばコインの表裏もない場所で戦っていれば、壁や地面を純金に変換され逃げ場を失っていたかもしれない。

いや、そもそも戦う相手がアウレオルス本人や以前出会った神裂

だったらその時点で終わっていた可能も十分にあったのだ。

「・・・クロウリーさん」

「どうした？」

「上条当麻かみじょうとうま・・・いや、【幻想殺しイマジンプレイカー】の成長を促すために試練を与えて

いるのは予想が付きませんが、自分も一緒に試練を与えられてます？」

「試練とはどうも誤解がありそうではあるが、『観測者』の話を出した際に成長の促進も伝えたはずだが？」

「・・・そうでしたね」

結弦が聞きたい本質は違ったが、これ以上は時間の無駄だと考え話を切り替えた。

「しかし、黄金錬成アルスリーマゲナか。安定はしないかと思いますが、随分脅威になる魔術

があるものですね」

「そうだな。科学サイドわれわれも悠長にしていられないな」

「・・・」

結弦は何かを考えているようであった。

「どうかしたのか？」

「いえ、何でもありませんよ」

結弦はアレイスターに聞かれ、頭を切り替えた。

「そういえば今回の追加報酬でお願いしたい物があるんですが・・・」

アレイスターには現時点で敵わない上、こちらの考えがばれているのかも知れない。

しかし、だからどうしたと思う。

それならば、それを考慮した上で動くだけである。

アレイスターは様々な事を駒として利用するつもりのようなのだ。

確かに手の上で踊らされるだけのつもりはない、しかしだからといってアレイスターを悪いように利用するつもりはないのだから・・・

妹達編（とある魔術の禁書目録・とある科学の超電磁

砲）

噂

八月十日

三沢塾の一件が解決し、かみじょうとうま上条当麻が入院。

そして、報告を終えたその次の日、息抜きに結弦は街中を散歩していた。

結弦は『観測者』という立場であるが、それ以前にここ学園都市に住む学生の一人である。

自身の目的のためにも常に何かしら動いておくのも手ではあるが、人間なのだから休息もいるものだ。

しかも、つい先日一歩間違えば命を落としていた死線をくぐつたのだ。

リフレッシュも必要とするというものだろう。

「ふ〜〜。たまに息抜きしないと身体がもたないからね」

結弦は思わず背中を伸ばしながら、辺りを見渡す。

「流石は夏休み。昼間なのに学生が多いな」

現在夏休み中と言う事もあり、普段であればそれぞれの学校に居る時間にも関わらず、街中には学生と思われる人々が多くそこら中を行きかっていた。

「・・・よし。自分も今日は自由に過ごしますか」

そう言い、結弦は止まっていた足で再び歩を進め始めた。

「ありがとうございました〜」

結弦はファミレスから出て来ていた。

結弦はふと改めて腕時計を見ると午後二時を過ぎていた。

「少し長居しすぎたかな。まあ、リフレッシュにはなったし、後は買い物して帰るかな」

帰るには少し早い時間ではあるが、外をぶらつき気分転換には十分

なったので、後は家でのんびり過ごそうと考え、足をスーパーに向けたのだが、ふと人が目に入り足を止めた。

目線を先には路地裏から出てきた人がいた。

別にその人自体は知り合いだった訳ではない。

ただ違和感を感じたのである。

(・・・また、路地裏から人が・・・)

多すぎるのだ。

別に路地裏から人が出てくる事自体には何とも思わない。

そういった道を通って近道するなど事は割とよくある話であるし、いちいちそれを怪しいとは思わない。

しかし、今日外を歩いていてもう一〇人以上の人を見かけている。

しかも、同じ場所から二〜三人出てくる所まであった。

ただ抜け道に使っているだけにしては少し違和感があるのである。

(考えすぎ？何かあるとか？・・・そう言えば・・・)

結弦は立场上、学園都市の情報は自主的にも集め、目を通すようにしていた。

何があるか分からない以上、それは噂話等も一通り確認するようにしている。

火の無い所に煙は立たないとも言われる以上噂話も馬鹿にならないからだ。

そんな結弦がふと一つ以前見た噂話を思い出した所で声をかけられた。

「お、空目じゃねえか」

「ん？」

自分の名前が呼ばれ、振り向くとそこには体育会系の男が爽やかな笑顔を浮かべ結弦に手を挙げていた。

「誰かと思えば古鉄か」

『古鉄剛』

結弦と同じく星間高等学校通う高校一年生で、学友の中では特に仲良くしている一人である。

性格は体育会系っぽい見かけ通りで考えるより、身体が動くタイプ

であり、芯はしつかりしており、総じて良い奴と言われる部類の人間である。

その性格も影響してか風紀委員ジャッジメントにも所属しているが、風紀委員になった理由だけは少し不純と言える一面があった。

何故なら、その理由というのが、恋である。

中学時代にふとしたことからある風紀委員の女の子に助けて貰い、その女の子に一目惚れをした事から風紀委員になったという経歴を持っていた。

とは言つても、誰でもつて感じではなく、件の女の子を一途に想っていることや風紀委員の仕事は真面目にこなしている事からも根の真面目さが伺える。

因みにその件の女の子は古鉄所属の支部の支部長だったりする。

「こんな所で何やってんだよ?」

「息抜きがてらの散歩。と言つても後は買い物して家でのんびりするつもりだったけど。そう言うそっちは・・・風紀委員の仕事?」

結弦がそう聞いたのは、古鉄が左腕に風紀委員の腕章を付けていたからだ。

いくら風紀委員に所属しているからと言って、常に腕章付けてる訳ではない。

そもそも腕章はその権限や立場を使う時しか基本付けないからだ。それを付けている以上は仕事中的ではないかと考えた訳である。

「まあな」

「パトロール?それとも何かあった?」

肯定の返事が素直に帰ってきたため、興味本位で詳しく聞いてみた結弦であったが、古鉄も特に隠す事でも無いのか現状について説明を始めた。

「両方だな。何かあったからパトロールしてる感じだな。お前噂話とか詳しいか?」

「特別疎くは無いは思う」

「最近街の様々な所にマネーカードが拾われているのは知ってるか?」

「少し前にネットでチラッと見た覚えはあるかな、なんか路地裏とかそういう所によく落ちてるとか落ちてないとか」

実は先程結弦がふと思い浮かんだのもその噂だった。

結弦がその噂を最初に見たのは一昨日アレイスターに呼び出される少し前の事だが、どうも路地裏などのあまり人目に付かない所に入った金額はどうもまちまちのようだが、マネーカード拾ったという発言がいくつか書かれた掲示板を目にしたのだ。

「それがどうかした？増えてるとか？」

「まさにその通りだな。ここ数日で報告件数が増え続けてるな。ネコババしてるやつもいるだろうから、下手すると報告の数倍はあるかもな」

「そこまで来ると人為的な可能性も高そうだけど・・・その人物を探してるとか？」

「まあ、目的を知りたいという意味ではそれもあるが、第一目的は違うな。マネーカード目的で暴力にまで発展してるんだ」

「あくなるほど」

古鉄の説明を聞く限り、マネーカードが落ちている事はすでに結構広まっているのだろう。

そんな事が分かれば小遣い稼ぎでマネーカードを探す輩も出てくるだろう。

それだけなら大した問題ではないだろうが、次は他人が拾った物を力ずくで奪う輩まで出てきているだろう。

しかも、基本的にマネーカードは人目につきにくい場所で発見されている事を考えるとそういう事をするにはうってつけと言えるだろう。

「それはご苦労様」

「仕事だからな。まあ、お前も巻き込まれないように気をつけろよ」

「そのために教えてくれたのか。了解、ありがとう」

「そういう事だ。んじやまたな。」

別れの挨拶を済ませ古鉄は仕事へと帰っていった。

「・・・マネーカードね」

結弦は先程古鉄から聞いた話を思い返ししながら、携帯で掲示板を見返していた。

(確かに随分話題になってるな・・・聞いた通り人目につかない所での発見が多いというか確認できる範囲ではその手の場所での報告しか見当たらないな)

その後も一通り目を通したが、特に目新しい情報はなかったため携帯をしまい、考えを纏める。

(ここまで多いとまず人為的な物なのはおそらく間違いないけど、目的は何だ？お金持ちが遊び感覚で落としてるってのもなくはなさそうだけど、可能性は低い気がするな)

結弦は少し思考を巡らせるが・・・

(駄目だ。可能性を考えるにしても情報が少なすぎるな。・・・少し気になるし調べるか)

別に今回はアレイスターからの依頼は受けていない。

しかし、立場上情報はいくら持っていて困るものではない。

何より幻想御手レベルアップという前例もある。

あの事件も全容は後で調べて知ったのだから・・・

「さて、まずは実物の入手からだろうかから宝探しと行きますか」

そうして、近場の路地裏へと足を進めた。

「ふく気づけばもう日が暮れてる・・・」

その後、結弦は近場の路地裏等の人目につきにくい場所を周り、マネーカードを探した。

そうこうしている間に日が暮れていたとなっていたが、その結果、手には二枚のマネーカードが握られていた。

「しかし、案外簡単に見つかったな。すでに発見報告も多いしそう見つからないかとも考えてたんだけどな」

結弦は改めて自分の手にあるマネーカードに目をやる。

(見た目的には至って普通のマネーカードだな。あくまで今は外見しか判断材料がないけど、少なくとも外見では何か仕掛けがあるように見えないか・・・。入ってる金額はまちまちって話だったよな)

ふとマネーカードに能力を使って光を照らしてみたりもしたが、特に変化も無かった。

(まあ、これ以上は帰ってからかな。と言っても自宅で作れる事も大した事もないけど、次の報酬辺りで情報の権限を貰おうかと思っただけで、やつぱりそっち関連の技術を手に入れるなりもぼちぼちないといけないな。まだまだ操り人形を脱するには遠いな)

結弦は改めて自身の現在の立ち位置を思い出しながら、マネーカードをポケットにしまい、帰宅前に寄ろうと思っていると・・・
「ホントだつて」

そんな声が聞こえた。

聞いた時は武装無能力集団が雑談でもしているのだと考え大して気にしていなかったが、続く言葉は無視出来ない物であった。

「ジョンベンしようと路地に入ったら、女が例の封筒を置いてんのが見えてさ。後を尾けたんだよ」

結弦が自宅に帰るのはまだ後になるようであった。

結弦は先程話していた武装無能力集団の集団に廃ビルに来ていた。

どうも封筒を落としている人物をこの廃ビルに入っていくのを見たとの事で結弦も隠れてついて来たのだ。

話していた通り封筒を落としていた張本人ならば目的を知る事が出来ると考えているのだが・・・

「・・・」

結弦は前の集団と異なる人物に目がいつていた。

(御坂さん・・・)

結弦が結弦が尾けているその少し先に美琴も武装無能力集団の集団を尾けているのだ。

結弦は能力で姿を消しているため、おそらく美琴にも存在がばれていないため、どうしたものかと考えていた。

(まあ、噂自体はもうかなり広まっているみたいだし、白井さんっていう情報源になりそうな人までいるんだから知っていても不思議はないけど、どうしたものかな。何かあつたら手を出すつもりだったけ

ど、おそろく御坂さんもそうするだろうし、一人で事足りるよな。知らない仲でもないし情報共有に話しかけても良いけど・・・まだもう少し様子このままでいるか)

そう結論付けた自分に対して少し呆れた自分もいたのだった。

結弦がそんな事を考えていると中のとある部屋に着いたようだった。

「ハイ、お邪魔しますよー。大人しくしてくれりや乱暴しねーからよオ」

中を覗いてみると白衣を着た少女がいた。

(見た感じ学生・・・白衣着てるって事は研究者だよな?)

「何か用かしら?」

「オマエがバラまいてる例のカード、オレ達がもらってやろうと思つてき」

「変な事しないようにこつちで調べるから大人しくしてて貰うぜ」

そう言い、一人が少女の鞆を取り上げ中を探り、一人が白衣を脱がせて制服を探していた。

「鞆の中は二枚しかねえぞ」

「制服にも入ってねえな」

「ちっ!せつかく来てこれだけじゃ割に合わねえぞ!他はどこにある?」

「ここにはないわ。equal、手持ちはそれだけよ」

「この状況やけに冷静だな・・・まさか能力者か!」

「ふん、この人数をどうにか出来る能力者なんてそうはいねえよ。それよりどこかに隠してるだけかもしれないねえ。探すぞ」

武装無能力集団は一人を少女の見張らせ、部屋内の家捜しを始めた。

すると、少女は見張りをしている男に何か耳打ちした次の瞬間・・・

「ぎゃあああああ!!」

男は悲鳴を上げ気絶してしまっていた。

「な!?!何が起こつた?」

「やっぱりそつち何かの能力者か?」

男達は戸惑っているようであつたが・・・

(能力・・・ね。流石は長点上機の学生さんだな)
ながてんじょうきがくえん
長点上機学園

学園都市の中でも5本の指に入る名門校であり、能力開発においてナンバーワンを誇る超エリート校。

しかし、能力以外でも突出した一芸があれば高位の能力者でなくともやっていけると言われており、学園都市のエリート校では珍しい側面を持つが、どんな形であれエリートに分類される学生が通っている学校である。

武装無能力集団に白衣を脱がされ、制服姿見えた段階で結弦は気づいていた。

「もう女だからって容赦しねえ」

「ぶっ潰す！」

仲間をやられ残った者はやる気になつていとうだが、結弦はおそらく手助けは必要ないだろうと考えていた。

先程も彼女は能力なんて使つていない。

気づけば辺りの照明が消された。

結弦は彼女がしたのだろうと考えながら、能力を用いて自身だけ見えるよう調節し成行きを見守っていると、予想通り少女は演出と話術だけで武装無能力集団を無力化してしまつていた。

(不良の撃退くらいならやり方次第でどうとでもなるって所かな)

結弦が感心していると、美琴は姿は表す事にしたのか拍手を送つていた。

「いや〜面白い者を見せて貰つたわ」

しかし、少女は美琴に特に驚い様子はなかったが、見定めるように凝視していた。

「・・・何？」

美琴も何事かと思ひ尋ねると、少女から確認なのか一人事なのか分からないトーンで言葉が帰ってきた。

「あなたオリジナルね」

「(オリジナル?)」

美琴も結弦も意味が分からなく問い返す。

「あなたも聞いた事くらいはあるでしょう? 『超電磁砲』^{レールガン}のDNAマップを使つてのクローンの製造されているって」

「!? あんたあの噂について何か知ってるの?」

美琴はそれを聞き、掴みかかろうかという勢いだったが、そんな美琴に少女は持つていた鞆の角で頭を叩いていた。

(うわ! 痛そう・・・)

「あなたは中学生、私は高校生。長幼の序は守りなさい」

「・・・あの噂の出所について何かご存知なのでしょいか?」

「あなたよりはね。私がいた頃とは目的も内容も随分変わつてようだけれど」

「?」

「知つても苦しむだけよ。あなたの力では何も出来ないのだから」

「つつ! 私は何を知つてるのを聞いてんのよ! それにその言い方アンタだつたら何かdおゴフう」

突つかかつていく美琴に今度は蹴りをヒットさせていた。

(あはは・・・)

「私だつて微々たるものよ。マネーカードを撒くのもそう。死角を潰してるの」

「?」

「もしかしたらそれでそこで行われる実験を阻止出来るかも知れない」

(実験?)

「でも、私自身が尾行されるとは迂闊だったわ。まあ、面倒な事になる前にてが打てたと考えましょう」

そう言いながら、少女は机の引き出しから何かの資料を取り出し、燃やし始めていた。

「(ここも勝手に間借りしてただけだし、さっさと退散しましょう)」

「え? え!? ちょっと待って・・・下さい。何の話をしているの?」

美琴は話を淡々話す少女についていけなかったのだろう。

少女の肩を掴み制止を試みるがそれが良くなかった。肩を掴まれた勢いで少女が持っていた燃えていた資料を落としたのだ。

「(あー)」

この場にいた全員の時が一瞬止まった。

先程の武装無能力集団でのやり取りでの家探し等で部屋に散らばっていた紙等に燃え移ってしまい、火が大きくなっていった。

「indeed、証拠を隠滅するなら全て消してしまおうと」

「ちがつー！」

(これはまずそうだな)

そう考えた結弦は部屋の入口から少し離れ、能力を解除した。

その上で再び入口の方へ近づいて行った。

たった今ここを通ったように装ったのである。

「知らない。why、あなたここにいるの？」

結弦は部屋から出て行こうする少女と鉢合わせた。

「いや、あなたを武装無能力集団が追いかけてるのを見かけたんです。同時に御坂さんも見かけたので、自身の用事を優先させたんですが、やっぱり気になってしまっただけです。戻ってきたんですが……って火事になってませんか!？」

「s o、私は行くから」

「えっ！ちよつと……」

そう言いながら少女は本当に行ってしまった。

(本当に行った……倒れてる人達は放置なのか?)

結弦がそんな風に啞然としていると、美琴から声がかかった。

「そのアンター！ちよつとこいつら運び出すの手伝って！」

美琴のその声を聞き意識を戻され、その後は美琴と二人で気絶した武装無能力集団を建物から運び出したのだった。

「なになに火事?」

「ボヤだって」

結弦と美琴で武装無能力集団を無事運び出す事には成功したため、

怪我人や死人といった部分での大事にはならなかったが、上がった火の手はかなり大事になっており、野次馬のかなり集まっていた。

武装無能力集団をビルの裏手に放置した上で、二人してどこか気まぐさがあり、無意識にこそそこそししながら、現場から離れていた。

「ふ〜ここまで来れば一先ずは大丈夫そうね」

「そうですね」

ある程度一目から離れたタイミングで一息つく。

「それにしても助かったわ。空目結弦うつめゆうづるだったわよね？」

「どういたしました。って言っても大した事はしていませんし、何よりある意味最初見て見ぬふりした身なので何とも言えないんですけどね」

「目の前出来事から逃げるよりはマシなんじゃない？」

「そう言えば、一緒にいた方は？」

「そうだ！あのギョロ目!!私まだ用事があるから、ホントありがとう」
「・・・」

そう言い、美琴は駆け足で行ってしまう。

結弦は美琴が背中を向けある程度距離が離れたタイミングで追走を開始した。

あの少女を探す事も可能だが、おそらく美琴に追いかけた方が情報が手に入ると考えたからだ。

しばらくすると美琴は電話ボックスに入り携帯端末を取り出し接続し始めた。

そして、美琴が目を瞑り少しすると、携帯端末に長点上機の生徒名簿が表示された。

(ホント便利な能力な事で・・・)

公衆電話もネットに繋がっている。

それを手持ちのPDA端末と繋げて情報を見ているのだ。

とは言え、公共の場にあるものにはいろいろな面を考えてセキュリティが設定されているため、見られる情報には限界がある。

生徒名簿なんでもっての外である。

しかし、美琴の能力を用いてそのセキュリティの壁を突破した上で

ハッキングしたのである。

結果生徒名簿を閲覧出来ている訳である。

先程の少女が何者か調べるためにハッキングをしたのだろう。

結弦もそういった行動に出るだろうと予想したため、追いかけてきた来たのだ。

因みに結弦は美琴のPDA端末を覗き見ている。

と言っても後ろから覗いている訳ではない。

能力を用いてPDA端末の画面から発せられている光を屈折させて目の前に投影させた上で、周りからは見えないようにしているのだ。

(「いた!」)

そうして、二人で端末の名簿から件の少女を見つけた。

(布束砥信。ぬのたばしのぶ 幼少期より生物学的精神医学の分野で頭角を現し、樋口

製薬・第七薬学研究センターでの研究機関を挟んだ後に本学^{長点上機学園}に復学

か・・・)

PDA端末上の情報を頭の中で復唱する。

「樋口製薬・第七薬学研究センター。ここで私のDNAマップを使った研究を・・・?」

(そういう事なのかな)

美琴は少しの考えた後・・・

「よし!ここに直接乗り込んで確かめてやるわ!」

(まあ、御坂さんならそうなるか)

結弦は事が進むに連れ、ある疑問が大きくなってきていた。

美琴(及び結弦)は夜の樋口製薬・第七薬学研究センターに来ていた。

あの後美琴は通っている常盤台中学の制服だった事からもしもの時に足が付きにくくなるように服を新しく購入し、ホテル(コインロッカー代わりに使用)で着替えを済まして現在に至る。

入口の守衛を点けていた小型テレビに影響を与え、気を引いた上で侵入していた。

(御坂さんといると、問題らしい問題はクリアされるな)

ある程度侵入した段階で施設内の情報収集をしていた。しかし、どうやって侵入したか。

美琴は能力を用いれば機械的要素は無効化されるため、問題無い。では、結弦はどうか・・・

実は結弦も見つからずに潜入という面において割と向いている能力と言える。

この研究所の警備は防犯カメラ、赤外線センサー、電子錠とガードマン等における人目の四つであった。

防犯カメラは言わずもがなであり、赤外線センサーに関しては本質が光である以上は比較的どうとでもなる。

そして、ガードマンは防犯カメラと同様である。

唯一の問題が電子錠であるが、美琴に付いて行動しているため、その問題が解決されている。

詰まる所この場面においては美琴以上に侵入に向いていた。

「おかしいわね。それらしい研究部署がない?・・・いや」

美琴(と結弦)は自身の端末に施設の見取り図を表示させていた。

(電源はあるのにLANが配線されていない隔離区画がある)

(あからさまに怪しいな)

美琴も方針が固まったのか、PDA端末から刺していたコンセントを勢い良く抜き行動しようとした時・・・

「誰だ!」

(!?)

見回っていたガードマンだった。

「・・・気のせいか?音が聞こえた気がしたんだが・・・」

(さっきのコードの音かな。潜入してる立場を考えると不用心だったな。多分自分は見つからないけど、御坂さんが見つかるると必然的に撤退だろうし・・・最悪御坂さんなら気絶させそうだけど、侵入の痕跡が残ると後に厄介事に発展しかねないか・・・どうにかして欲しいけど・・・)

結弦が手を貸す事も可能だが、この状況だとおそらく美琴に存在が

ばれる可能性が高い。

それはあまり望ましくない。

とそこで美琴が何か気づいた。

結弦は何かと思い視線の先に目を向けると・・・

「何だ。警備ロボか」

機械的音と共に施設内警備ロボがガードマンの前に姿を現していた。

美琴がとつさにガードマンから姿を隠し、どうしようかと考えている際に目線の先で発見した警備ロボを能力を用いて操ったのだ。

ガードマンも納得したようであり、ここから先は見回りを省いてしまおうと言っており、二人して安堵している時だった。

ブーと大きな音をたてて警報ベルが鳴り始めた。

「!?御坂さんはもちろん自分も反応しないはず。何かミスした?いや、他に侵入者がいる?それなら逆にチャンスだけど・・・」

二人のどちらかが何かミスをした可能性の零ではないが、その可能性は極めて低いと見ている。

ならば、他の侵入者にしても何にしても他の事に気を取られているなら逆にチャンスである。

美琴も同じ結論に至ったようであり、ガードマンを上手く振り切り奥へと進んでいったため、結弦もそれについて行った。

「……ね」

ガードマンを一度振り切ってからには特に問題なく隔離区画の部屋にやって来た。

「……」

美琴は一瞬躊躇ったようであったが、意を決して扉を開けたその先には……

「……」

「……」

「……」

「……」

「培養器？人間が入るサイズの培養器・・・」

二人にとある可能性が頭に浮かぶ。

「・・・」

美琴は部屋にある機会に目を向ける。

あの機械には実験のデータが残っている可能性がある。

美琴は恐る恐る機械に手を伸ばす。

そして、機械には求めていた情報が残っており、以下のように記さ
れていた。

超電磁砲量産計画『妹達』最終報告

本計画は超能力者を生み出す遺伝子配列パターンを解析し、超能力
者を確実に生み出す事を目的とする。

その計画の素体は以前DNAマップの登録させる事に成功してい
る御坂美琴である。

実験体に要する時間を短縮するため、投薬及び布束砥信の監修を得
て学習装置を用いる。

『妹達』を量産する準備は理論上は整ったため、成果の確認後量産体制
を整える予定であった。

しかし、計画の最終段階で樹形図の設計者の予測演算にて予想外の
自体が判明。

『妹達』の性能は素体と比べ一%にも満たないと判明。

遺伝子操作・後天的教育を問わずクローン体から超能力者を発生さ
せる事は不可能。

以上の事から本計画は損害を最小限に抑えるため、研究の即時停止
を命令の上、永久凍結とする。

美琴はこの報告を見て力が抜けてしまったのかへたり込んでしま
う。

「ははは・・・何よ。やっぱ私のクローンなんていないんじゃない」

一息つき落ち付いたのかゆっくり立ち上がり機械の電源を落とす。

「まあ、思うところはあるけど、過ぎた事を言っても仕方ないか」

美琴は一先ずは納得いたようであったが、結弦はとある感想を抱い
ていた。

いや、疑問が確信に変わっていた。

(おかしい。自分はこの事を知らなかった)

結弦は『観測者』として学園都市の裏事情の一端を垣間見ている。当然全ての情報を開示された訳ではないだろう。

本当の闇の部分は見せられていないだろうとは考えている。

しかしそれでも一端は見ているのだ。

その中には最初に開示されたパラメータリスト素養格付は勿論以前に怪しんだ『木

原』に関してや『暗闇の五月計画』なんて非道徳的な物まで見かけた。

そこまでの情報は開示されていたにも関わらず、結弦はこの計画を知らなかったのである。

たまたま見過ごした可能性もなくはないかもしれない。

しかし、ここまで大きな計画を見落とすような事は流星に気を付けている。

それなのに知らなかったのだ。

人間のクローン自体は確かに非道徳的な上にそもそも違法である。

見過ごせる事ではないが、凍結された計画ならわざわざ隠すような事ではないのではないか。

それなのに隠されていたのだ。

だとすれば考えられる可能性があるとするば・・・

(これだけで終わりじゃない・・・?)

しかし、仮にそうだとすれば何故今情報が開示されたのか。

情報操作をしているのはアレイスターだ。

偶然ここで知ってしまったなんて事は有り得ないだろう。

ならば、このタイミングで情報を知ったのは偶然ではないだろう。

(今回は依頼がない・・・か・・・)

現状の改めて考え直し思わずため息が出てしまっていた。

「寮監に門限破りがバレない内に帰ろう」

美琴がさつきと部屋を出て行き脱出を始めているのを見て、それについていこうとした時・・・

「こっちだ」

美琴が進んだ反対側から声が聞こえた。

おそらくはガードマンだろうが、警備は省略したのではなかったか。

そもそもガードマンは「こつちだ」と言ったのだ。

(新人案内?それとも・・・)

結弦は思わず足を止めガードマンを待っていた。

そして、姿が見えたガードマンと一緒にいた人物が目に入り思わず息を飲んだ。

そこには反対側に走っていったはずの御坂美琴がいた。

クローン

「この中だ」

「ありがとうございます、とミサカはお礼を告げます」

ガードマンと一緒にいた御坂美琴は案内より先程までいたはずの部屋に入り、機械の操作を始めた。

その一連を見守りつつ結弦は冷静さを取り戻しつつあった。

(御坂さんの訳ない・・・よね？ガードマンと一緒にいるのも変だし、服装も違う。本人の雰囲気も何か違う気がする。となると・・・)

ここまで考えると可能性は一つしか思いつかなかった。

(『妹達』^{シスターズ}。つまりはこの人が御坂さんのクローン・・・)

そう結論付けてから結弦は改めて目の前の少女を注視する。

(・・・どこから見ても普通の人間にしか見えないな・・・人間のクローンだから当たり前と言えども当たり前なのか?)

知識としてはクローンというものを理解できている。

山羊などの動物のクローン自体は様々な実験でも使用される事例はみたことがある。

しかし、人間のクローンは現在違法である以上基本見るのは初めてなのだ。

基準がない以上は目の前の少女を基準とするしかないのだ。

「おーい、作業はどのくらいかかるんだ?」

部屋で作業をしている少女に、外で待機しているガードマンが話しかける。

「完全消去まで四二・二八秒、とミサカは正確な時間を報告します」

(データの消去に来たのか)

目の前の少女は部屋の機械類から先程美琴と結弦が見ていた『妹達』に関するデータの消去に来たようだった。

考えてみれば当然である。

本当に『妹達』だけで終わらないしろ終わるにしろ『妹達』計画は凍結されたのだ。

違法である人間のクローンを生成していた事が表沙汰なる事はマ

ズい。

故にデータを消しに来たのだろう。

結弦はすでに実験の概要は確認したので、最悪消されても問題ない。

今はそんな事よりも・・・

(これでクローンの実在はほぼ確定。しかし、逆に他に何かある事も濃厚になってきたかな)

報告書から見ても『妹達』はここ最近での実験ではない。

それなのに、この場に存在しているのだ。

何か他の用途があると考えるのが自然だろう。

「・・・お待たせ致しました。データの消去が完了しました、とミサカは報告します」

「お！終わったか。じゃあ、ついて来てくれ」

そうこう考えている間に目的を終えたようで、ガードマンに連れられ、部屋を離れていく姿を見て、結弦は考えるのを一先ずやめ後ろからその姿を追った。

「想定より少々遅くなってしまいましたね、とミサカは夜空を見ながら一人言を呟きます」

(・・・)

現在結弦は件の少女について街中を歩いていた。

元々結弦にとってセキュリティでの問題は電子錠だけであった。

侵入の際の行きは美琴がいたために問題はなかったが、別に電子錠さえクリアすれば美琴でなくとも問題ない。

目の前の少女はガードマンからゲストカードを渡されており、目的が終われば施設から出て行く立場のはずだ。

そう考えたのもあり、脱出する美琴にはついて行かずに少女の方についた。

実際結弦は無事施設から出られており、現在に至る訳だが・・・
(しかしどうしたものかな。多分まだ存在はバレていないからこのままつければ目の前の少女が本当に『妹達』なのかも含めて、何が目的

かを知れる可能性は高い)

結弦はすでに実験は『妹達』だけで終わらないとほぼ確信していた。冷静に考えればそのヒントもあつたのだから当然である。

先程美琴と布束砥信ぬのたばしのぶの会話の中でマネーカードを撒く事で実験を阻止出来るかもと言っていた。

もし実験がクローンを作る事であるならばそんな事で阻止できるはずもない。

ならば、その先の実験を止めるための行動のはずだ。

結弦としては『妹達』でさえあまり快くは思っていない。

しかしだからと言ってすでに生まれて来たクローンをどうしようしようとは考えていない。

『妹達』というクローン計画を良く思っていないだけで、クローン自体には罪はないと考えている。

だが、それはあくまで結弦の考えであり、学園都市がそんな考えだとは思っていない。

学園都市の闇ならば、目的のためならばクローンはおろか人間ですら切り捨てかねない。

『妹達』にその先にある実験がそんな実験であるなら止めたいし、止めるべきなのだが・・・

(そもそも目的を知れたとして止められるものとも思えない。何よりこのままつけたとしても目的が知れるかも疑わしいところでもある) 少なくとも今までアレイスターに隠されていたのであろう計画である。

部分的には見えてきた今であっても、アレイスターからはともかく学園都市全体が情報開示したとはとても思えない。

ならば、何かしら対策がされている可能性も十分にある。

更に言えば、情報開示をしたのであろうアレイスターにしても、今まで通りの行動をしてはいつまでたつてもこのままである。

(虎穴に入らずんば虎子を得ずとも言うけど・・・自分が出来る行動なんてたかが知れてる。どう動こうが想定範囲内ではあるだろうけど、そろそろ地道に小さな抵抗をしていく事にしますかね)

そうして、結弦は今日の所は帰路につくこととした。

「別の道を取ると言っても、問題は今は夏休み中だつてことだよな」
翌日、結弦はとある建物の前に来ており、その建物には風紀委員九ジャッジメント一支部と書かれていた。

ここに来たのは情報収集のためだ。

というのが、今回の事の詳細知るために昨日見たクローンではなく布束砥信、何か事情を知っているらしい彼女を当たってみる事にしたためである。

（確実に会う手段がないのが問題だよな。あまり巻き込みたくはなかったけど、仕方ないか。これ以上後手に回るのは避けたい所だし、自身の手持ちがない以上使える手札は使うか。幸い今回は自分個人での動きだから向こうにかかるリスクも低いだろう）

長点上機学園はエリート思考も非常に高く、そのためにセキュリティも非常に強固な物であり、一部では軍事施設にも引けを取らないとまで言われている。

現状手札が少ない結弦ではそんな学校の生徒について調べるのは難しい。

故に風紀委員の情報網を利用させてもらおうと考えたのだ。

結弦が建物の中に入って行きドアをノックするとすぐに返事と共にドアが開いた。

「お、来たか。まあ入れ」

「急に悪いな、古鉄」

中から出てきたの昨日も会った風紀委員の古鉄だった。

「気にするな、昨日の今日で情報提供が貰えるなら有難い限りだ」

今回のこの件に関してはアレイスターからの依頼ではないため、そちらを頼る手もないわけではないが、学園都市の闇が関わって来る事でありアレイスターを頼るのは得策とは思えない。

何よりアレイスターに借りになるような事柄は避けるべきだと考えていた。

今欲しい情報はあくまでいち学生の居場所なのだから風紀委員で事足りると考えた訳である。

「今日はお前一人？」

「いや、あと一人いるが今は出てる」

中に通された結弦はソファアに座るように促され、しばらく待つているとお茶を出される。

「よかったのに」

「そういう訳にもいかないだろう。で、早速で悪いがマネーカードをばらまいている人物を見たつてのは？」

マネーカードがばらまいて件。

結弦がこの場に来る前に古鉄に伝えたのはその件だった。

風紀委員が動くほどの事柄になっているのであれば、十分に価値がある情報である。

その犯人を見たと言えば協力を促せると考えたのだ。

友人を利用するようで申し訳ない気持ちはあったが、互いに利益があるのだから許して貰おうと心の中で言い聞かせていた。

「実は・・・」

「それではご注文が決まりましたらお呼び下さい」

ウェイトレスはメニューを渡し、席から離れて行った。

「注文はもう一人が来てからの方が良いか？」

「まあ、すぐ来ると思うしそれでも良いんじゃない、任せるよ」

結弦は古鉄と一緒にファミレスに来ていた。

と言うのも・・・

「いらっしやいませ」

店員達はその声に反応し、入口に目を向けると二人と待ち合わせしている人物の姿があった。

「布東さん。こっちです」

名前を呼ばれ布東が席へと近づいてくる。

「sorry、待たせたかしら？」

「いや、今来たところなんで大丈夫です」

形式的とも取れる挨拶と注文を済ませ、一呼吸置き古鉄が本題に切り出す。

「さて、布東砥信さん。急にお呼び出して申し訳ありません。こちらに来る前にも説明されたかもしれませんが、近頃話題になっているマネーカードの件を確認させていただきたいのですが・・・」

古鉄が言った通り、呼び出したのは古鉄であるが、実は直接連絡したのは別の人物であった。

元々風紀委員が学園都市に住む学生達によって構成される治安組織である。

ならば、長点上機学園の生徒で風紀委員を行っている学生もいる。風紀委員というネットワークの中でそこを利用したのである。

当の本人は何やら都合が合わないとのことでの場にはいないのだが・・・

「・・・why、どこでそれを？」

「こいつから聞きました」

そう言いながら古鉄に刺されたため、結弦は軽く会釈して返す。

「昨日あの場にいた件は言いましたよね？その過程というか原因を見てたので。現在ちよつとした問題になっている事はこの古鉄から聞いてたので、余計に心配だったんですよ」

結弦は布東に対し、補足説明をする。

決して嘘は付いていないし、矛盾点等も生じないはずである。

「・・・ok、それで具体的な内容は？」

「今日はお忙しいところありがとうございます」

「元はと言えば私が撒いた種でしょ？問題ないわ」

「そう思うのでしたら今後は控えて下さいよ」

三人が話し合いを終え、ファミレスを出た頃にはもう夕方になっていた。

「・・・そうね、研究者として言えば少し不満がないと言えば嘘になるけれど、今後は自粛するわ」

結果から言えば、実験の一環との事だった。

布束は専門とする生物学的精神医学の分野における精神面での変化を確かめるために、マネーカードをばらまいた上での人々の反応及び経過の観察を行っていたとの説明をされた。

彼女は研究者として名を挙げた学生の一人だ。

しかし、マネーカードをきっかけに暴力沙汰にまで発展しているとなれば考える必要があると思っただろう。

研究者という人種上研究の妨げなる事は許容されない可能性考えていたが、その辺りの事も考えられる常識は考慮出来るようであった。

「では、風紀委員各所への報告があるので俺はこの辺で。もしかしたらもう一度くらい事情聴取あるかもしれないので頭に入れて下さい」

「・・・面倒ね。however、仕方ないわね」
「空目もありがとな」

古鉄はそう言い残し行ってしまったため、結弦と布束だけがその場に残る。

「・・・」

少しの間沈黙が続いたが・・・

「why、火事の事を言わなかったの？」

「特に言う必要を感じなかっただけです・・・って言うのもありますが、もう一つの理由が本題なのが若干いやな所ですね」

「もう一つの理由？」

「ええ。この後もう少し時間ありますか？」

「・・・何でかしら？」

「実はもう一つ訪ねたい事があります」

「？」

布束は結弦の目的が掴めず首を傾げていた。

結弦はそんな布束の目を見据えはつきりと告げた。

『妹達』についてです」

結弦の発言を聞き布束は目に見えて驚いていた。

「あなた一体どこでそれを・・・もしかして御坂美琴？but・・・」

「自分が知っている事や経緯はお話します。その代わりに布束さんが知っている事を訪ねたいんですよ」

結弦と布束は人気のない公園に来ていた。

先程までファミレスにいた以上再び入るのは不自然だし、もう夕方である。

本人達が気を配ればそうそう他人に聞かれる事もないからだ。

「それであなたはどこで彼女達の事を？」

「知ったのは昨日あなたをお見かけした際ですよ」

「why、どういう事？」

「答えはこれです」

結弦は右人さし指立て、光源を作り出した。

「専門じゃなくても、あなたならこれで分かりますよね？」

「・・・光・・・もしかして初めからいたの？」

「ご明察です。あの場で嘘をついたのは気まづかったからです」

「・・・」

「どうかしました？」

布束は何かを考えているようであったため、どうしたのかと思い確認を取る。

「あなたが最初からいたのであれば御坂美琴との会話で実験に関する事を断片的に聞いていたというのは分かるわ。but、それでは本題である『妹達』の説明がつかない」

「・・・自分の能力は正式名称は【光源操作^{トリックライト}】と言います。その本質は光そのものの操作です。つまりは自分に当たっている等の制限はありません。流星に距離的な限界はありますがね。つてここまで言えば考えられる可能性がありませんか」

結弦はそう問いかける。

布束は再び考えて数秒の後・・・

「surely、私が燃やした資料を見た？」

「ご明察です」

結弦は布束に笑みを浮かべながらそう返しながらも・・・

(良かった。どうやら賭けは成功みたいだな)

内心安堵していた。

というのは結弦は燃やした資料の内容など見ていないからだ。

布束に説明した通り、能力を用いれば内容を見ること自体は可能だ。

そこは決して嘘ではない。

しかし、あの場ではそんな事をする前に資料を燃やされており、内容を見ることなく終わったのだ。

故に賭けに出たのだ。

燃やされた資料に『妹達』の事が書かれていたという賭けに……結弦の中でもう一つアプローチの方法は考えてはいたのだが、この方法が総合的に勝算が見込める上で、リスクが少ないと判断したのだった。

「well?何が目的?」

「目的ですか……」

「その事を教える代わりに教えてもらいたいのではなかったの?」

「そうですね。彼女達は何者ですか?っていうよりは実験って何ですか?」

「……」

【妹達】自体は【超電磁砲】こと御坂美琴さん、というか超能力者の量産が目的である事は知っています。でもそれだけではないですよね?」

「根拠は?」

「それだけだと昨日あなたが御坂さんと話した時の死角を潰す意味があるとは思えない。そもそもクローン自体に思う事がありますが、それだけなら実験自体を止めようとする意味が研究者としての立場上あまりないと思いますから」

「……それ以上のものが潜んでいたとして、あなたはどうするつもり?」

「内容にもよりますが、多分実験を止めにかかると思います」

「それならやめておきなさい。会話を聞いていたなら知っているで

しよ？御坂美琴、超能力者でもどうにもならないと言ったはずよ。あなたどんなに良く見積もっても大能力者が限界でしょ。たかだかその程度の一般人が首を突っ込んでどうにかなるレベルの話ではないわ」

「でも、あなたはどうにかしたいとは思ってるんですよ？それなら多少なりたとえ一%未満でも解決の確率を上げる手札を増やすのは悪くはないと思いますけど・・・」

「現実問題どうにか出来るとは思ってないわ。ただ、私の気持ちを晴らしたいだけよ」

そう言い布束は背を向けた。

「こちらが教えた事に対する見返りを頂いてませんか？」

「そうね。but、教えてくれたらこちらでも教えるとは言っていないわ。それで納得できないなら、忠告が見返りと思っておきなさい」

そう言い残し布束は歩を進め始めた。

(やっぱり『観測者』という立場を利用すべきだったかな？)

結弦がもう一つアプローチ方法として考えたのが、実は『観測者』だった。

『観測者』は統括理事長に直接繋がっている存在である。

しかし、表立っていない存在であろう事から信じてもらえるかの問題があり、仮に信じてもらえても結弦がそうであると証明する手段がない。

そもそも、他人に話した場合にアレキスターが流石に黙っていない可能性だってある。

そう考えた場合、あまりにリスクが高い。

「全く立場上の制限が多いな」

そう愚痴をこぼしながら布束の背を見送っていた。

布束を見送り、一人になった結弦は今後どうしようかと考えていた。

(さて、これで自分が個人で使える有効な手札はもうない気がするけど、このまま引き下がる訳にもいかないし、なによりほっといたらいい

けない案件だと思おうし・・・)

結弦はその場で考えをまとめ、そして・・・

(まあ、仕方ないパトロール作戦かな。多分自分の想像通りであれば、進展が望める可能性は高いと思うし、あまり頼ってこれ以上後手に回りはたくはなかったんだけど、置いて行かれるよりはマシとみる事になりますか)

実験

八月十五日

結弦はビルの上で佇んでいた。

と言うのも……

「はくこりや予想を外したのかな」

数日前に布束との接触を行い『妹達』シスターズに関しての情報を得ようとしたもののあまり有益な情報は手に入らなかつたため、パトロール作戦、つまりは学園都市中を見回りを行っていた。

それまではともかく今現在は結弦に対しての情報の封鎖はされていなく、開示された。

であれば、結弦に情報を与える必要がある、そこまでいかなくとも意味はある。

ならば、中途半端で終わらない。

事の顛末くらいまでを見届ける事までは可能であろうと踏んでいた。

だから、学園都市の色々な場所を回っていれば、次の情報の開示や何かしらのきっかけを与えられると考えたのだ。

とは言っても、この手段は出来れば使いたくなかつたのが本音である。

相手からの情報開示に頼るという事はその分後手に回るだけどなく、捉えようによつては相手に借りを作る事を意味するのだから……（いくら打つ手がなくなつたと言つても流石に……手札があまりに少なすぎるな。『観測者』と【光源操作】トリックライトという手札に関しては有用な手札であるとは踏んではいるけど、この二つ関しては現状その価値が正確に分かつてない……後は超能力者レベルに到達し得るつていう価値くらい……実際何も手札ないに等しいのかな？）

『観測者』という立場を提案され、話を受けてその上で今までやってきた。

勿論利用される事は始めから分かっていた。

その上で自身の目的も果たす。

簡単に出来るとは考えていなかった。

何より今は準備期間という認識でいる。

しかし、だからと言ってその期間において何をしても良い訳では当然ない。

後々の事を考えれば出来る限り自身の力で乗り切るに越した事はないのだ。

今回は特に依頼された訳ではないのだから……

結弦は一度盛大な溜息をついた後に……

「クロウリーさん、どうせ聞いてるんでしょ？何かご提示頂けませんか？このまま引き下がるのもあなたの計画を崩す意味では有益な手でしょうが、それはお互いに不利益でしょ？」

結弦がそう口にしても何か返答がある訳ではない。

しかし、後は待つて結果を待つしかない。

(はくこ)までがおそらく計画だよな……本当にこんな人を相手にしながら自分の目的果たせるのかな)

結弦は思わずもう一度盛大な溜息をついた。

あれから夕日が落ちようとしていた。

先程至った結論の通り後は待ちの態勢であろうと決めた。

だがそれでも後は完全な他人任せになれば本当の意味での進展は望めない……が常に気を張っていても身がもたないのも事実である。

故に……

「こんなもんかな」

あの後しばらくはパトロールを続けていたがある程度で切り上げ、現在は買い出しの帰りであった。

「諦めて他力本願になったにのほほ良いけど、本当に続きがあるのかな……」

空を見上げながらそんな事に思いをはせていた。

結弦は現状打つ手がないが故に、受けに回った。

しかし、それ以降進展が見られないのである。

確かにアレイスターからの情報提示を求めたからと言ってすぐに

渡されるとは限らない。

そもそも、いくら受け身に回る事にしたとしても何でもかんでも任せる形では本当に理想とする未来なんかには届くわけがない。

今の状況で何を今さらと思わなくもないが、そうであつても自身の信念や目的だけは捨てたらいけない。

本当にそうなつてしまえば終わりである。

元々操り人形になる事は覚悟していた。

受ける恩恵は大きいものだろう。

それでも最終的に目的を果たせ、恩恵を超える借りを作る事が出来れば良いのである。

そのために今出来る事はもちろん、利用できるものは利用する。

どんなに惨めでも食らいつく。

そもそも、スマートに事を運べる程の地位も力も手段も何も持っていないのだから……

そう考えているが故に縋ったからには何としても結果が欲しい。

少なくともアレイスターに対してはそれくらいは求めても許されるだけの価値はがあると踏んでいる。

それなのに、進展がないのだ。

少なからず不安にもなるだろう。

(手札は一応あるのに利用しきれないっていうのが、正しいのかな……もどかしいな)

一先ずは待つしかないのなら今日の所はここいらで退散するべきだと結論に至り結論付け帰路につこうとした時……

「あら？あなたは……」

そんな声が耳に入り、目を向けてみるとそこには布束がいた。

「数日ぶりですね」

「そうね」

結弦は情報に繋がる手掛かりはやはりこの人かと思いつながら、どう切り出したものかと考えていると、意外な事に布束の方からこの後時間があるかと聞かれたため、申し入れを受け入れ現在は二人でこの前

のファミレスに来ていた。

結弦としては断る理由は布束の方から引き止められるとは何事か
と思っっていると……

「空目結弦……」

「……はい？」

唐突に名前を呼ばれた。

「第七学区にある星間高等学校所属の一年生で学内においては三人しか存在しない大能力者^{レベル4}の一人であり、その能力は光源操作^{トリックライト}……で間違いなかったかしら？」

「……間違いはないですが、学校関連の事は自分の学校はそちらと違って比較的ゆるいというかオープンしてる部類だから良いとして、能力とかはなんかプライバシーとかの問題を言いたくなるのですが……」
「now, あなたもしていた事でしょう？それも今あなたが言った通りそれが難しい長点^学上機^校学園に対して」

「言われてみればそうですね、反論をしようもないです。ただ、自分の場合は先日お伝えした形でそちらをお見かけしていますし、お話をお聞きしたした時に一緒にいた風紀委員とは友人です。そういったコネを使っただけなんです……」

「確かにそうね、but, 前提が間違っているわ」
「前提？」

布束はテーブルにある自身のコーヒーを一口のみ一拍置いてから……

「そもそも、あなたは本当に偶然居合わせたの？」

「なるほどそこを疑ってるんですね」

「改めて考えると腑に落ちない点がいくつかあるのよ、御坂美琴があの場にいたことも含めてね」

「確かに疑いたくもなる状況ではあるかもですね」

指摘されて結弦が布束の立場でも疑うだろうと思う。

御坂美琴を素体とした『妹達』の計画の主要人物として関わっていた布束が偶然居合わせた人物がその御坂美琴その人であったのだ。

もちろん本当に偶然だという事も決してゼロではないだろう。

しかし、仕組まれたものだとも考えられるだろう。

ただのその辺のいざこざならともかく、学園都市の闇が関わっている出来事なのだから……

「でもなんで自分にも？確かに『妹達』の事はこちらから切り出しましたが、それは能力によるものです。この間実演もしましたし、調べられたなら分かるはずですが……」

「そんな都合よくあの場にあなたのような能力を持った人物が通りかかるかしら？」

そこまでのやり取りの上で、数秒の沈黙の上で沈黙を破ったのは結弦のため息であった。

「これ以上は不毛ですね。自分としても今のこの現状においては特に隠す意味もないですし」

「結局の所あなたは何者なの？」

「何者かですか……」

布束のその質問に対する回答をどうしたものかと考えていた。

確かに前に布束へのアプローチ方法として『観測者』というのは考えた。

しかし、その立場名を安易に出して良いのかとも考えている。

以前『観測者』の依頼を受ける際に雲川芹亜くもかわせりあは言っていた、「おそろくお前の考えは正しいよ」っと。

あの時の自分の考えを正確に読み取られていたのであれば、裏を返せば少なくとも一般人には立場を簡単に明かすものではないともいえないか。

少なくとも結弦自身は元々そんなに簡単に明かすものではないと考えていた。

いったいどこまでなら明かしても問題ないのか。

「……明かせないならそれでもいいわ。それに今までのやり取りで少なくともただ一般人ではない事は分かったから……というよりむしろ大丈夫なの？」

「？一般人ではない事を明かしてしまって事ですか？それは問題ないはず。ただどこまでお話出来るかがイマイチ自分も把握しきれ

ていない程度の立場ってだけです。ただ、一つだけ訂正があります」

「何かしら?」

「あの場居合わせたのは少なくとも自分は狙った訳ではありません」

「so...」

結弦のその答え聞き布束の声のトーンが一段下がったような気がした。

「...もしかして何か頼むつもりでしたか?」

「why?」

「後から自分が一般人ではないのではないかと考えたとしてもわざわざもう一度接触を試みようとは思えないかと思っただけです。自分をあなたからみて不都合な存在だと疑った可能性もありますが、そんな感じのように見えたので」

結弦が先程居合わせた事に関する反応は考えが察せられ焦った上で憂いがなくなつての安心というよりは期待に反した事に落胆のように見えた。

「...確かにおそらくそちらが望んでいる程の人物ではないのでは事実です。でもそれでもあなたが望んでいる側の人間ではあると思つてます」

「...」

「自分はいろいろな制限設けられているはずですし、出来る事には限界があります。それでも少なくとも可能な限りお力になれたらとも思っています」

「具体的な立場も明かせない程度の人物を?」

「豚も煽てりや木を登る...いや、猫の手も借りた方がいいですかな。猫程の力もあるか怪しいですが...」

そう言いながら苦笑いを返した。

しかし、すぐにしっかりと布束の目を見て...

「それでも、仮に力になれないとしても、その先にどれ程険しい道があったとしてもその道を進む覚悟は持ち合わせているつもりです。それに何よりいずれば歩かざるを得ない道のはずですから...」

「さて、ぼちぼちいい時間だけど・・・」

結弦は完全に日が落ちた夜の学園都市を見渡す形でビルの屋上にいた。

夕方に布束と話した際、まだ完全に信用された訳ではないだろうが、次の段階の道しるべになりそうな話を聞けていた。

それが・・・

「私も今の実験に関しては正直あまり詳しくはないわ。ただ、『妹達』の野外研修の段階までできてから実験もすでに野外で行われている。then, 夜間に学園都市を動き回ればぶつかると思うわ。実験が何なのかは自身の目で確かめてみなさい」

との事だった。

「結局は待ち・・・少しばかり堪え性がなかったのかな？」

布束と話せた事自体は確かに進展と言えるだろう。

言えるだろうが、結果だけ見ればパトロールを継続している事と同義である。

その上で事が起こるのを待つという形になってしまっている。

それならば、もう少し自力でパトロールを続けていても同じ結果になっていたのではないか・・・

何より一番の問題点となり得るのが、結弦が布束に会ったのはアレイスターに情報提供を求めた後だと言う点である。

実際の所は定かではないが、現在の状況から見ると、アレイスターからの情報提供から今の状況が生まれたという構図が成り立ってしまっている。

そうなってしまった以上はアレイスターに貸しを作った事になるのは避けられないのである。

(まあ、切れる手札がない以上は仕方ないと言えば仕方ない部分はあるけど、素直に受け入れてたらダメなものも事実な訳で・・・何か有効な手札を手に入れたらいいんだけど、どうなる事やら)

そんな望みが薄いであろう事を考えていると・・・
どおおおんと大きな音が聞こえた。

「あれは爆発?」

結弦が音の方向に目を向けると遠目に煙らしき物が目に入った。

「あれかな?しかし、広範囲を移動しすぎたかな。結構遠いな」

そんな事を思わず眩きながら爆発の中心地へ向かった。

結構遠いと言っても能力を用いれば(目撃されるのはマズいと考えているため、目撃されないために姿を隠すのに演算能力を割いてるとはいえ)せいぜい1〜2分もあれば到着する距離である。

そうして着いた現場を見渡してみれば、すぐにおそらく爆発の原因であろう張本人たちは目に入った。

(妹達は当然としても、もう一人はまさかの一方通行アクセラレータときたか・・・)
『一方通行』

学園都市の頂点に位置する超能力者レベル5の一人にして、その第一位として君臨し、その能力はベクトル変換である。

自身が触れているあらゆる物のベクトルの自在に操る事が出来る。(確かにこれは仮に一方通行単体で考えても、御坂さんでもどうしようもないかもしれない。自分如きが協力しても焼け石に水だろうけど・・・)

そう考えながらも苦悩していた。

と言うのも目の前の光景にあった。

一方通行が片足の妹達の一体を相手にしているのだ。

「よオ、まだ逃げんのかよ。つってもそつちは行き止まりだぜ。それともまだなんか奥の手でもあんのかよ」

一方通行はそんな事を妹達に語りかけている。

そして状況から見ても遠くない内に殺してしまうのだろう。

いやそもそも、詳しくは分からないがほっておいても死んでしまう可能性すらあるように見える。

そんな状況を楽しんでいる風すら見える。

結弦の性格上この状あ況自体はとても看過出来るものではない。

出来ることなら今すぐに止めに入るべきだ。

それは頭では理解できているし、気持ちの上でもそう思っている。しかし、理性が働いていた・・・いや、働いてしまっていた。

一方通行は超能力者の第一位である。

超能力者に付けられている序列は単純な力だけで判断されているものではないが、少なくとも最強クラスである事は間違いない。

なまじ相手の能力も知っているからこそ、嫌でも叶わないであろう事が分かってしまうのである。

そして何よりの理由が今までとは異なる事情が存在する。それは自分個人で動いている点である。

『観測者』としての活動には後ろ盾が存在した。

ここ最近本格的な活動の中でもステイルⅡマグヌスや神裂火織にアウレオルスⅡイザードと魔術師という新たな存在に知る事で新たな人物と接点を持ち、アウレオルスⅡダミーに関しては直接戦闘を行った。

アウレオルスⅡダミーに関しては辛うじて勝利出来たが、魔術師達本人たちと戦闘を行った場合勝てたかと聞かれれば正直自身がない。

寧ろ負けていた可能性の方が高かっただろうとすら考えている。

少なくとも結弦は自身がその程度の実力しかないと思っっている。

しかし、今まではアレイスター経由の仕事である以上ある程度ではあるだろうが、身の安全は保証されていると考えている。

そうでなければわざわざ『観測者』を頼む意味がない。

当然それでも立场上ある程度の危険は承知の上、『観測者』の話を受けた時点で命の危険も覚悟しているし、今更死ぬかもしれないという理由を言い訳にするつもりはない。

だが、仮にいまここで結弦が間に入ったからといって解決するのかわかれれば、まず間違いなく「No」である。

上手くいけばこの場合は切り抜けられる可能性はあるかもしれない。しかし、おそらくはこの問題の根本の解決にはならないだろう。

下手をすれば、計画の根本を担っている輩たちを刺激する事になり、事がさらに大きくなる可能性すらある。

この考えは間違つてはいないだろう。
それでもこれも極論を言えば、この考え自体言い訳ではある事は分かつている。

しかし、そう言った考えが頭を過りブレーキをかけてしまつてい
る。

(おそらくこの事まで分かつた上で動かされているんだろうな・・・)
アレイスターのそう言った思惑だけははつきりと理解できた。

それこそ手に取るとように・・・

「・・・もオいいや、オマエ。終わりにしてヤンよ」

(っ!?)

一方通行のそんな無情な声だけは頭に響くかのように聞こえてい
た。

そして次の瞬間には近場にあつた巨大なコンテナが持ち上げられ、
そして妹達に無情にも轟音と共に振り落とされていた。

「本日の実験しゅーりよオー。結構ハデに暴れちまつたがアイツらで
片づけられんのかねエ」

(・・・実験ね・・・アイツらつて言うのは妹達のことだよな・・・)
はつきり言えば薄情ものだろう。

それでもこの事を見過ごす結果になつた以上は次に繋げなければ
意味がない。

故に現状の理解にその上でこの実験を止める手段を考えなければ
ならない。

せめてそうしないとそれこそ報われない。

ガガガガガガガツ!!!

(!?・・・何?)

結弦がそんな考え事をしていると一方通行が通つていた横にあつ
たコンテナが大きな音を上げた。

(あれは・・・)

「ああああああああ」

そして次の瞬間美琴が大声を上げながら一方通行に向かつて行つ
ていた。